

星になりたくて
月になりたくて



でもなれなかつたおとこのお話し

著 飛鳥世一・編 鳥井信宏

目次

■幼少編

ショートショート『えん嗟』本文	339 字	3
独白型ショートショート『小説貧乏』	244 7 字	8
世一、詩する『詩編雨に詩えば』		12

■少年編

“poetel” 短編小説 <i>Fae Trap</i>		14	
小説『凍裂』		22	
異端の KARAS は闇夜に二度啼く		29	
時刻(とき)の物語り 詩編	令和6年7月30日	13時50分	40
小説七日 (<i>namoka</i>)		43	

■青年編

小説『細氷』17才のダイヤモンドダスト		84	
エッセー・随想好日『私の中のなにかが死んだ日』		97	
劇詩する『詩編竿屋のこえ』		101	
時刻(とき)の物語り 詩編	令和5年8月12日	10時6分の「下書き」から	102
■そして			
詩する『食葬 (CANNIBALISM)』		105	
時刻(とき)の物語り 詩編	令和4年12月1日	12時30分	108
時刻(とき)の物語り 詩編	令和5年2月8日	10時23分	110

ショートショート「小説・尋常なる異常という日常」	113
随想好日『河井寛次郎という哲学者』	118
小説『VANITAS』	124
■抱え持ちゆくもの	
夢殿・笑うひと泣くひと(第三形態)	172
韻文詩する「また会いましょう冬至に」	177
夢殿『秋涙』令和六年版(第四・三形態)	178
小説夢殿「秋涙」付録作品『なごり藤』	203
エッセー 不染鉄「夢殿」とわたし	207
詩する詩編『道程』	210

■ 幼少編

ショートショート『えん嗟』本文3399字

食事前の猶予と言う家族の肖像画…… 声にだすことなく、僕はタイトルを黙読した。幾度も幾度も声にはださず目視で字面を追う。長いタイトルである。「食事前の猶予と言う家族の肖像画……」僕は何度もタイトルを反芻する。声に出してしまおうと、オールドマスターの作品に冠したタイトルの「本質」が煮崩れしだし、溶けだした馬鈴薯か何かのようになってしまいで怖かった。それだけは避けたかった。画を愛でる者として。

掴めそうで掴めず、実態はあるもののヌメヌメとした質感を纏った鰻のようでもあり、何処か掴みどころのない「食事前の猶予と言う家族の肖像画」というタイトル****。

【この作品は、サスペンスかミステリー……いや寧ろ、ホラーかもしれない】

62歳の誕生日を三日後に控えた今日この頃。ついに幾許かの混濁を感じはじめた記憶の中、トラウマが主張しはじめる。

【ほらほら、やっと思いついてくれたかい。覚えてるだろう。ほら、あれだよ。大っ嫌いだったじゃないか。】

あわよくば、跡形もなく煮崩れしてほしかった記憶。後に家族という言葉が呪詛にも思えたあの日の記憶がヌメヌメとした肌感をともない、僕の記憶に纏わりつく。

僕はインターネット上の美術系サイトのネットサーフィンを楽しんでいた。足掛け2年に渡る膝炎による痛みを市販薬で抑えながら、好きな絵画を探してネット上を彷徨い渡る。

一枚の画でクリックの手が止まった。いや、正確には画ではなかった。文字列** | ** | タイトルを眺めたところで手が止まった。

「なんだ……このタイトルは……」

僕にとっては手を止めるには十分すぎるタイトルだった。躓くには十分すぎる文字列。

一瞬にして「猶予」という言葉の持つ奥行きと、およそブワブワとした時刻(とき)の躪しを感じようと五感が聞きを見せはじめ。

視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚、そして僕の大好きな超感覚(第六感)。

絵画を愛でるのに五感というのは分らない。というお人もおられるか。

そういう手合いは学者向きなのだ。感動を好物とする者は五感を磨くことに余念がない。味わい尽くすのだ。

【1602年の作品、ということはタイトルは概ね後付け。画家自らが名付けたタイトルとは考えにくい】
僕の眼は、画を追うことなくタイトルを追いつつ続いていた。

17世紀以前の著名な画家たちの作品群をオールドマスターと呼ぶのだが、この時代の画家たちは、自らの作品にタイトルをつける習慣は無かったというのが定説となっている。その後、オールドマスターの作品にタイトルがつけられるようになったのは、18世紀に入ってからであり、絵画が一般大衆の娯楽文化として認知される機会となった、オークションが賑やかとなりだしてからでもあった。

【画を売るに、説明するにもタイトルがあった方が色々都合が良かったのだろう*** それにしても……タイトルをつけた者は何故こんなにも長いタイトルをつけたのだろう。そして何故、猶予という言葉をつける必要があったのだろうか】僕は「猶予」という言葉に云いようのない不可解な躓きを感じていた。

【画の中に「猶予」に通じるヒントがあるというのだろうか……】

主張をはじめたトラウマに見て見ぬふりを決め込みながら、無理やり僕は意識を「猶予」という言葉の意味に向ける。結局はトラウマに通じてくることも知らぬままに。いや……寧ろ、牛蒡の根っこのようにキリ際限なく地中深くまで掘り進めることへの予感から遠ざかるうとでもするように。

無駄な足掻きという文字列が灯っては消え、灯っては消えを繰り返す。

「猶予」という言葉の意味を探るため、画に見入る。

云わんコッチャナイ。無駄なあがきであったことを痛感する。トラウマが既視感を伴い脳裏に去来する。

昭和42年、僕がまだ幼稚園児だったころ。僕は北海道の港町、小樽に住んでいた。幼稚園は当時小樽でも名門と云われた小樽幼稚園に通っていた。

小樽は母が育った町であり、母の実家は当時の小樽では名家として名高かった。家業は「歯科医」であり、七人兄妹の長男は、北海道大学を出た北海道でも名を馳せた超がつくほど有名な外科医（後に隻足の外科医）として成功していた家系だった。男兄弟4人は全員、名門小樽潮陵高等学校から国立大学、北大、横浜国大と頭良しばかり。女三姉妹はこれまた当時の女学校の名門、小樽双葉出身。

僕の自宅は小樽幼稚園の学区からは随分遠かった。バスで乗り継いでゆこうとすると1時間はかかる距離。行きは毎日父が幼稚園まで送ってくれた。帰りは自宅には帰らず、爺ちゃんと婆ちゃん家（ち）まで帰っていた。後年聞いたところによると、小樽幼稚園にこり押し入園させたのは婆ちゃんだったらしい。この婆ちゃんがクセモノだった。いや、今、この歳にして考えるのなら婆ちゃんの抱えた懸念や疑念は大いに理解はできるのだが、残念ながら、僕は婆ちゃんや爺ちゃんからの慈愛や寵愛を受けることは無かった。

それは、僕が一番孫だったからなのだ。それも、祝うに値する結婚によって出来た孫ではなかったのだ。

北海道歯科医師会の重鎮、小樽の一家の長女の結婚相手が、明日をもしれぬドラム叩きのバンドマン。結婚式も挙げられず、挙句の果てが亭主は再婚。出自を聞けば、自らは妾の子供という非嫡出子であり、

挙句が出来ちゃった結婚。そりゃあ婆ちゃんにとっては憎んでも憎み切れないゴクツブシとなっていたことは想像に容易い。

奇しくも、この婆ちゃんの懸念や疑念は程なく的中することになるのだが。僕のトラウマからは話がズレるので先を急ごうか。

婆ちゃん家(ち)に幼稚園から帰ると、実家に住んでいたお袋の妹たち(叔母)や、兄弟たちからは随分可愛がられた。特に、二女と三男は(叔母叔父)は僕を色々なところへと連れて歩きたがった。行きつけの百貨店に行けば、告げもせぬのに外商が顔を見せ、I家の坊ちゃんですか〜と甘ったるい声をだし、お菓子売り場のキャンディーコーナーに連れていかれて袋一杯の飴を持たされる。寿司屋に行けばネタ箱には無いマグロが出てくる。

子供ながらに家名の力。特別感を感じる日々だった。

ただ、たった一つの「猶予」を除いてなのだが。

僕には、当時三日の猶予が与えられていた。

三日に一度、婆ちゃんにツメの検査をされるのである。

三日に一度、両手両足のツメの検査を婆ちゃんから受けるのである。

そして――切られる。爪を切られる。

三日に一度、まだ伸び切っていない爪を深爪される。

それも、爪切りではない。裁縫用の糸切ばさみで切られるのである。

刃先が指先に刺さる。血が滲んだ。それでも婆ちゃんの鋏を動かす指先からは容赦を感じることは無かった。

いつしか僕は「婆ちゃんは僕が嫌いなんだ」と思うようになった。漠然と。僕が嫌いだから痛いと言っても爪を切るんだと思うようになった。母にも泣きついた。婆ちゃんの爪切りが嫌だ。痛い。深爪された小さな手の指先は、化膿して赤く腫れていた。それでも三日後には婆ちゃんの検査と爪切りが待っていた。

婆ちゃんの当時の想いが臍氣に理解できるようになったのは、僕が18歳になった頃だろうか。そして、成る程などしっかりとした肚落ちを見るようになったのは、僕の母が鬼籍に入ってからのこと。叔母たちから、母と婆ちゃんの関係についての思い出話を聞くようになってからだだった。

望むべくして祝える孫ではない男孫が一番孫になった口惜しさ。その種付けが非嫡出子のゴロツキクズレというバンドマン。

親として、さぞ悔しかっただろう。

出来ることなら家族とすら呼びたくはなかっただろう。血縁者とは考えたくもなかっただろう。

僕のトラウマのひとつは、この二年の間によりあからさまな形を伴い居場所を整えた。

年端もゆかぬ子供たちが合わせる手は何を祈るのだろう。食事前の祈りが猶予を踏すものなのだろうか。食事後に練り広げられる行儀悪さに向けられた婆ちゃんからの叱責迄の猶予なのだろうか。

子供たちの小さく合わせた手をみると**――**、

小樽の海で泣きながら遊んだ幼稚園児の時分を想い出し、思わずブルッと震えるのである。

一人の老女の眼だけがうつろなことに、猶予の先の憂いをみた思いがし、何かホットしている僕に気がつく絵画鑑賞だった。

了

スクリーンショット2024-11-26 14:06:20.png



独白型ショートショート『小説貧乏』2447字

独白型ショートショート『小説貧乏』

吾輩は貧乏である。而してひと口に貧乏と云ってみたところでどの程度の貧乏であるかは伝わるものではない。雨露を凌ぐことすら事欠く有りさまであるのか、糊口を潤すことすら叶わぬほどの貧困をまとい、行政をはじめ支援者たちの温かな炊き出しにその日の糧を頼る。朝から晩まで足を棒にしてシエルターを廻り、有志から寄せられた浄財寄付物品に暮らしを拠るほどであるのか。こうして眺め見ると貧乏にも様々な状況というものがあることがわかる。

なるほど。清貧というものもあるか。これなどは信仰を拠りどころとし、寧ろ自らの選択を機能させた能動的享受姿勢による貧乏といえそうだ。おおむね雨風はやり過ぎることができ、日に一度とはいえ空腹も腹八分程度におさめ、腹が減れば空腹をしのぐために温めた石を懐に抱え横になる。なんとも詫び寂が効いたこの姿などは日本の懐石料理に通じてくる逸話の一つとしても知られるが、今世にあっては貧乏とは縁もゆかりもないところにあるのが懐石料理なのではないかと巡らせると、なにやら遜るのも大概にしなければや〜と思えてくるのである。

吾輩が小学校の4：5年生の頃からだったろうか。成人するころまで吾輩の家は極貧であった。貧乏にランク付けがあるとするとするなら、「極貧」は最上級にランクインするだろう。そう。吾輩の家は最上級クラスの貧乏だったのである。

小学校の四年生。学校にゆけば町の顔役の息子から自治体窓口の借家賃を払っていない窮状をクラスのなか詳らかにされ、その夜、それを父親に告げると顔を真っ赤にした父親はその顔役宅に怒鳴り込んだものか、誓願^{ちかね}しに行ったものか夜半に家を出たきりその夜に戻ることはなかった。今の時代であれば、改正個人情報保護法の機能により、公務員法違反であり、家主による個人情報保護法違反、プライバシーの侵害、名誉棄損、その他モロモロいかようにでも法的拘束も可能な事案であるのだが貧乏ネタを飾るに相応しい思い出だ。

一週間のうち米の飯が食べたのは、三日程度だったろう。月になおすと半月以上は米の飯が喉を通ることはなかった。米を炊けば毎度毎度6合〜8合だ。育ち盛りの男の子二人。次に米が食えるのはいつになるかわかったものではなかった。餓鬼差乍らの喰いっぷり。母親がオコゲをへらでこそいでも取れるものではない。お湯を鍋底に流し込み、ふやけるのを待つとお袋は手に塩ぬっておにぎりを握る。吾輩や弟はそれを喜んで食べていた。月に数日は電気も止まった。プロパンガスも替えることができない日なども当たり前のこと。灯油も買えずルンペンストーブに薪をくべ暖をとる。

ストーブの上で湯を沸かし、味噌や醤油で味付けをした汁の中に小麦粉を練り上げた団子をおとす。米のない日の夕飯は団子汁だ。昨今では観光などで地方都市を巡ると団子汁を喰わせる食堂などをみかけることもあり、観光客が美味そうな顔をみせながらそれを流し込む姿などもみられるのだが、はて、それは美味しいのであるか」と訊ねてみたくなるのである。

「兄ちゃん、今日は米あるんだべか」

「なんもよ、コメが無ければジャガイモ蒸かしてでてくるべや」

「昨日も芋だったっけさ。イモ団子とポテトサラダ」

「せば今日は団子汁かもしれねえなあ。帰ってきてなんか食ったのか」

「トウキビとプリンスメロンしか食ってねえ」

「さすがに飽きたべよ」

貧乏な家の兄弟の会話である。住む環境によっては貧乏な家の子供たちとはいえ、トウキビ、ジャガイモ、カボチャ、玉ねぎ、アスパラ、大根、メロンにスイカは季節ごとに食べ放題となる特権を有していた。住まいは概ね一軒家。他人の目や軒や屁の音に悩まされることはない。壁が薄といったところで隣の家まで200メートル離れていた。

米が食えないこととライフラインが時おりサバゲーよろしくサバイバルラインに変わることのほかに不満はなかった。いや不満はなかったという表現は正しくないだろう。不満すら持っていなかった。寧ろ楽しんでいたといっても言い過ぎではない。

起きていると凍えるような寒さである。それは刺さるように、という形容が相応しい北国の真冬。吐く息の湿度が掛け布団の首元に付着しそれが凍りはじめる。キャンプではない。家の中の話しである。遮るもののない平原の中に建つおんぼろな家の内窓。月明かりが雪を照らし出すさまは色とりどりのシルクの糸を紡ぎあげた如くに艶めく。差し込む月明かりが布団の首元を闇夜に浮かび上がらせ凍りはじめた布団をキラキラと輝かせる。

「にいちゃん、なまら凍(しば)れるね。布団のえりのところシバレテきたっきゃ。ピカピカしてるさ」

「おまえ、アノラックでも着て寝とけよ。靴下履いてるか。ぼっこ手袋もはめとけよ」

「うん。おやすみ」

「……おやすみ」

思い返すと良い時代である。有難いことに吾輩たち兄弟はそんな暮らしをさせてくれた親を「毒おや」と思ったことはない。今世にあっては自慢といえるのだろう。毒おやという言葉を使ってきた人々の子供たちは、毒おやという言葉をまた受け継ぐのだろう。連綿と永遠に毒に毒された言葉が受け継がれてゆくのである。

実弟や吾輩が数年ほど行ってきた児童養護施設での食事の提供にしたところで、子供の頃のそんな経験が大きい。

「かあちゃん、おかえりー。今日ね、お米があったからご飯炊いておいたよ。カボチャも蒸かしておいた」

「そうかい、ありがとねえ。チャンと炊けたかいご飯、何合炊いたの」

「六合炊いたよ」

吾輩がはじめてガスで炊いた六合飯。流し台にはその格闘の跡。米を研ぎ、すすぎ流し、こぼれ出した米が水にふやけて山となっていた。炊きあがった米は芯の残ったメッコ飯。それでもお袋は何も言わず夕飯の準備をしていた。

「今日の晩ごはん何い」

「今日はカボチャのカレーライスだよ」

「カボチャのカレー」

色見だけがカレーであったことはいうまでもない。

了

泉下の人——実弟と両親に捧ぐ

※リハビリである。書くためのリハビリである。

なお、一部の行において誤解を生んでもつまらぬので書き加えておくが
卑下批難したものではなく、中傷を目的としたものでもないことは付け加えておく。全方向的に説教じみたことを書くつもりは無いが、言葉一つで感じられる豊かさもあるでしょう。どれほど貧乏であろうと、心だけでも豊かでありたいと願いませんか。まずは手始めに。



絵手紙 .jpg

世一、詩する『詩編雨に詩えば』

雨つづきじゃぶじゃぶになった道だつて長ぐつの友達だよ
ジャバンと飛び込む音もカッコいいだつて長ぐつ百人力
グズグズになった短靴はけなくたってかまわない長ぐつあるよ
ずつと降れ長ぐつ買ったずつと降れ短靴はけない臭くてはけない
神様さおてんとうさまいららないよだつて長ぐつには似合わない

阪大病院のベッドサイドのテーブルから

世一

■ 少年編

“poovel” 短編小説 Fate Trap

ぼくは颯(かぜ)

きみは雲

ぼくが得意なことは匂いを運ぶこと

揺ら揺らはごぶ

浮わ浮わはごぶ

ひゅーひゅービュンビュン運ぶんだ

匂いを運ぶだけじゃないんだよ

お手伝いだってできるのさ

季節を連れてくるでしょう

美味しい種も連れてくるでしょう

悪い流行り病は吹き飛ばす

でもね時々失敗もするのさ

火事で困っているひと手伝うと

劫劫劫(ごうごうごう)って火事大きくなるから

悲しくなる

でもねでもね

一番ぼくの悲しいことは

きみを掴まえられないことなんだ

ぼくが急いできみに追いつこうとするでしょう

するとね

きみはきえっっちゃうのさ

柵引くシッポを漂わせて

少年は詩を削ぎざむことが得意でした

中でも、風の詩を削むことを好んでいたようです

丘に展りては丘吹く風を詩い

山に登りては谷わたり吹き上げる風を詩い

海ながめては波乗りみたいに波頭けずる風を観察しては詩を編んでいました

編んだ詩は少年の大切なノートに書き認(したため)られてゆきました

夏が終わるころには「夏の颯たちのお話」で少年のノートはびっしりです
秋が終わるころにはノートも終わりそうでした

少年は一人でいることが次第に多くなりました

野球も、サッカーもスキでした

でも野球やサッカーを好きな友達の中には詩が好きな友達はいませんでした

それどころかサッカーをしながらうける颯を詩に編んだとき

少年は友達からある言葉を投げかけられたのです

「……お前、何書いているんだよ……なんだよそれ、みせてみる。ゲッ、なんだこれ、おーい皆あーこ
いつオカマ野郎だったんだあ！」

友達は少年のノートを取り上げると飛び跳ねながらノートを天高くがざしました
風が音をたててノートを捲りました

【やめろ！颯が怒るから！颯の呪文は強いんだ！おまえなんかイチコロさ】
少年は心の中で呟きます

周りの友達も「見せて見る、みせてみる」と囃立てました

すると先生がその友達からノートを取り上げます

「雄太、体育の授業中にこんなもの書いていたのか？ちゃんとみんなのプレーをみて応援しなきゃ
メだろう。だからお前は……」

そこまで云った先生の眼は

巻き上げる焔が熾(ほ)のおがおこす恐ろしい熱風を想わせました

「こんなところにも……こんなところにも颯がいた。先生の中に颯がいる」

少年は何も言えずに先生が手にしたノートを見つめていました

さあ

体育の授業が終わって昼休み

教室の中は大騒ぎ

「オカマあーオカマあーオカマ野郎」

「男のくせに……なんか書いて気持ちわりい」

少年は

体育の授業のおわりしな

先生から返されたノートに向かい

一生懸命サッカーに感じた風の詩を綴っていました

腹が立ちました

自分のお腹のなか出口をもとめて巻き上がる竜巻を感じていたので

【駄目だ。。。レベル4だ。そうだな名前をつけてやろう……ぼくの竜巻だからね。ユータイスター…チョッ
トちがう。ユーツイスター。うん。ユーツイスターにしよう。これでまた詩ができるぞ】

少年は

聞かぬふりをしながら我慢をしなくて済むように

自分の興味のあることに考えをむけました

知ってるかい

ぼくのお腹の中には竜巻の子供が棲んでいる

ふだんは寝ているのさ

ときどきご飯を食べに起きてくる

ぼくが満腹でもお構いなしさ

食べたくなって食べるんじゃないんだ

いつだってぼくの周りが食べさせる

食べたくなくても食べさせる

竜巻の子供はだんだんおおきくなるのさ

食べ過ぎるとね

最初は吐きたくなってくる

おかしいね

食べていないのに

おかしいね

悪いものも食べていない

吐いたらさスッキリすると思ってた

でもね

それが合図なんだ

ぼくの竜巻が爆発するさ

少年は

ノートの余白に書き殴りました

普段は丁寧に書くのですが今日は丁寧には書けません

でもね少年は

自分にしか読むことのできない書き文字を身に付けていたので
先生からノートを返してもらったときに云われた一言がありました

「雄太、お前のノートどうして読めるものと読めないものがあるんだ。丁寧に書いているのは読めるけど、時々、字が汚くて読めないものがある。まるで蚯蚓がはっているようだ。もっと字の練習をしなきゃ恥ずかしいぞ」と。

エッチな本も好きだった少年は

自分の気に入った言葉や知らない言葉を調べると

ノートに書き記してもいました

とうさんや母さんに見つかったらヤバイから

「何か方法を考えなきゃ」

少年は暗号を作りました

数字の数え方は何ページ目の何行目を言葉を繋ぎ暗号にしました

文章はわざとに崩して書きました

繋げて崩して簡略化させて

「おかあさんのこうぶつ、おかあさんのこうぶつ、おかあ」23頁

「おとうさんのこうぶつ、おとうさんのこ」17行目……と

これで誰に見られても平気だと考えていたようです

学校からの帰り道

あたりには晩秋の風が西日をともしない吹いていました

つめたい風でした

少年の首もとめがけて入り込もうとする風

少年は手を前に組み合わせ

フーフーと温かな風を送ります

帰り道に通る公園

色とりどりの花たちが首(こうべ)を揺らしていました

『これも颯の得意なこと 花は颯に揺れるから きつと綺麗なんだ そうさ揺れなけりゃ死んだみたいじゃん 動かないんだから 死んだものは書けないよ 死にそんなものだって書けやしない だってぼくは生きてるし 風も花も生きている おかあさんが買ってきた造花 ぜんぜん綺麗じゃない ドライフラワーだって意味わからない 死んだお花の何が好き？ 扇風機の颯に驚いて 吹き飛ぶ枯れ花の何が好き』

少年はまるで歌を謳うように言葉を紡ぎました

すると少年の眼に飛び込んだ景色の前
少年のちいさな足が止まります

「なんという花だろう。すごく細い花卉が小刻みに風に震えてる」

少年は公園の道端で座り込んで花を観察しはじめました

花卉はブルブルと震えていました

細い茎の上

みんなが一斉に首を揺らします

右へ左へ前へ後ろへ

一糸乱れぬダンスを想わせました

スクリーンショット 2024-12-27 15:51:15.png



一匹の熊蜂が名も知らぬ花の上を行ったり来たりしています

熊蜂の胴体が黄色いためでしょう

黄色い花の上では姿が見えなくなりそうです

風が強いためでしょう

首を揺らした瞬間に花から急に飛び出します

「あゝいいね。その花ならよく見えるよ。熊蜂くん。その花の方が君にはお似合いさ」

少年は

独り言を呟くと大切なノートを鞆から取り出しました

強い風がバラバラと音を立ててページを捲ります

余白のページを開くと

手で抑えながら花たちを見詰めます

少年は

一つのことを気がつきました

『黄色い花……』

『黄色い花畑 たったイチ輪赫い花 みんな揃って首(こうべ)を刻む 颯はみんなを一緒に揺らす な
のになのに どうして君は赫いのだろう なのはどうしてヒトリなの 君は赫くて平気かい ぼくなら
竜巻育っちゃう ぼくならきつと吐いちゃうよ でもね 熊蜂くんは君が好きみたい 君の頭の周りを
飛んでいる まるで妖精が飛び交うように』

少年は

丁寧な字で詩を紡ぎました

大切なノートに

詩が出来上がり

立ち上がろうとしたときです

なにを思ったのでしょうか少年はもう一度座り直すと

慌てたようにペンを走らせました

赤い花よ

わたしはきみが好きだ

わたしを美しく見せてくれる

きみが好きだ

みんなと一緒に首を揺らす

それでもきみを見失うことは無い
たったイチ輪赤いから

知ってるかい

妖精の罠というお話しを

きみはどちらに眼がゆくだろう

たったイチ輪の赤い花

大勢の黄色い花たち

どちらが妖精の罠なのだろう

次元の狭間に飛ばされるのは

どちらの花に触れたらだろう

わたしは赤い花に触れてるよ

… 颯に飛ばされずに

少年はノートに書き記すと

静かに立ちあがり

低くなった西日に向けて歩きはじめました

風は口笛を吹いているようでした

ヒュリー ヒュウーヒュウと

了

※風と颯のふたふたつの「かぜ」という字を使っていますが、地文と少年の語りでの使い分けとしています。やっとなら修正できました。

タイトル「小説 Fae Trap」

飛鳥世二作

2024年12月30日

2024年最終作品

小説
『凍裂』

速水御船・夜雪・png



「パツキヤーン」

日本の北に位置する寒冷地。冬の夜あけまえ、外の気温が寒暖計の底を打つころ。高々の生活音や車の音であれば前夜から降り続き積もった雪に吸収をみる。

「パツキヤーン」静寂を引き裂くように明けきらぬ北の雪原を凍裂音が揺らす。星は震え、弦月はその爪先から氷柱ツララを落とすほどの樹々の悲鳴が響く。

驚いた鴉たちが啼きわめきちらかし、一斉に梢を揺らす。鴉の動きを目で追いながら立ち尽くしたままの伸一の眼前、一段下に広がった雪原は五月ともなればアスパラ収穫の最盛期を迎えるはずの白い畑が広がっていた。「音」の生じた位置を確かめるためか、伸一は聞こえてきた方こうに首だけをまわす。

どうやら音は林檎畑の入り口をその命脈としていたようだ。凍裂音の始まりの合図は概ね木々の植わり際からとなるのが常だ。湿度の高い凍えた風は、しだいに林の内部までとどきはじめる。起き抜けに梢を揺らした鴉の啼き声を合図に樹々は次々に悲鳴をあげる。

「リンゴ園」の管理者の家だろう。林檎の樹が気になったものか茶の間には明かりが灯った。

伸一の胸の前、十字に交差した両手には緑と白、黒の毛糸で編まれた「ぼっこ手袋」がはめられている。冬を前に母がみずから編み伸一に手渡してくれたものだった。正直、新聞が配りにくいと感じていた。新聞を掴みにくいと思っていた。それでもその手袋を手放すことが出来ず、毛糸の手袋をはめたまま新聞を配るのが伸一の一日の始まりだった。いつの間にか手袋は手のひらと手の甲の色が変容をみせ、手のひらの指先に近い部分にいたっては何色の毛糸が使われたものかの判別がつかないものとなっていた。

刷りたてのインクの匂いが飛びきらない新聞の墨が手袋を黒く染める。左手だけを雪にこすりつけるとその雪だけが黒く滲む。雪のついた手袋を目の前にかざすと伸一は手を振る。雪は小さな玉になり毛糸にぶら下がっていた。

胸の前で組まれた右腕には未配達四十数軒分の地方紙朝刊が抱きかかえられている。小学校五年生、大柄とはいえ朝刊四十数軒分を抱えることは大人でも両手仕事になる量だ。

東の空が白みはじめる。鴉の啼き声がいっそうに喧しい。星は震えることをやめ弦月はその姿を不確かな幻へと変える。

林の林檎の樹々からの悲鳴はその間隔を広げ始めたようだ。

※

ドイツはベルリンの中心部。街を東西に横断するシュプレー川の中州北側にベルリン大聖堂がそびえる。ドイツバロック様式で建てられたそれは千九百年代初頭に建て替えられたものであり、ベルリン市民の拠り所でもある。

ベルリン大聖堂の道を隔てた南側に広がるのがフンボルトフォーラムとして国際的にも知られた美術館、博物館が集まったアートコンプレックスの一画。ポツダム広場からだ徒歩で二十分ぐらいだろうか。

伸一は日本からの団体ツアー客を連れこの街を訪れていた。終日自由行動日だったツアー客はそれぞれに市内の観光や散策を楽しむ予定となっていた。

ホテルで時間を持て余した伸一は美術館巡りを思い立つと、日本から持参した市街地図が綴じられたガイドブックを開きベルリン市内の美術館情報を探す。

「ベルリン国立東洋美術館：日本の絵画や版画だけで七千点收藏、日本の凡ての美術品だけで九千点か。ドイツに来て日本の美術品見学というのも意味は分らんが、時間つぶしにはちょうどいいだろう。行ってみるとするか」

行きながら伸一は市内を散策し、春まだ浅いベルリンの川もを渡る風の匂いを楽しんだ。途中、何組かのツアー客と出遭い立ち止まっては自由行動中の行き先や情報などを伝えては別れることを繰り返す。「添乗員さんはどこに行くのですか？」どのツアー客も異口同音にそう口にする。

「ああ、散歩ですよ」そう答えることが当たり前のように伸一は散歩と告げた。

中には「こんな所で丸一日も自由行動にされても、どこへ行っていいのやら皆目だわ。ちゃんとバスで連れていってくれば良いのに」と愚痴をこぼす者もいた。

こんな所で自分の行動先、目的地を伝えようものならツアー客の殆どは添乗員の後を付き従ってくることになる。折角の自由時間が台無しとなるのである。

相変わらず日本人は「自由」が苦手だ。旗の後ろを歩くことにかけては世界200の国と地域の中、トップレベルの優秀さを見せつけることが出来るのだが、目の前から旗が無くなると途端に路頭に迷う。そのくせ旗の少し前を歩こうとし、さも『わたしは団体旅行とは関係ない』という体裁を保とうとする空々しさは忘れない。

することが見つけられなければ寝てしまえば良いだけなのだ……、なにかをする必要もなく日常を持ち込んで良い。パンフレットに踊る「非日常」という分かったような分からぬような文句に踊らされ、よくよくパンフレットの中身も確認することなく来るからそうなる。

伸一は独り言のように呟きながらシュプレー川のほとりを歩く。川ほとりに設えられた花壇では春の花の植え替え作業が手際よく行われていた。

フンボルトフォーラムは様々な美術館や博物館で成り立っていた。元々はベルリン国立博物館の敷地内なのだがその一角にベルリン国立東洋美術館、またの名をアジア美術館が存在する。

日本の版画や絵画だけで七千点を收藏しているというから日本の美術館規模で云えば兵庫県立美術館と同等クラスになり(※二千二十二年十一月時点)欧米からの評価も高く、ヨーロッパにおけるジャポニズム文化の定着にも一役買った美術館との評伝も知られたところだ。

フンボルトフォーラム正面に立つとドーム型の天蓋が訪れるものを迎える。建築様式はドイツバロック様式とかネオバロック様式と呼ばれているらしいが、伸一に観えたそれは寧ろアールヌーボ様式であり、ベルエポック様式のそれに想え、ニースのランドマークホテル・ル・ネグレスコのファサード天蓋部分のドームを彷彿とさせた。「ネグレスコホテルのドームは確か娼婦ラ・ベル・オテーロの形の良い、

たわわなオッパイを模して造られたと云われていたはずだが……ここは誰の胸を模しているのだろうか」
 伸一はファサード前で誰に云うとはなしに「たわわなオッパイ」とふざけ半分に呟いてみせた。別棟のベルリン国立東洋美術館まで行き、伸一は切符を買い内部に歩みを進めると重厚な壁や廊下がゲストを迎えた。

伸一は館内売店の位置を確認すると真っすぐに売店へと向かい収蔵・展示図録集を買い求め売店脇に設けられたベンチに腰を下ろすと図録集を広げた。

「さて、来てみたは良いものの何を観るべきかが分からない。闇雲に見たところで時間も無駄にするだろう。ましてや三時間ぐらいでは全部は見られないだろうし」そう考えながら目ぼしい画を探すと伸一の指はページを捲る動きを止める。

「この画……誰の画だろう……速水御船（はやみぎよしゅう）……夜雪……」ドイツ語と英語で書かれていたが専門的なことは何もわからなかった。ただ、画の対象に向き合ったときの表現の巧みさは空間の支配力によるといふことは理解できた。

「水墨画なのだろうか」伸一はその画からの印象を言葉に置き換える。

画は冬の雪景色の中に一本の木が描き込まれており、その画は伸一にとっては林檎の樹をイメージさせるものだった。

真っすぐに伸びた小枝、力強さを感じさせ風雪によって撓んだ（たわんだ）であろう幹は生命力を滲ませる。

「まだ若い樹だろうなあ……」伸一は図録を膝に乗せたままその画に見入った。

見学を終えた老若男女が売店へとなだれ込み、ハガキやら図録集やら思い思いの記念品を購入している姿が視界に入る。見学中の会話を我慢していたように様々な国の言葉が売店で飛び交う。と、売店の中、何かが割れる音が響いた。

「ガチャーン」

売店の定員たちは慌てた様子も見せず、電話を手にとると何処かに向けて話していた。程なくすると作業服を着、箒とモップと塵取り、バケツを持った清掃員が二人で来ると床の掃除をはじめた。伸一は速水御船・夜雪に目を落とすと「まんじり」ともせぬままにその画に眺め入った。

※

寒冷地の凍える冬空の下、新聞配達をしながら一生懸命貯めたお金は自ら買うことを夢見ていた自転車「ヤンクル」購入のための資金だった。

ある日の父親の帰宅はそんな伸一の夢をぶち壊しにするには十分なものとなった。

見慣れない男たち三人を従えた父親の帰宅。男たちは父親が招き入れる言葉も待たず、当り前のよう

に家上がり込むと茶の間のソファに腰を下ろす。

「オメエラチは、ちょっと奥さ行つてれ」

父親は子供たち二人の顔も見ずに告げた。茶の間のテレビではアメリカで人気の猫と鼠の人気アニメが流れ、セリフの無い動画に効果音だけが茶の間に響いていた。伸一と、小学校三年生になる弟の伸二は、茶の間に隣接した子供部屋へと下がる。

「兄(にい)ちゃん、あの人たちなんだべ？」

「……なんかの借金取りだべなあ」

「したっけ、なまらおつかねかったっけさあ」

父親が母親に事情を説明している声が微かに聞こえてくる。所々がテレビの効果音でかき消される。と、突然母親の振り絞るような、苦痛に呻き上げるような怒声が子供部屋に流れ込んだ。

「何言つてけつかる、そんな金はここの家にはない。連れてけほしい！」

母親は男たちに向けて叫んだ。「あくあ、連れて行きなさい！ こつたら、はんかくさい者。自分でやったことだ、何処へでも連れて行ってもらいな！」

母親はそう言い放った。

どうやら借金取りは競馬の「の●や」の取立人だったようだ。

弟の伸二が怯えながら伸一に告げる。

「兄ちゃん、母ちゃん大丈夫なの？」

「シッ！ 静かにしてれ」伸一は大人の話しに耳をそばだてる。伸二は既に泣き顔をはだけていた。

借金取りのリーダー格は母親に向け「いくらあんだ」と詰め寄る。

情けなかったのか母親は涙を飲み込んだのか、くぐもった声を振り絞ると「無いッ！」とひと言吐き捨てた。

伸一は、母親の声が聞いていられなかった。朝は夜明け前から建設作業現場の飯炊きに行き昼前に帰ると化粧品営業に出かけ、子供たちに食事を与えた夜には知り合いが開けるスナックの手伝いに出ていた。

のべつ幕無し仕事に明け暮れ身を粉にして働く母親の姿を見知っていた。

伸一は立ち上がると大人たちが会話をしている部屋に歩み入た。手には、インスタントコーヒーの空き瓶を黒く塗り潰したものが握られていた。

大人たちの目が一齐に子供に向かう。居心地の悪さが伸一を襲った。

言葉を吐き出そうにも上ずって言葉とならず、口からする呼吸だけが微かに言葉の形跡を留めていた。

「お、ふう……ふう……おれ……ふうう……少しだけある」

「なんぼあるよ？」

間髪入れず、口を開いたのは父親だった。母親は鬼のような形相で父を睨みつけている。伸一は母親が何も言わないことを願った。お金だけをその場に置きとつと子供部屋へ引き下がりがたかった。

「2万ちょっとぐらいだべ」伸一は目標としていた自転車を手に入れるまであと2カ月の所までできていた。

金額を聞いた大人たちを囲む空気が一気に緩む。小学校5年生の子供にさえ、その弛緩した空気が読み取れた。それぞれが硬直した空気の落とし処を模索していた矢先、最善と思える落とし処はやはり子供が運んできた。伸一は大人たちの前に歩み出ると、床に「貯金箱」をぶちまけた。

黒く塗りつぶされたインスタントコーヒーのビン。蓋を外すのでさえ指がかじかむ。気を許すと泣きそうだった。一度泣いたら歯止めがきかなくなりそうだった。伸一は小銭を積み上げ、手のひらに載せると列をそろえ数え始めた。

「揺れるたわわなちぶさ」という呪文を頭の中で唱えながら。

十枚ずつの小銭を数えた。

親に隠れ、はじめて生きた活字に触れたのは小学校四年生のときに手にした「週刊宝石」という大衆小説だった。たしかな意味も解らず、半分以上が読めない漢字に埋め尽くされていた。なんとなく……、そう。なんとなくだけが十一歳の少年の感受性を支配していた。

ただただ親が困っている姿を観たくなくて母親が泣いている声を聞きたくなくて、父親がいじめられている姿をみたくなくて、ただそれだけで子供は貯金箱を大人たちの間に配達した。

男たちは、父親から金を受け取り、領収書を渡すと帰っていった。茶の間を支配していたはずのアメリカ製の無声動画アニメは既に終わっていた。

それから2か月後、冬の寒い夜。伸一は父親に尋ねた。

「前に俺が出したお金いつ戻ってくるの？」と。

【あれがあれば新しい自転車を買える】そう思った。

父親は「近い内にな」伸一にそう告げた。

その夜明け、伸一はチェーンも軋みタイヤカバーすら途中で折れた自転車に跨ると新聞配達へと出かけた。

母親は既に居なかった。

雪原と化したアスパラ畑の一段うえ。

白みかけた空を震わせる林檎の樹の凍裂音が哭き響く。

「パッキヤーン」

伸一は胸の前に抱えた地方紙の朝刊を数部ずつ二つ折りにたたむと、冬の真っ白なアスパラ畑にばら撒いた。

※

「さて……ホテルに帰るとするか……」

伸一は画を鑑ることも無くベルリン国立東洋美術館をあとにした。
売店脇のベンチの上では開き置かれた図録が所在なさげに残されたままに。
了

異端のKARASは闇夜に二度啼く

小説・異端のKARASは闇夜に二度啼く



藍を塗り重ねたように。東の空は山向こうの底から一日の終わりを告げる。人間の棲む集落では陽の入り刻(とき)のお祈り時間が来たことを告げるムアッジン…、お祈りの呼びかけ人が高い石の塔の上、アザーンを唱えはじめた。

人間がカッパドキアと呼ぶ地。夕日が西の山陰(やまかげ)へと呑(の)まれる様子はただただ美しい。陽が高いところにとどまっていれば、太陽に焼かれた緑が山の麓で色濃くみせるのがこの地の日常でもある。村のはずれから東西それぞれの山にかけて広がる黄色い大きな花は人間がヒマワリと呼ぶ花の絨毯がつづく。

「ザッザッ…、カシャ、カシャ」集落の至る所に設えられた絨毯を織るための工場(こうば)の音にヒマワリの絨毯が織り重なる。

真っ青な空をいただき茶褐色の荒涼とした痩せた土地に黄色いヒマワリ畑がつづき、やがて緑を深め岩肌の露出が際立つ山へといたる…。

人間が暮らす集落のあちらこちらに穿(うが)たわれた黒い穴は、人間たちの巢への入り口だ。

粗末な身なりの人間たちが膝を地につけ暗い穴ぐらから四足(しそく)の生き物を想わせる如くにじり出てくる。

「カア…カカア…」そこかしこで班長が帰巢を告げる合図を鳴き上げると人間によるアザーンの声がかき消える。一斉に空へと舞い上がる我が部族。西の山の頂では太陽が一筋の線となりはじめていた。

先導役が高いところで円を描きながら部族の動きを抜かりの無い目で追う。あらかたが空に舞い上がるのを観(み)止(と)めると、東の山の麓をめぐけて翼を羽(は)たく。

既に東の空は藍の深みを塗り重ねたように垂れ墮ちていた。天敵たちもこの日の狩りを切り上げ帰巢したのでろう、その姿は見止められない。

「爺ちゃん、まだ帰らないの？」

孫のロリンが儂の頭の上、八の字を書くように飛びかいたがそう啼いていた。

「おおう、ロリンか。儂はいつものように最後を見届けてからのんびり帰るとしよう。ロリンは先にお帰り。母さんも心配するじゃろう」

「爺ちゃん、今日は一緒に帰るよ」

ロリンは深い紫を纏った羽を操ると、儂の横に降り立った。その羽色はさながら朝露に愛された山ブドウの色合いを想わせた。

「ロリン、今日もしっかりと食事は出来たかな」

この日の首尾を訊ねる。

「今日は豆とヒマワリの種…それとモグラ」

「ほおう、そうかモグラか。上出来だの」

「このところ雨が降らないから、人間の畑では作物が枯れはじめているからね。出来るだけモグラを狙うようになって…、班長が」

「そうじゃのお…、食事場所の集積所でもすっかり人間の食べ残しが少なくなっているようだからのう」この周辺は普段から雨は少なく乾いた土地だった。それが今年は「干ばつ」と云えるほど雨を落とさず、

このころでは人間たちの生活にも疲弊が覗(うかが)えた。

「頭上まで藍が深く垂れ込め、星たちがその姿を顕(あらわ)しはじめたころ。白く、まあるい月はその姿を東の山の頂(いたadaki)へと載せた。それはまるで生まれたばかりの鶏(にわとり)の卵を想わせた。なんとも美味(うま)そうに思える。」

地を這うように穴ぐらからにじり出た人間たちは、立ち上がると二本足で歩きながらひと際大きな穴へと吸い込まれてゆく。

なんとも不思議な歩きかたをする生き物よ。

二本しかない足を交互に送りながら前へと進む。更に面妖なのは羽(はね)のない腕を交互に振って歩くという行動だ。

飛べもしないのに腕を振るに何の意味があるのか。無駄に疲弊を深めるだけである。

燃える水が灯(とも)されているのだろう。穴ぐらの中は明るく照らし出されている。人間たちも班で動く習性なのか、一つの穴ぐらには五十ほどの頭数が集い、川魚の稚魚たちの泳ぎを想わせるように皆が同じ向きに頭をそろえ、祈りを捧げている。歌うような声も漏れ出していた。

「爺ちゃん、人間は一日に五回も六回もあぁして集まって何を祈っているのだろうね…。空からの水が落ちて来るようにかな」

「先祖の言い伝えでは、昔は違う神様に祈りを捧げていたらしいがのう、今でも画の描かれた洞窟が残っているじゃろう」

「母さんが近寄るなど云ってた石の煙突みたいな処だよね……」

すっかり陽の落ちた西の空。暗くなった空を不規則に舞う闇の番人たちがその姿を見せはじめた。

闇の番人たちは音を立てて飛ぶことは無い。飛ぶ方向は予測できない。我が種族のものたちなら、ぶつかるような至近距離に至ってさえ器用に方向を変えた。

様子を見ていると人間たちがペリバジャと呼ぶ「妖精の煙突」の上に黒い塊がひとつだけ舞い降りるや「クワァークワァー」と我が部族とは異なる啼き声を発した。

「来たね……」ロリンは待っていたのか、そう云うと嬉しそうに自らも一声啼いてみせた。

「カカー カアー」

「これ、ロリンやめないか。儂らの支配時間はもう終わっているのだ」

妖精の煙突に降り立った黒い塊の頭が動いたように見えた。目が月明かりを吸って光ったように見えた。足が動いているのだろうか。

土を削ってでもいるような音がかすかに聞こえる。カサツ…カサツ…カリ…と。

「爺ちゃん、あいつ、どうして違う種族に交じっているのだろう」ロリンはそう呟いた。

「…… さあ、ロリン。陽も落ちた。儂らも帰るとしようか」儂はそう告げると返事を待たずに羽をばたつかせ暗くなった空へと舞った。

「待ってよ、爺ちゃん」ロリンが後に続く。

空の上から妖精の煙突を振り返り眺めると、月明かりを浴びたその姿は真っすぐに西の空を見据え、右足で妖精の煙突の土くれを蹴っていた。それは「クワァークワァー」ともう一度啼く。狩りの始まりの合図だ。

スツと広げた翼に月が明かりを注ぎ込む。その羽色は濃い紫を湛え、夜露の寵愛(ちょうあい)を受け山ブドウの輝きを想わせるほどに美しかった。我が部族の神なる祖先、ムギンとフギンを想わせるほどに。ただ羽の形が儂たち部族、いや種族と違っていた。羽の先端が「くの字」に折れ曲がっているのだ。儂はその羽の姿にあの者の生きすがらを観た思いを刻まずにはいられなかった。

不規則に空を行き来する種族「蝙蝠」達に向けての狩りの合図…、闇の番人たちの縄張り時間を誇示するように啼いたそれはあたりを睥睨(へいげい)する。

※

帰巢すると部族の数を数えることが習慣(ならわし)となっていた。トンビやタカをはじめとする天敵にやられるものも少なくないためだ。

「みなの人、すまなんだの待たせて」

「父さん、わたしの班は無事でした」息子のキロンが安堵したように報告する。

「長老… 私のところでは二柱(ふたはしら)ほど帰巢していません」次々に班長が報告をする。

「結局今日は七柱か…」疲れたように息子のキロンが呟くと、儂の後ろに居たロリンが口を開いた。

「カー…、父さんきつと大丈夫さ、村に残って夜明けかしをしているんだよ。明日になったら村で合流するさ」

ロリンは父や大人たちを気遣うようにそう明るく言葉にした。

「あのね爺ちゃん…、皆にも聞いてほしいことがあるんだけど」ロリンは大人たちの話を切り上げるように言葉をつづけた。

「なんじゃ……」幾分の苛立ちが嘴(くちばし)に滲む。

「あいつ…どうして種族の違う中に居るんだろう。僕はどうしても気になるんだ。父さんや爺ちゃん知らないの？ 母さんに訊いてもなんか…クワクワ、クワクワ云うだけで…埒(らち)があかないし」

「これロリン、母さんのことをそんな風にいうものではない」儂は強く咎めた。

「ごめんなさい…」

ロリンは素直な子だった。部族の他の子たちは皆の前で意見を云える子も少なく、見て見ぬふりすることが常だった。云いたいことは裏山の「啼き捨てるの樹」に誰が書いたものか判らぬよう爪で書く。あのものについても、変り者・異物と揶揄(やゆ)することが精々だ。

しかし、孫のロリンは違った。あの「妖精の煙突」に留まるKARASを変り者…異物…として扱うことは無かった。

部族を纏める者として、それぞれの多様な個性を尊重できる生まれながらのリーダーの資質を備えているのだろう。

息子夫婦は自分たちの子供ロリンの問いには答えなかった。

「…さあ、明日も早い。自分の梢(こずえ)に戻って寝るのだ」儂はそう皆(みな)を促した。

夜明け前、息子のキロンが血相を変えてわたしの梢を揺らした。

「父さん、ロリンが居ないんです。ロリンが」

あとを追ってきた嫁のニヒトが息子の後ろでクワクワ云いながら羽をバタつかせている。

「…いつからいないんだ？」

「わかりません。梢に戻ったのは一緒だったのですが、出がけ準備の合図を啼き上げようとしたところ、もう梢には居なくて…」

「…村におけるじゃろう。夕べ、誰も答えをくれないものだから…ロリンは自分で答えを探しに行つたのかもしれないのお」

「それは…父さん…、どうしたらいいのでしょうか、夕べは雲も深く垂れ込めてましたから…」

「キロン、お前の息子は利口な子じゃ。鳶(とんび)が鷹(たか)を生んだと云われるほどの。仕方ないじゃろて。知る時が来たのなら抗(あらが)うことは出来まいて。殊(こと)更(さら)に事を荒立てぬことじゃ。ほれ云うてる間にも先頭が村に向かいはじめようて」 東の空、山の頂が白(しら)んできた。

※

【あいつは僕と同じ種族の仲間だよ。なのに何故違う種族の蝙蝠と一緒に居るんだらう。

今日こそ話を聞いてみよう。それにしても今夜の雲は重くて低いよ…。暗いよ…。方向が判らなくなるよ…。こんなに暗いんじゃないや食事だつてさがせやしないよ。夜は暗いから仲間だつて見つけられやしない。なのにあいつはどうして闇の番人種族の蝙蝠たちと居るんだろ…。よおし、今のうちに雲の上まで出てみよう。月があれば山の影も見えるだらう。山さえ見えれば何とかなるさ…。よし、雲の色が白っぽくなってきた。あと少し…。

出られた！ 山も見える。月は僕の味方をしてくれてる！ 月が僕の真上だよ。星がたくさん出ている…、どれ程出ているのだらう。行きすがら数えてみようか…。

ム・ニ・ンサ・マ・フギン・サマ…、イチ末裔。ムニン・サマ・フ・ギンサマ…、ニ末裔…二十か…、チェツまだまだあるよキリがないや。でも空が暗くて静かだ。これならトンビやタカにも襲われることは無いだらう。

爺ちゃん凄いや、夜の月はあんなに白く光るんだ。空や山を飾るように散りばめられた星たちはあんなにも沢山あって優しく瞬く。

あいつはずっとこの景色を見ていたのか。

でも、食事はどうするのだらう。食事はみつけられるのだらうか…、僕だつたらきつと無理だらうなあ。この辺かな？ そろそろ雲の下へ降りてみよう。

あっ！ ようし蝙蝠種族を見つけたぞ。もう少し南…、居たっ！ あいつ、また土を蹴ってる…。どうしよう…、直接隣に降りたら驚くだろうな。攻撃されるかもしれないし。蝙蝠たちも驚いて襲ってくるかもしれない…。しょうがないや、まずは上から声を掛けてみよう】

「カー、カカー」

「なんだお前クワァー。何をしに来たんだ。お前たちは寝ている時間だらう？ 今は俺たちの支配時間だぜ」

「僕だけなんだけど、横に降りてもいいかな」

「好きにすりゃいいさ…でもチョット待てよ、仲間にもないっていう合図を送るから」

「うん」

「…クワッカー」

「ありがたい…凄いな、あんなに沢山いたのに一声で居なくなっちゃうなんて…、えっ？ 当たり前？ そりゃあ同じ種族だったら分かるけど、君は僕と同じ種族じゃないか…、なのに一声で…」

「馬鹿馬鹿しい…、そんな話をしてきたのかい？ 種族だ部族だって執着するからいつまでも争うんだろう？ 蝙蝠たちは自分たちから争いを仕掛けることは無いのは知ってるよな」

「うん…、いつも僕の種族がけしかけてるのは知っているよ」

「だいたい俺がこうして無事に育ったのだから、卵を置き忘れたお前たちの雌の代わりに育ての蝙蝠母が俺を温めてくれたお陰なのさ」

「エーッ！ 君は蝙蝠に育てられたの？」

「そうさ…、だから俺はお前たちを見る度に腹を立てていたんだ。でも蝙蝠母が俺に云うんだ。お前は神様のお使いの末裔なんだから心を広く持たなければね…って。だから俺も我慢することにしたのさ」

「神様のお使いの末裔？ それって、ムニンとフギンのこと？」

「ああ。なんかそんな名前だったかな」

「じゃあ、君(きみ)、僕と同じ部族の子じゃないか…、僕はロリン。部族の長老の孫。君の名はなんていうの？」

「俺はベガ。俺の蝙蝠母は部族のシャーマンなんだ。結構長生きしてんだぜ」

「ベガ…、君の羽の色…、僕と同じ色だよ。でも、羽の形がチョット違うよね」

「ああ…これか。自分で折ったんだ。何でかって？ 蝙蝠族の方向転換についていけなかったから、嘴(くちばし)で銜(くわえ)て折ったのさ。おかげで急旋回やホバリング転回も出来るんだぜ…」

※

東の空が山の頂を橙色に染めはじめた。村までもう一息だ。闇の番人たちが西の森に向けて帰って行くのが目に入る。

しんがりを飛んでゆくのはあの子だろう。少し曲がった羽の先を器用に使いながら右へ左へ上へ下へと飛んで行く。と、それは左へと急旋回をみせると滑空体制に入った。

早い！ フクロウが若い小さな蝙蝠を狙っていた。それは自らの体を矢羽根と化し嘴(くちばし)からフクロウに体当(たいあ)たりをしてみせたのだ。

流石(さすが)の夜の知恵者、フクロウも堪らず大きな翼を翻し山に向かって逃げ飛んで行く。

「やりよるわい。どうやら育ての恩は返せているようじゃの」儂はひとり呟いた。

息子夫婦がロリンを見つけたようだ。

人間が妖精の煙突と呼ぶ岩の上、留まっているのがロリンだろう。息子夫婦はロリンの頭上で啼き叫んでいる。

「よさないか。無事に見つかったのだから良いではないか。あとは巢に戻ってからにすればよいだろう」儂は息子夫婦のそばに行くと、咎めるように嘴をはさみロリンの留まる妖精の煙突に羽をおろした。

「爺ちゃんごめんさい。心配かけて」ロリンは謝罪をみせた。

「心配をかけるようなことはするべきではないな…。それで、どうだった。目的は果たせたのかな」

「うん。面白かったよ。あいついい奴だったし頭も良くて、僕たちが知らないことをたくさん知っているんだ。でも、チョット変わったやつだよ…。あいつの羽が曲がっている理由も分かったのだけ

ど。それから…あいつ蝙蝠種族のシャーマンに育てられたんだって云ってたよ。で、ムニンとフギンの末裔だって」ロリンは一気にまくし立てた。

【そうか…、やはりそこまで知ってしまったのか…。どうやらあのシャーマンの蝙蝠婆さん…、上手に育ててくれたようだのお。さて、あとは帰ってからしておくでしょうか。どの道、按配（…）も（…）頃合い（…）じゃって。息子夫婦と話をしてから決めるとしようか】

「楽しかったようじゃの。良いか。その陰で心を痛める者たちが居たことは忘れるでないぞ。お前もムニンとフギンの末裔。智慧と記憶を掌（つかさど）る使い魔の末裔じゃ。そのことをよくよく心に留めておきなさい。ほれ、飯じゃ飯の時間じゃ…、あとは帰ってからじゃ」

そう云いながら視線を足元に移すと、自分の立つ足元の土が抉（えぐ）れたように掘り込まれていることに気付く。

【ここはあの子が立っていた場所なのか…、何故…、何故ここだけが掘り込まれたここだけが黒く濡れている？ いや…魔坂（まさか）…】

「うん。爺ちゃん。じゃあ食事に行ってくるよ」ロリンはそう告げると妖精の煙突を蹴り上げ空高く駆け上がった。

「ほう…、ロリンお前もか…」その岩肌は確かに湿り気を帯びていたのだが、登り始めた東の空の太陽が早くもその湿りを乾かしはじめる。儂は左足でその痕跡を隠すように掻きならした。

ムアッジンが朝のお祈り時間の到来を告げるアザーンを唱えると、谷間には東の山むこうからの朝日が差し込む。あちらこちらで我が種族の啼き声が響いていた。食事の取り合いなのか、天敵にでも襲われているのか…仲間同士で食事を巡って争う姿も目にした。

穴ぐらからは、人間たちが四足動物のようににじり出てくると飛べない腕を振っていた。

【おっ… あれは蝙蝠種族のシャーマンの婆様ではないか…、あんなところで今頃何をしているのだろう。仲間はみな帰巢した頃合い。あの土の塔は赤ん坊を抱いた女の神様が描かれていた塔だ。なんで今頃あんな中に入ってゆくのか】後をつけるつもりは無かったが、ロリンとあの子のこともあり、塔の中へと入ってみた。

飛び交うには狭かった。壁には人間達が描いた赤ん坊を抱く女の神様の姿や、人間の背中に羽をはやしたおかしな鳥（とり）種族（しゅぞく）の画が描かれていた。

天井に目をやると、シャーマンの婆様が天上に足でつかまりぶら下がるように羽で顔を隠し休んでいた。

「婆様…、蝙蝠の婆様…、休んでいるところ申し訳ないが少し時間を貰えるだろうか」

「何だい、誰だいこんな朝早くから。わたしや今から寝るんだよ。こんな婆を喰ったところで、しわくて食えたもんじゃないよ。もう少し脂ののった餌を探しに行きな…」

「婆様、儂じゃよ、ドウワじゃ」

「なんだあんたかい。どうしたのさこんな早く。ハハァ…、あれじゃろ…、あの子達のことでも来たんじゃろ」蝙蝠のシャーマンの婆様は見透かしたように嬉々としてそう云った。

「夕べから今朝にかけて随分話し込んでいたからね、あの子達」

「婆様、あの子達がどこまで話をしていたか分からんじゃろか」

「相変わらずお前様たちは都合が先行するのお…、そうではないだろう。使い魔の末裔だか何だか知ら

ぬが、常に気にするのは体裁と自分の都合ばかりじゃ」

蝙蝠のシャーマンの婆様は歯に衣着せぬ物言いだ。儂を責めた。

「いやこのとおり申し訳ない。確かにあんたが云うように、儂らはあんたに借りがある。後にも先にもそれを抜きには話は出来ない。」

婆様、ずっと天井を見上げてしていると首が痛くて仕方がない。チョット降りて来てはくれぬか…」

「爺さん。あんたなにかい、この朝日が昇って凡てを晒(さら)し出す時間に、私に地に降りろとかいのかい？　ネズミや蛇にでもこの老骨を差し出すつもりかえ？」

これはいかん。藪蛇である。

「婆様悪かった。今そこまで飛んでいくので許してほしい」

儂はそう云うと蝙蝠のシャーマンの婆様がぶら下がる天井付近の張り出しに身を折るようにねじ込んだ。人間たちが蠟燭(ろうそく)を灯す場所なのか、足元が気持ち悪い。

「フン…、なんの用か知らないけどサツサとしておくれ。あたしゃ眠いんだよ」

「婆様…、まずはあんなに立派にあの子を育ててくれたことに衷心より礼を申し上げる。ありがとう」儂は頭を下げた。

「何を今さら言ってるんだい。元はと云えばお前さんの息子の嫁が巢への帰り間際、急に産気(さんけ)づいて妖精の煙突の上で卵を産んだことがはじまり。嫁しかいなかったから抱卵できたのは一つだけ。もう一つの卵…、あの子を持つてはいけなかったのさ。そこに首尾よくあたしが通りかかったから抱えて温めてやっただけのこと…、それもあたしゃ、お告げを聞いていたから通りかかることもできた。だけどね、ベガは本当にいい子に育ってくれたよ。今じゃあたしの部族の中でも皆に頼りにされて…。」

ああ…判っているさ、いつかはあんたたちの元に帰る日が来るぐらいのことはね。だけど爺様、あたしゃね、口が裂けても云いたかなかったけどね。他の種族の手に塗(まみ)れたKARASの恐ろしい末路など」

儂は嘴(くちばし)を差し挟むことなく蝙蝠のシャーマンの婆様に話をさせた。儂らの種族は他の種族の匂いがついたものを受け入れることは無かった。卵なら母親自らが割る。雛なら父親自ら巢から蹴落とす。それが部族の暗黙の了解。

一度蝙蝠種族の手が及んだものであれば、部族に戻るためには自ら戦い道を開く時を待つしかなかった。それがベガの宿命であり、双子兄弟のロリンとその親、キロンとニヒトの抱えた運命だった。

いつの間にか人間の洞窟の中には明かりが灯されていた。壁に描き込まれた赤ん坊を抱いた女の神様の前では、蠟燭の炎が風に揺らいでいる。人間に羽をはやしたおかしな鳥種族が女の神様の脇を固める。明かりを吸った故なのか、暗がりに浮かぶそれらの姿はただただに美しくかった。儂はその美しさにしばし見入った。婆様の存在を忘れたように見入った。いや祈ったのかもしれない。

「さあ、爺様。あんたどうするつもりじゃ。あんた自分で判っていると思うが、もうそれほど長くは飛べんよ。それとあんたも薄々気づいておるじゃろうが、あの子達…、数百年ぶりの生まれ変わりぞ」

「ああ…、少し前からなんとなくな。今朝、はつきりと判ったわい…、飛べなくなることも、あの子達のこと…。婆様、どうじゃろう、ここはひとつ儂に任せてくれんか」

「任せ云われて落としどころも判らずに、任せた云えると思うてかこの戯(たわ)けKARASめ」

「相変わらず敵しいのお(笑)　こういふのはどうじゃろう……………」

※

女の神様が描き込まれた洞窟をあとにすると、外では太陽が頭上に昇っていた。薄くなりはじめた羽を広げ地を叩くと体が浮いた。

祈りを終えた人間たちが頭を寄せ合い話し込んでいる。どうやら干ばつによる被害について相談しているようだった。

【だいぶ酷いようじゃのお。人も死にはじめているという話も聞こえてきている。僕たちの部族はそこまでではないが…、他の部族では人の死肉をついばんだKARASが人間に殺されたという話も伝わり始めている。ほかの土地の人間たちの間では、鳥葬という儀式もあるらしいが、僕たち種族は厄介者のようだ。さて、なんとか雨が落ちてくれればよいが】

空の上から川の水や用水路の水の具合を眺めても、濁水は明らかかなようだった。

【これは部族で餌場についても相談しなければならぬかのう。山裾の森は今のところ水の心配はない。が問題はこの人間たちの生活でもある。これまで持ちつ持たれつでやってきた一面もある。ネズミやモグラといった作物に害なす動物が減ったことに、一部の人間の間では木彫りKARASを祀(まつ)り上げ、信仰の対象として祈りを捧げるものも居る。雨が欲しいところだ】

日が陰ってきた。地面から空に向けて吹き上げる乾いた風に緩みがみえはじめる。雲が広がりはじめていた。風が変わる……。地面からの風が緩むと羽を叩かなくてはならなくなる。僕のような年寄りは些かこたえるのだ。

「どれ、一度降りて休むとしようか」視線を地上に移し着地するに手ごころな場所を探した刹那(せつな)、僕の頭上を二つの影がかすめた。

「グガワァ…、いかん！ 抜かったわ！」声に出し方向転換を試みるも、二つの影がかすめた際に大きく強い羽が僕の羽を折ったようだった。自由がきかない。失速する。このままでは乾いた谷間に体を打ち付ける。方向は選べない。まずは水平に、少しでも怪我を小さくすることが……。僕は傷んだ羽を我慢して広げ、かすめた二つの影を目で追った。

いた。あれは…鷹だ。そしてもう一つの影は…、雲間から覗いた太陽を背にしたその大きさは空を駆け降りる羽のある馬の如くに見えた。まるで金色の鬣(たてがみ)をもつ馬だ。

「あれは……」羽を背負った馬…そう口に出しかけると、孫のロリンが大声をだした。

「爺ちゃん…大丈夫」少し離れたところから、ロリンが僕の元めがけ飛んできた。

「ロリン…僕は大丈夫じゃ。羽を少しやられたがの」僕の目は空でまみえる二つの影を追っていた。

「爺ちゃん、もう少しだ。あそこに降りよう。右だね、怪我した羽は右だね？ よし、僕が右を支えるから、爺ちゃんは左の羽で舵を取って！ いくよ！」

「すまんのロリン」

返事をしないロリンをみると泣いていた。嘴をギュッと噛み締め泣いていた。

地面へと着地し折れた羽をたたむと、二つの影を求めるように空を見上げた。

鷹はその姿を消したようだった。太陽に照らされた山ブドウの色合いを想わせる羽…、その羽の先端はくの字に曲がっている。

【さっき僕が見たものは一体…】そう考えていると、それは僕たちをめがけて着地した。

「ベガ! どうしてこんな時間に君がここに居るんだい?」ベガはそれには答えず僕に言葉をかける。
 「爺さん…大丈夫かい? 危ないところだったな」そう云うベガの体中の羽は戦いの激しさを物語るようにささくれ立っていた。

更にベガは左目をつぶされていた。僕を助けるために自分の目を差し出したのだ。

「面目ないのお。ロリン。僕はベガに助けられたのじゃ。ベガ、済まぬ。目を潰されたか」僕がそう告げるとロリンは嗚咽を漏らし泣きはじめた。

「そう。良かった。ありがとうベガ。目はどうなの? 見えないの? 怪我しちゃったの?」

「なあに、二つあるうちの一つが減っただけさ。ちょっと痛いけどな、俺の婆様が帰っていないって皆心配してたから探しに来たんだけど、したら爺さんが鷹に狙われてるのが見えたから……。爺さんがロリンの云う長老かい? 俺のシャーマンの婆さんとも知り合いなんだってな…」

「うん。僕の爺ちゃんだよ」ロリンが告げた。

「…:ベガ、僕はお前の爺さんでもある」僕は告げてしまった。蝙蝠のシャーマンの婆様と交わした作戦など何の役にも立たずに。僕は告げていた。

「爺さん?」「爺ちゃん?」

「そしてお前たちは双子の兄弟じゃ……」

「なんだいなんだい騒々しいねえ、カーカーワークワー。誰だか蝙蝠の眠りを妨げるのは……。おや、ベガ。何してるんだいこんな時間に。お前、その目はどうしたんだい!」

「大したことねえよ。それより、いつまでも帰ってこない婆ちゃんを探しに来たんじゃないか」

「そりゃ済まなんだねえ。にしてもその目…:おまえ潰れちゃまったねその目…。おや、そっちは爺さんとお孫さんかえ、なんだってんだよ皆でこんな時間に…:、爺さん、あんた魔坂(まさか)…:」

「婆さん…:申し訳ない。たった今凡てを話してしまっただころじゃ。のっぴきならない事情が降りかかったのお、本当にすまん。それからベガの目じゃが、僕を鷹から助けるために怪我をしたんじゃ。許してくれ」

「ふん。どうせそんなところじゃろう。それもKARASの勝手とらうものさ。さて、ではこれからどうするかという話には、私も混ぜてくれるらうね爺さん」

「僕たちが兄弟ということは、シャーマンお婆さん。あなたは僕にとってもお婆ちゃんです。だから…:僕は爺ちゃんと婆ちゃんに云いたい。まずは僕とベガで話をするよ」

「おやこの子。爺さん、血は争えないねえ。しっかり自分を主張する子じゃないのさ」

「俺もロリンと話をしてから道を探す」

「このKARASどもと来たひにゃ、好きにおしよ。ただベガ判っているね…:、楽(らく)じゃないよ」

「もちろんさ。俺は婆ちゃんたちも守る」

ベガはそう云うと足で地面を掻き削っていた。

どうしたことか、そのベガの足元からは水が滾々(こんこん)と湧き出、たちまち小さな水たまりをつくりはじめたではないか。

【ほお…、やはり。この子の足はグングニルの杖か。さしづめ湧き出す水はミール(ミール)の泉となるやもしれぬ。この子達がムニンとフギンの生まれ変わりであるのなら自分の目を犠牲に命あるもの達の役に立

つのも定め。もう少しゆく末を眺めてみたいものじゃて】

三羽のKARASと一匹の蝙蝠のやり取りを眺めていた人間たちが水たまりを見つけて騒ぎだしている。飛べない腕を振りながら。

儂は折れた羽を引き摺り、蝙蝠婆さんとともに「赤ん坊を抱いた女の神様」の穴ぐらへとその身をあずけた。

了

二千二十二年 八月二十三日 脱稿 二千二十二年 北日本文学賞応募作(予選敗退作品)

時刻(とき)の物語り 詩編 令和6年7月30日 13時50分

ウクライナから避難する子供 : jpg



詩編『風』

かぜが凧ぐ
においが凧ぐ
うみが凧いでた

世界がおくれて凧ぎはじめた
子供の哭く声とどきだす
凧ぎの打ち水

あめが凧ぐ
みぞれが凧ぐ
ゆきが凧いでた

世界がおくれて凧ぎはじめた
永遠(とわ)の祈りがとどきだす
凧ぎの鐘の音(ね)

だれもが凧ぐ
ひとが凧ぐ
無為にきづいて凧いでいた

世界がおくれて凧ぎはじめた
長(とこ)しえの誓(ちかい)とどきだす
凧ぎの祝祭

母音律 あいうえお、あ……凧ぎ、え……世界がおくれて

いつの時代も戦争は弱いものが犠牲になってきた。
子供たちは泣くことしか出来ないなか、親の腕に悴嚙(しがみ)※つく。悴嚙(しがみ)つくことができる腕
が残っていれば良い方だろう。親も亡くし、たった一人戦地を往く子供の写真も枚挙に暇なく目にする。

いつの日か子供たちが、飢え、病、孤独からくる恐怖とは無縁でいられる時代が来ることを切に祈る。そこに行き着くまで、どれほどの墓標が大地を埋めるのか考えただけで寒気がするのだが。それでも人は「親ガチャ」「子ガチャ」「毒おや」と心無い言葉を吐き続ける。無為に気付けなければ風の祝祭も遠い俤物語だ。

『最後の審判』を目にする前に、逝った者勝ちなのかもしれぬ……と考えなくもない。

悴噬(しがみ)※……漢字にしたかったので当て字で括ったもの。

小説 七日 (namoka)

prologue

『闇夜に鴉は二度啼くって知ってるかい？ ……』

聞くとはなしに聴いていたラジオの深夜放送

澄んだ声から程遠く

寝物語からも程遠い

どこか遠くで聞いている

靴につめたセーター三枚

気に入ってたオニツカジャージで手がとまる

空席になった今宵弟の定位置

寢床に敷かれた布団に忍ばす

俺のお気に入り……おまえにやるよと

最後に靴につめたのは

いつも一緒だった「こいつ」と撫ぜる

滑らかな裸体は冷たく白い

手に馴染んだそれは

ドラムスティック

あんたが捨てたこと

記憶の向こうに捨てたこと

恨んでいるだろう俺たちを

遠慮はいらなかったんだぜ

俺は……と呟く

あなたの失敗は家族を持ったこと 一時の感情に振り回され 浮ついた臍の下を てめえで御せなかつたこと 音楽を捨てたこと たったひとつ尊敬できるところだったのに

悟は鞆につめた荷物を眺めます

忘れ物は無いだろうか

忘れ物を気にする自分に気がつく

馬鹿なのか俺はと首を振ってみせました

旅に出るわけではありませんでした

何の中にもありません

ただ出たかった

あなた達とのこの暮し

明日は今よりましだと

明後日なんか知らないさ

「さようなら 探さないで」と手紙のこして

松本悟 中二の冬、昭和五十二年二月 凍てつく夜のことでした。

母親の君代は既に仕事に出かけていました

いつも四時半には「はん場」の飯炊きに出掛けてゆきます

喰うに事欠く日々

永遠と終わりの見えない苦勞の日々

「おふくろ」のことだけが気がかりだったようです

家賃の支払いにと除けておかれたお金の場所は知っていました

家出の軍資金にしようと考えていたようです

空腹を凌ぐための握り飯を二つ握りました

手には五万六千円が握られています

「そろそろ出るか」悟は既に大きくて小さな覚悟を決めていたようです

2022-07-10 (1) .png



明けきらぬ夜を背にして

一羽の鴉が宙（そら）舞います

「クウワァ〜クウワァ〜」と二度啼きました

背中を向けた住み慣れた貧乏住まい

心の中の燻りをもみ消すように雪を手にする顔にこすりつけました

「前だけを見て、歩け俺」そう自分に語り掛けました

いつの間にか空が白みはじめています

月も朧に姿をかえました

雪原は蒼白くキラメキを放っていました

凍った空気が宙を舞い

頭した質量を持って余したように漂います

《「。」のついた文字列以外、地文、人称文の凡てが韻文詩。

文字列頭 母音律 あいうえお順

尚、次章次節より体裁はランダムとなります。》

少年の家出.jpg



Day 1

悟の家出に最初に気がついたのは弟の次郎でした。

悟の机の上に書置きをみつけたのでした。

「さようなら 探さないで」書かれていたのはそれだけでした。

一瞬にして次郎の頭の中は真っ白です。

まるで吹雪の中を足の感覚だけを頼りに歩いているようでした。

【家出？これは兄貴の家出？】

前の日の夕方から小学校の友人宅に泊まりに出かけていた次郎が帰宅したのは悟が家出をした日のお昼まえのこと。

両親はまだ不在。母は仕事に出ていました。

父は前の日から出張に出ておりこの日の夜に帰ってくる予定でした。

次郎は悟の身の回りの物で無くなっているものを探しました。

キルティングの冬物のダッフルコート。緑色のポストンバック。冬物スニーカー一足ジープン学生ズボンセーター。小説の本文芸誌ノート数冊。そしてドラムスティック。

次郎は悟が持ち出したものを新聞折込のチラシの裏に書き出しました。

両親が居ぬ間の出来事。連絡の取り様もありませんでした。

出来ること。判ることだけを纏めたのでしよう。

次郎が自分の寢床に眼をやります。

妙に布団が膨れていることに気がつきます。

布団を捲ると悟のお気に入りのオニツカジャージが出てきました。

眼にも鮮やかなオレンジ色のジャージ。綺麗に畳まれてました。

それまでは驚きばかりが先行し悲しみを感ずる余裕ありませんでした。

ジャージを掻き抱くと次郎の眼からは涙が溢れ出てきました。

涙が伝う頬からは質量を感じさせる湯気が立ち上ります。

これが寒冷地の冬でもありません。

半信半疑。

兄貴が家出？

理由はなに？

ウソだろうと思いたかった

喧嘩になるなまた

親が帰ってこのこと知ったら喧嘩だろう

あゝもう嫌だ

兄ちゃん狡いよ

苦しいのは兄ちゃんだけじゃないのに

めんどくせなあ

逃亡コート着て逃げやがって

次郎は悟の残したオニツカジャージを身に纏ってみました。

大きかったようです。大きすぎました。腕は手首一つ半。足の長さは袴のようでした。着丈は冬物のヤツケほどもありました。

あのひと。こんなに大きかったんだ。

次郎はジャージを身に纏ったまま布団にもぐり込みました。

悟がアスパラの収穫期。

アルバイトをしながら買ったオニツカジャージ。

小学生だった次郎にはアルバイトのお声がかかりませんでした。

次郎は「出来ることは何もない」と泣きながら寝てしまいました。

■

弟の次郎が布団に入った頃。悟は列車の中から冬の海を眺めていました。風を受けた白波が噴火湾のゴロタ浜に広がります。

函館本線。札幌発函館行き。特急北斗の車内にありました。

【※この当時の札幌発函館行きは、小樽回りの函館本線と、千歳回りの室蘭本線の二系統があった。特急北斗は、小樽回り、室蘭回りの二系統運転だったはず。後に特急北斗は、室蘭回りに統合されました。札幌、千歳、苫小牧、室蘭経由、伊達をはじめとする太平洋沿岸域、噴火湾ライン、長万部、八雲、森を走り、進行方向左手には、内浦湾の穏やかな海を眺め、吹き飛ぶ以前の駒ヶ岳を望むことができました。悟が乗った特急北斗は小樽回りの山越えルート。小樽、余市、倶知安、ニセコ、そして長万部。即ち、長万部が室蘭ルートと小樽ルートの合流点だったようです。この当時の怪しげな記憶を手繰るのであれば、確か、札幌から函館まで四時間と少しの所要時間を必要としていたと記憶します。】

列車は雪深い倶知安からニセコを抜け長万部に到着していました。

ほとんど寝ることもなく朝を迎えた悟。

列車に乗り込むとすぐに眠りに堕ちていました。

「長万部え〜長万部〜」続いて聞こえてきたのは「カニめしい〜カニ飯はいらんかえ〜イカ飯にカニ飯〜弁当にお茶あ」の声。

悟は財布から二千円を取り出すと窓を開け弁当売りを呼び止めました。

「カニ飯いくらですか？ …… そうですか、イカ飯は？ ……じゃあ、イカ飯とお茶を下さい。」
千円支払い、二百数十円のおつりでした。

【当時の国鉄運賃は特急自由席で札幌函館間で三千円を少し超えるぐらいだったと記憶しているのですが、残念ながら調べても出てこないので概算で記させて頂くこととします。イカ飯が七百円ぐらい。お茶が八十円ぐらいでしたね。】

財布を開けて確かめる

イカ飯買って確かめる

抜き出すたび払うたびに確かめる

背中を流れる冷たい汗

これが俺の生命線

あといくら

命の長さ金の高

飢えを凌ぐか暖とるか

手前で勝手に飛び出して

おなじ現実突きつけられて

足掻く暮らしは追ってくる

死ぬまで続くと追ってくる

無計画だと詰(なじ)ってみても

列車は急に

止まらない

どうやら悟も自分の無計画さに気付いたようです

貧乏暮らしは嫌でした。

それでも我慢ができなかったのかと問われれば「そうではない」というでしょう。

悟が最も我慢ができなかったこと。

それは「おふくろ」の働く姿を見続ける毎日。のべつ幕なしに働き続ける毎日。来る日も来る日も凍える朝も雨に打たれる朝も働き続ける毎日。

拳句が突然始まる怒鳴り合い。詰り合い。罵詈雑言の応酬の日々。不幸中の幸いでしょう。父親の隆は一滴も酒を飲めない下戸でした。酔って暴力を振るうということはありませんでした。それでも八つ当たりは子供たちに向きました。

離婚しないのが不思議でした。君代はことある毎に離婚を仄めかしていました。それでもいつも最後の最後には踏み止まっていたのです。

雪と列車.jpg



車窓を流れる景色がまたホワイトを強くしだしたようです。枯れて撓んだ枝に留まる鴉が梢を揺らして飛び立ちました。常緑樹は真白いハンチングをかぶった様に首を垂れます。

北海道でも太平洋側は比較的、雪は少ないところですが、同じ道南地方ではありながら日本海側の檜山地方は雪が多かったようです。

あゝそれにしても……

地方都市の雪景色と列車の相性

夫婦として長年連れ添った距離感を思わせます

列車は線路を走ります

それに纏わりつく風雪

眺めているだけで

涙を零すに苦勞はありません

窓をうつ雪たち

真白い雪たち

誰もが思い出すであろう

……あなた

悟も例外ではなかったようです

悟をのせた列車は大沼を過ぎていました。

悟は函館が近づく毎に自分の心臓が早鐘を打ち鳴らしていることに気がついていました。

「おふくろ達はまだ帰ってきてはいないだろう……はんかくさい。誰に叱られるわけでもないのに気にする必要があるものか。」

思い出すことが自分の決心を鈍らせるとでも感じていたようです。

悟は硬くなったイカ飯を頬張り冷たいお茶で流し込みました。

このときの悟は次の計画を立てていました。

「青函連絡船に乗って東京に向かおう」と。

初めて北海道を離れることへの緊張感。

如何やら胸の高鳴りは未知の世界の扉を開けることへの期待と恐れから来ていたようです……。



悟が家出さとするがいえで

いったいどうして

嘘ようそあの子に限って家出など
ねえ悟かかっているなら出てきてよ
外に出て

空を見上げて

子を思う

遠き雲間に

面影映して

あゝこの冬の寒空の下

祈りとどけと膝をつく

苦しみとどけと雪溶かす

背中合わせに身をおきて

お前寒けりゃわたしも寒い

お前ひもじけりゃわたしもひもじい

お前泣くならわたしは哭く

お願いだから戻っておくれ

お願いだから生きておくれ

おねがいだから……

君代が帰って来たようです。

次郎から悟の家出の知らせを聞いたのでしよう。

裸足のまま降りしきる雪の中歩み出していました。

手には「さようなら 探さないで」と書かれた書置きを手にしたまま。

家の前、吹き溜まりとなった雪に突っ伏して哭いていました。

次郎は君代のコートとマフラーを手にすると君代に掛けてやりました。

「かあちゃん。風邪ひくから家に入りな……」

馬鹿野郎が

あんたまでが

泣かせやがって

なにもしてない母ちゃんを

裸足で表に走らせて

赤く腫らした顔みて見ろ

兄貴あんたが泣かせたんだ

バカ兄貴……

次郎は君代の肩に手を置いたまま寒くて震えていたようです。

君代の泣く姿が堪えたのでしよう。堪らず次郎も泣いていました。

その日の夜のこと。

父親の隆が出張から戻ると両親二人は善後策の対応に追われていました。

「取り敢えず高橋先生に連絡をしよう」

高橋峰子は悟の担任教諭でした。

隆が電話で仔細を告げると電話を置くが早いか悟の家を訪ねてきました。学年主任であり生活指導教諭であるベテランの三島恭一を伴い。

隆と君代は学校での暮らしぶりと思い当たることについて質問したようです。時折喧嘩をすることぐらいいしか想い当たらず先生達も策無しの様子。高橋峰子は君代の手を取り一緒に泣いていました。

「おかあさん、悟は大丈夫です。必ずあの子は帰って来ます」と。

「警察への搜索願や出奔の届け出はしたのですか？」

現実的な動きの確認をしたのは三島恭一でした。

この時点ではまだ警察への届け出をしていなかった松本家。

三島の確認によりやく思い至ったようです。

「ではどうでしょう。お父さんと私と警察に行き、家出人届と搜索願を出してきましょう。お母さんと高橋先生はここで待っててもらうことにしましょう。私たちの留守中、もしも悟が帰ってきたら、警察に電話をかけて下さい。これは高橋先生に掛けてもらった方が良いでしょう。

お父さん、警察に届けるのに必要になりますから、悟のなるべく最近の写真を用意してください。全体の雰囲気分かるものと顔がはっきり区別できそうな写真。それから、家出をした時の服装や荷物の状況がわかるものはあるでしょうか」

「俺わかるよ」声を上げたのは次郎でした。

次郎はチラシの裏に悟の持ち出したものや家出時に着ていたであろう着衣に至るまで書き付けたものを君代に渡しました。

「弟さんだね。今年の春にうちに入学だね。少し早いけど挨拶しようか」さすが学年主任・生活指導担当教諭のベテランどころです。

「名前を覚えてくれるかな。私は三島恭一です。こちらは……」

「高橋峰子です。悟君の担任です」

「松本次郎です。悟の弟です」

「しっかりした弟さんですねお父さんお母さん。では次郎君。君の作った悟の資料借りて行きますね。写真は……これだけあれば大丈夫でしょう。悟は、髪も染めてませんでしたね。オキシドールで脱色？まあ、問題ないでしょう。パーマはかけてませんね」

「はい。大丈夫です」と高橋が応える。

「ではお父さん行きましょうか」と告げると玄関へと出て行きました。

外は深深と雪が降り続けています。

あとを追って出たのは高橋峰子でした。

「三島先生、お手数をお掛けします。どうか宜しくお願いします」と告げると三島は片手を上げて合図をすると車に乗り込みました。

……さとる……

悟……駄目だよお前

家出

苦しんでたってのかい

平気な顔をしてたじゃないか

お前はいつでもそうだった

私にみせるお前の顔は

いつも優しく笑ってた

笛……アルトリコーダーは下手だったよ

画は上手だと三島先生が云っていた

国語は読解力に非凡な才がみられるってさ

あんた詩を書いてたんだってね

小説も書いてたらしいじゃないか

上手いなあと思っただのは

生徒が書いた短歌の大会

お前優秀賞で掲載されてたじゃないか

北風と 共に暮らして はや八年

石狩川も 我がものとして

……帰っておいで悟。

悟の担任教諭の高橋峰子の驚きと落胆ぶり。

心配の様は母親の君代に負けず劣らずのものだったようです。

これ以降。

毎夜学校の仕事が終わると悟の家を訪ねては遅くまで君代と言葉を重ねていました。それは七晩続いたようです。

そのころ悟は青函連絡船の中に身を預けていました。気分だけは何やら一丁前。家族の心配を他所に呑気なものです。

演歌歌手にでもなったつもりでいたのでしょうか。連絡船のデッキに出ると「函館の女（ひと）」を口ずさんでいました。

随分寒い夜でした。函館駅裏の青函連絡船の発着港はオレンジ色の高覧式照明に映し出されています。雪が斜めに降りつけていました。

鴉でさえ罫（ねぐら）に帰っているのでしょうか。一羽も見かけることはありませんでした。この当時の函館の鴉は空を飛ぶ姿より陸を飛び回る姿が多く目につきました。港町ですから死んだ魚や残飯が港のあちこちに散逸していましたから。

オレンジに照らし出される雪たちが幻想的でもありました。

様々な出会いと別れの舞台の町となった函館。なかでも青函連絡船が人々に齎す旅愁は他に代えがたい存在でもありました。それも昭和六十三（千九百八十八）年三月を境に廃止。関東・東北地方から北海道民の悲願でもあった青函トンネルが開通したのです。後に旅行会社の添乗員として勤めるようになった悟。

青函連絡船廃止メモリアルツアーでは随分この船に乗ったようです。

それは懐かしかったでしょう。感慨も一入だったようです。先を急ぐことといたしましょう。

目が覚めると連絡船は青森港に入港するところでした。悟はデッキに出ると青森の町を眺め見ました。寂しい町だと感じたようです。

なまらさむいっぺよ

函館よりしばれんでねえの

何時よと時計みる

三時半……

まだ夜明けまではだいぶある

朝にならなきや列車も出ねえ

あんだってせぼどうするべ

腹も減ってきたシタツケどうする

「おにいちゃん、ぼちぼち港さへるから、下さおりてける。デッキさシバレテっから滑るはんで、気をつけてな」

どうやら船に乗ってる甲板作業員か港湾作業員なのでしょう。

接岸の様を眺めていた悟に声をかけてきました。

津軽弁なのでしょう。些か聞き取りにくいイントネーションでした。

悟は石狩という札幌の隣町に住んでいました。ただ父親の隆が函館の湯川町出身でしたから浜言葉の訛りが強い地域。知らぬ間に津軽弁も理解できるようにはなっていました。

船が青森港に着岸し乗客が降り始めたのは四時でした。

さすがにこの時間だからでしょう。

乗客は多くはありませんでした。

乗下船ターミナルも閑散としていました。

本州へと向かうトラックをはじめとする貨物輸送車両が大半だからなのでしょう。時期的にも観光客で混雑する季節ではありません。

何気なく発着便の時刻表が目に入ります。

「次の函館便は六時か……」

実はこの時すでに悟は怖くなっていたのです。

青函連絡船に乗り青森へと着いたは良いものこのことから先に不安を感じていました。

「東京かぁ……」

待合室の椅子に座り財布を取り出し確認します。

財布には既に五万一千円しか入っていません。

「五万じゃ、東京についたら四万だ。これじゃぁ直ぐに路頭に迷う。どうしたものか……」

少年白黒.jpg



鳴鳴く海こえてみて

今更気付く

浮世のからさ

血気(けつき)はしりて

こうかいに溺れる

さてどうすると

思案に暮れて

海眺めても

ええ考えは浮かばじ

乗って帰って浮かぶ……瀬もあ……り

「あんちゃん、おめさ、こつたら寒いところで何してるべよ。駄目だはんで、風邪こひくべよ。なあ……どこさ行くってな。おめさあれだんべ、船こさのって来てたつきゃさ。」

悟は待合室から外に出て船の停泊する岸壁に来ていたのです。

幸い雪はやんでいました。暗いながらも明かりも灯っていました。

待合室にいたところで考えは同じところをグルグル回るだけでした。

悟は岸壁の係留柱(ビット)に腰かけながら詩を編んでいたのです。

それは些か面妖な塩梅と映ったことでしょう。

悟に声をかけてきたのは船の中で声をかけてきた甲板作業員でした。

悟は少し間を置くと「東京行きの列車まで時間があるから時間つぶし」と答えました。それはそうでしょう。函館行きの連絡船を待っているとは云えません。

「なくに東京さいぐつでな。なくしにいぐつてよ。わりいこといわねっから、帰れエ、帰れエ函館さ。」
どうやらあつという間に家出とバレていたようです。

「なして出て来たかしらねっけど、おめ、こつから先まつてんの地獄しかねえど。今までよんり、ヤバイ地獄しかねっから。取り敢えず帰れ。いつか、あんちゃんが函館行きの切符買ったら、わあはなんも見なかったことにするはんで。したつきゃあいだよ。あんちゃんがもしも切符買わねかったら、わあ……交番さいくど……そいで、なあ……がこまんねちゅうならすきにすれ」

悟は少し考えた後口を開きました。

「おじさん。煙草一本ください」と。

「どんだつきゃさあ、このボンズ」というと甲板作業員はハイライトを一本抜きだすと悟に渡し火をつけてくれました。

悟がはじめて味わった人世の情け
イッチョ前を気取ってみても
海の前では屁のツツパリ
縁は異なるもの味なもの
乗りがかった船でも降りてなんぼ

ハイライト

いぶす煙に

浮世が染みて

目にもしみたか

航路吹く風

「切符さ買うんだべな……」

「はい。」

Day 2

「もしもし、母さん？ 私、君代。チョット悟のことで相談があるから、今日小樽に行くので……うん。そっちに行ってから話します。誰か来る予定あったかい？ ……あ、そうかい。うん。そしたら後で。」

二日目の朝。君代は小樽の実家に電話をいれました。

経済的な問題もあったのでしよう。

悟を探すにしても何かがあったときに直ぐに動けるようにしておかなければなりません。経済的な問題は小さくありません。

幸い今日は日曜日でした。次郎が家の留守番をしてくれます。

君代は隆と二人で小樽の実家に相談に行くことにしました。

君代の実家は西大寺家という小樽どころか北海道でも名の知れた歯科医の家筋でした。

君代はその長女です。

しかし君代と松本隆との結婚には最初から西大寺の家では反対でした。それは隆の非嫡出子という出自であり結婚当初はバンドマンのドラム叩きという氏素性の不確かさに起因していたのです。

挙句が悟は西大寺家の男系一番孫。初孫でした。

これが西大寺にとってはオモシロくなかったのです。

小樽潮陵高校を首席卒業。北大医学部主席入学そして卒業という輝かしいキャリアを持つ北海道でも知られた外科医の長男がいるにも拘わらず。

一番孫の父親は非嫡出子のバンドマンという家筋。

挙句が再婚ときていましたから西大寺。特に千代の心中は穏やかではなかったのです。

「父さん、ほれ、なんだか君代が今から来るってき。松本も一緒に来るって云ってましたよ。なんだか悟のことで相談があるとか。」

「なんだ。悟がどうかしたのか。悟はまだ中学生だったな。」

「はい。確か二年生だったはずですよ。」

「じゃあ進学の話しとかいうわけではないな。私は今日は予定を入れていたから、お前が話しを聞いてやりなさい。」

「予定？ 予定って、父さんまさか、またあの女のところへ行くのじゃないでしょうね。」

「何を朝から馬鹿なことを云っている。歯科医師会の集まりだ。」

「歯科医師会、歯科医師会ってなんでもそれで片付けて。父さんとあの女のことだって、元々は歯科医師会を出汁に使用って露見したことじゃありませんか。」

「うるさい！ 兎に角そういうことだ。」

どうやらここはここで悶着の種を抱えていたようです。

外から見ただけではわかりません。

千代も大概のことは目を瞑ってききました。

ただ巖が入れあげたあの女のことだけは別でした。

千代が二人の関係を知ることになるや否やその女はことある毎に巖と自分の関係を吹聴して歩いていたのです。

家を守ろうとすれば女をつくる。

子を守ろうとすればゴクツブシと結婚する。

後継ぎを考えれば一番孫は非嫡出子の子供。

思うように行きませんでした。

「悟のことで相談て……」

どうやら千代の中では嫌な予感がしていたようです。困窮しての相談事であればこれまで何度もありました。また始まった。今度はなんだと多寡を括ることも出来ました。ですが今回は「悟」のことでした。



午前十時過ぎに函館港に戻った悟が最初に取り掛かったことは罫探しでした。

「取り敢えず、今日から三泊で旅館を探そう。予算は一泊四千円まで。朝食付きだ。安い晩ごはんが食べられる場所がいいだろう。」

悟の手持ちはこの時点で四万八千円でした。三泊したとして一万二千円が消し飛びます。昼夜合わせて食事代千五百円。四日間で六千円。合計一万八千円です。

「まだ三万円残るか。よし。これに手をつけないうちに仕事をみつけよう。出来れば住み込みか寮があるような職場がいい。」

計画は緻密でした。計画通り行けばなのですが。

函館まで戻ってくる青函連絡船の中で例の甲板作業員のおじさんに朝食をご馳走してもらいました。煙草も二本貰いました。

さすがに一緒にいるところで吸うのは具合が悪いということで悟はデッキに出て吸いました。

連絡船の売店でも煙草が売られていました。

悟は悩んだ挙句ハイライトを三箱買いマッチも一つ買いました。

連絡船を降りしな甲板作業員のおじさんを見つけると駆け寄り上着のポケットに煙草二箱をねじ込みました。

おじさんはポケットに手を入れるや何も言わずに笑っていました。

「ごはんごちそうさまでした」

「なんもだ。ちゃんと、うちさげえれよ」

二人の会話はそれだけでした。

悟は函館駅に向かうと待合室に席を陣取り詩編ノートを取り出しました。どうやら家出日記を書くことを思いついたようです。

名前を聞いても教えてくれず

訛りがきつくてわけわからず

何度も何度も聞き直し

まるで言葉の通じない

外国人と話したみたい

なあと呼ぶのは相手のこと

わあと呼ぶのは自分のこと

ヤヤコシイたらありゃしない

なにが喰いたい何でも喰えや

腹がへったら想い出す

なあのかっちゃんの飯のこと

「なあ」ごめんよ。俺……
帰らないよ

名前の知らない甲板員のおじさんへ

母音律「あ」の詩

昭和五十二年二月〇〇日 十一時四十三分 函館駅で

悟は得意の早文字でノートに詩編を紡ぎました。

顔を上げた悟の前には駅中の「旅館案内」の文字が読めました。

「すみません。今日から三泊できる旅館を探しています。予算は朝食付きで四千円までなんですけどありますか……」

「何名様でご利用でしょう……」

「一人です。」

「お兄さん一人ですか？ 保護者さんとかは……」

「いませんよ。函館ラサールの推薦入学の面接試験を受けに来たついでに泊まるだけですから」

なんと子供でしょう。云うに事欠いて名門函館ラサールを持ち出しました。この辺りが悟の心臓です。

元来社交性に富んだ子供でしたからお喋りは得意。

なにしろ三歳児のときに家に訪ねてきた飛び込みのセールスマンを羊羹とお茶で持て成し座を繋いだという逸話を持つ子供です。

地元民に函館ラサールを知らぬものなど居ませんでしたからそのご威光をお借りしたようです。

案の定と申しましょうか。

旅館案内所の受付係の態度も急変。

「では、駅を出て右手に百メートル歩いた右側の虎屋旅館は如何でしょう。朝食付きで三千六百円の和室ですが」となりました。

「そちらで結構です……チェックインの時に三泊分お支払いすれば良いですね」

「その旨旅館に連絡を入れますからここで暫くお待ちください」

程なく先方の了解を取り付けた受付係は予約確認書を悟に渡しました。

「煙草が吸いたい。腹も減った。旅館代が千二百円浮いたのか。じゃあ折角函館に居るのだから烏賊刺し定食でも頂きますかね」と。

何処まで行っても楽天的な子供でした。



「ほれみなさい！ 言わんこっちゃないでしょ。親がそうしてだらしないから子供まで見てみなさい！」
君代と隆は小樽の君代の実家西大寺の家にありました。
君代が母親である千代に仔細を報告するや否や烈火のごとく言葉を浴びせました。

「はい。申し訳ありません。」口を開いたのは隆でした。

「それで、どうなっているのさ。」

「警察に届け出を出し捜索願も出しています。ただ今のところ目ぼしい情報もなく、各地の警察署に捜索用の写真を配布するというこのよう……」

「情けない。西大寺の孫が警察のご厄介？ 君代、あんたどうするつもりでいるのさ。悟に万が一のことでもあったら。あの子は西大寺の一番孫、初孫なんだよ。あんた達だけの問題じゃないことは分っているんだろうね。」

千代は次第に自分の声に興奮を隠しきれなくなっていたようです。

【こんな時ばかり西大寺、西大寺、一番孫、初孫って散々憎まれ口叩いてきたくせに。何を云ってけつかる】君代は頭の中で呟きました。

「ごもつともです。悟の学校の先生達も随分心配してくれています。手分けして出来るだけのことをしてくれるという言葉も頂いています。どうか過度なご心配はいただきませんよう。」隆は千代にそう告げました

■第三話につづく■

「もしもし、西大寺です。あら、まあまあご無沙汰しております。木村先生にはいつもお世話になっておりまして。えくえ、えくえくそうですそうです。今日もなんだか歯科医師会の会合があると云って出て行きました。えくつ、あらそうですか。ええ、ええ……ニューギンで？ うちの先生がですか？ 見間違いではなく？ はい。えくこれはご丁寧にお知らせを頂戴しまして。うちの先生も、北海道歯科医師会の副会長を務めるようになって、なんだか世間が狭くなってきたなんて云ってますから。人様から誤解を受けるような行動は慎むように言うことにしましょう。何を仰いますやら。木村先生の奥様のお心遣いにはいつも感心させられております。はい。えくでは、ごめん下さい。」

ただ事ではありません。茶の間の焼けたストーブのように千代が顔を真っ赤にしています。

君代には大方の想像がついたようです。

君代が考えたこと……。

それはこの後しなければならぬ金策に影響を与えないことが前提でした。

【ここでご機嫌を損ねては何の得にもならない。ここは肩を持ってやるのが得策……】と。

「母さん、木村先生の奥さんからの電話なの？あの耳年間がなんだって？」
隆がいるせいでしょう。千代の口は重たいようです。

「ちょっとあなた、ガソリンいれなきゃって云ってたじゃないの。いってらっしゃいよ。今日は日曜日だから開いてるお店は当番店だけでしょ。」

「そうだな。チョット行ってくる」

この辺りは松本夫婦よくしたもので阿吽の呼吸でした。
隆はサツと席を立ち出かけてゆきました。

「で……どうしたのよう。そんなに怒ってェ。」

「……女とニューギンで買い物してたんだとき、父さんが。それを木村の奥さんが見たんだと。何をしているんだか。脇が甘いのよ大体において。」

「女って、例の女のこと？」

「そうでしょう。」

「でも、父さんもいい加減にしなきゃだわね。北海道歯科医師会の副会長になって責任も重くなっているでしょう？人の眼はうるさいわよ。大体面白おかしく尾鰭がつくものでしょう？」

「ダメなのよ。私が云っても聞きやしない。よっぽど高島まで乗り込んでやろうかと思ったぐらいだけど……」

君代の中では「高島」という言葉が存在感を大きくしてゆきました。

【はあくこれはやり様によっては……】と。

「駄目よ。母さんが直接相手のところに乗り込んだら、足元を見られるだけでしょ。かと云って、逆上(のぼ)せあがっている父さんに別れろと云っても聞く耳は持たないでしょう？母さんが直接行って何かをしたり云ったりしたら、世間体も悪い……」

「そうなのよ。だから腹が立つけど我慢してるのだけどね。」

「もう随分と長いこと我慢しているじゃないの……」

「……」

「まあ、今日の木村先生の奥さんからの電話のことは、父さんには内緒にしておきましょう。後々動きにくくなっても困るでしょう。」

「そうだねえ。」

「で、母さんは、手切れ金どの程度考えているの？」

「……そうだねえ………やっぱりいるんだろうね。手切れ金。」

「そりゃあそうよ。相手は後家さんでしょ？ 歳もいつてる。ここでタダで放り出されることなど考えるものですか。」

「……そうだねえ………」

君代は頭の回転の速い人間でした。

子供の頃から大人の会話をサラッと紡いでみたり拾ってみたりバツサリ切り崩してみたり。

「お前は女にしておくのが惜しい。男に生まれて政治家にでもなればよかったのに……」そう云われる子供でした。

ガソリンをいれに行っていた陸が戻ったようです。

「あなた。高橋先生もいらっしゃるから帰るわよ。車で待っててちょうだい。」

「じゃあ、そういうことで、チョット赫子^{ヒゲコ}とも考えてみるから任せてちょうだい。」

「そうかい。じゃあ頼んだよ。」

「ところで、云にくいんだけど十五万ほど都合してください。悟のことで予想外のお金が出そうなので困っています。」

「仕方がないねえまったく……悟のことで何か分かったらすぐに連絡するんだよ。父さんには私から云っておくから……」

千代はそう云うとお仏壇からお金を出して君代に渡してやりました。



「はい。いらっしゃいませ。松本様ですね。ええ〜ええ〜ご予約頂戴しております。どうぞおありがとうございます。せば、係にお部屋まで案内させますので、宿帳にご住所と連絡先、お名前のご記入を……はい。ここですね。」

旅館案内所の予約確認書を出すまでもなく。

虎屋の女将さんの受付は淀みの無いものでした。

悟は住所を親戚の赫子叔母さんのものを書きました。電話番号も赫子のものを書きました。この辺りは妙に馬鹿正直なところも窺えます。

部屋は八畳の和室。テレビと冷蔵庫と鏡台に文机が設えられ部屋の真ん中には大きな机。その上にお茶のセットと茶菓子が一つ。

一人で旅館などに泊まったことの無い悟にとってはどれも新鮮であり大人の世界を垣間見た気分になるに十分だったようです。

「履歴書かぁ。仕事を探すには履歴書がいるのだな。明日でも買ってくるでしょうか。」

文机を見た悟が一番最初に考えたことが履歴書のことでした。大きな机の上には灰皿とマッチもありました。

悟は窓を開け放ちます。

雪が降りはじめました。

窓の外には港に停泊する大小様々な船が見えました。

灰皿を持ち窓辺へ腰かけるとハイライトに火をつけました。

だいぶハイライトの強さに慣れて来たようです。

親の煙草を盗んで吸ってはいたものの両親が吸ってた銘柄はセブンスターでした。やはり幾分軽かったようで初めておじさんに貰ったハイライトを吸ったときには噓せこんでしまいました。

灰皿で火を揉み消した悟は窓を閉め文机の前に座ります。

鞆から詩編ノートを取り出します。

お財布から凡てのお金を出しました。

「ゆれる……三万円。ゆれるたわわ……六千円。ゆれるたわわ……六百円。ゆれるたわわなちぶ……九十円」

小学校の四年生の時に悟が身に付けたお金の数え方でした。

「ゆれるたわわなちぶさ」

当時の悟は読めない漢字ばかりに支配された小説を読むことが好きでした。まるで暗号を解読しているような気持になっていたようです。

辞書とノートは肌身離さずの毎日でした。

「三万六千六百九十円」宿賃を前払いし烏賊刺し定食を食べた悟の全財産でした。詩編ノートに書き記します。

三万六千六百九十 数えるたびに減ってゆく
いつまでもつか 知るまでもなく
喰うこと詰めつつ 飢えしのぎ
ねぐらしのいで 寝起きする
凍える冬を 呪いながむる

母音律「あゝおお」の詩

昭和五十二年二月〇〇日 十五時五十五分

「風呂に入れるのだな。風呂へ行こう」

悟は詩編を一つ編むと風呂に入りに行きました。

ただ〜。

悟はここで大きな失敗をしてしまっていたのです。それは「灰皿」の後始末のことでした。

人の世というものは生きていますと何時何処で誰からの恨み妬み嫉みを買ったものではありません。

それもこれも人生勉強です。

ただ十四歳の悟にとっては些か荷が勝ち過ぎた勉強かもしれません。

布団を敷きに来た部屋付きの係が机の上の灰皿にある煙草をみつけてしまいました。

「女将さん、あの一人泊まりのお兄ちゃんて、お受験の宿泊でしたね〜お部屋の灰皿にこれが……」

「あのハンカクサイ者、煙草なんか吸ってるてのかい？」

「みたいですね〜、どうしましょう。お部屋の灰皿外しておきましょうか。」

「……そうだねえ。今、お風呂だろ？ この灰皿、元のところに戻しておいて頂戴。このままだよ。有ったところにそのままに。換えたら駄目だよ。新しいものに……」

如何やらこの女将もドロドロした何かを抱えていたようです。

Day 3

「松本さんおはようございます。はいお食事はこちらの席をご用意しています。夕べは眠れましたか？」

虎屋の女将は夕べの煙草のことを仄めかすことはありませんでした。

悟はパジャマ代わりのスエットのまま朝食テーブルに着きました。

「はい。ぐっすり眠れました。……これが朝ごはんですか？　すごいですね、朝から烏賊のお刺身がつくんですか。」

「函館の名物ですからねえ、塩辛も自家製ですから食べてくださいね。」女将は茶碗にごはんをよそうと悟に手渡ししました。

「今日はこれからどちらかお出かけですか？」

「……もう一度、学校へいかなければならなくて……あとはそれから考えます。」

「せば丁度良かった、お握りを握っておいたから持っていけばいっしょ。二つ握っておいたから持ってください。」

悟にとっては好都合でした。これで一食分浮かせることができました。

それにしてもこの女将。何を考えているのでしょうか。

この日の悟の予定は履歴書づくりから始める予定でした。

昨日の夕方に食事に出かけた際に見つけた文房具屋で履歴書を買ってきていました。それを午前中に書き上げ午後から手当たり次第に面接に行こうと決めていたようです。

どうやら悟の計画では「蕎麦屋、すし屋、魚屋、市場」から中りをつけて行こうという計画だったようです。

「昼から出かける予定だったのにチョット予定が狂ったけど、まあいいか。喫茶店にでも入って書くでしょう。」

この時の悟は自分に搜索願が出ているなど考えもしませんでした。

西大寺の家では巖の弟たちに悟の家出のことが知らされました。中でも巖の一番下の弟は函館の信用金庫勤め。

「君代のところの悟を覚えているか？　あ、なんでも家出したらしいから、まあ、無いとは思いますが、もしもそっちに立ち回ったら知らせしてほしい」と電話していました。

朝から君代のところにも親戚兄弟姉妹からの電話が鳴りっぱなしです。そこへ妹の赫子から電話が入りました。

「お姉さん？　なに、悟どうしたってさ、母さんに聞いてびっくりしたべき。なんで……どこ行ったのさ、この真冬に。」

「朝からさ、兄さんどこから電話は来るわ、ほれ父さんどこの弟の正次おじさんからも電話は来るわ。大変だって。土曜日の明け方出てったみたいだあ、なんもさ、もう、わやだ。」

「してわ、まだみつからないのかい？」

赫子は西大寺の君代の兄弟姉妹の中もっとも悟を可愛がりました。

赫子が独身の時には月に一度二度悟の顔を見に行くのを楽しみにしていたぐらいです。

君代と悟の話しをしていると知らぬうち涙が出てきていたようです。

「赫子、母さん他になんか云ってたかい？」

「なんもさ。悟のことで君代が困ってるから協力してやんなさいって。時間あったら、姉さんのところに行つてやりなさいって云ってただけさ。」

千代はこの機に乗じて君代と赫子を繋いでサッサと作戦を練らせようという腹だったようです。

「赫子、あんた今日時間ある？」

「そうそう。時間は大丈夫だけと姉さん、わたしの知り合いの八卦置きの所に行こう。一緒に。有名な八卦置きでね、凄く当たる人だから、悟がどこに居て、いつ帰ってくるか見てもらおう。」

赫子は君代に占い師の所に行くことを勧めました。

君代も事が事。時が時だけに占い師の言葉でも頼りたいところだったようです。赫子と待ち合わせの間を決めると電話を置きました。

当たるも八卦当たらぬも八卦易占頼つて我が子をさがして

いっそ藁でも掴みたくイワシの頭もなんとやら親の心

すべからく子知らず思うてみても涙枯れる暇もあらずなり

縁(えにし)手繰りて問うてはみても顔も背丈も覚えは目出度くなく

これも親の奠とするも無駄とはおもても不動の山に為れず

自由律短歌 母音律「あゝお順」

第四話につづく



君代と赫子の二人は札幌の狸小路五丁目にある八卦置き(占い)のお店にありました。どうやら赫子のご臈肩の占い師なのでしょう。仔細にわたり説明するのは赫子の役目でした。

「お姉さん、悟の生年月日といなくなった日をこの紙に書いてちょうだい。服装も分かった方が良いでしょうか？」

「わかることだけで良いですから。それから、お母さんとお父さんの生年月日も書いてもらえるか……。」

君代はいつになく緊張していたようです。自分の子供が家出をしこの寒空の下どうすることも出来ずに八卦置きを頼らなければならないのです。それは緊張もし腹立たしい思いも募ったことでしょう。

君代があらかた書き終わると易者が筮筒から筮竹を抜き出しジャラジャラとやりはじめました。

五十本の筮竹から一本の太極と呼ばれる易神竹を抜き出すと筮筒に立てていれました。ジャラジャラパチン。ジャラジャラパチン……黒檀でできた算木でしょう。

抜き出した筮竹にあわせ算木を並べ始めました。

「……南だべね。北海道からは離れてないね。……なんもだ〜大丈夫だ。生きてっから、余計なことは心配しなくていっから。」

易者は君代の手を取りながら言葉が続けます。

「いっかいお母さん、この子は帰ってくるから心配ないから。十日以内だね。なに、今日で三日目かい、せば、あと一週間以内に帰ってくるんでねえの。帰って来た時に怒ったらだみだよ。原因はあんたたちが一番よく分かっていることだべし？ この子はちゃんと勉強して帰ってくるから心配しなくて大丈夫。……それからね、これは赫子さんも関係あんだべね。ご実家のゴタゴタはお姉さんと相談して進めて大丈夫。」

君代も赫子も小樽の実家については一言も触れていませんでした。

君代にするなら「我が意を得たり」だったことでしょう。赫子にしても父親が後家さんに入れあげていることは旧知の事実。電話で君代から「母さん他に何か云っていなかった？」と聞かれた時点でそんなところだろうとは予想もしていたようです。

二人は易者の店をあとにすると狸小路六丁目裏にある喫茶店「沙羅」で向き合いコーヒーを飲んでいました。

「お姉さん、良かったべき。ちゃんと帰ってくるって云ってもらえて。大丈夫だあ、あの人ほんとに当たるから。有名な易者だから。」

「まあねえ〜あれだけハッキリと生きてるから、十日以内で帰ってくるからって云えるんだから自信あるんだべき……ところでさ赫子。小樽に帰ったときにね、父さんの例の女の件で……木村先生のところの奥さんに見られちゃったらしいのよ。」

「誰がさ…父さんがかい？何処でさ？ニューギンで？何やってんのさ、はんかくさいんでないのかい。いやあ〜腹立つ。やっぱりの時に敏子と二人でぶっ殺しておくんだったわ。なして、そうやって……」

「……それでさ、母さんとチョット話をしてさ、どうするか赫子と相談するからちょっと待ちなさいって止めたわけよ……それでね……」

チョット物騒な話しが飛び出してきました。

何を隠そう赫子はその昔まだ高校二年生の頃に父親の巖を殺してやろうと思いつき実行に移したことがあったのです。余りにも理不尽な父親の態度。外に女をこさえ母親に苦しい思いをさせる巖の不条理な態度に我慢がならなかったようです。

草木も眠る丑三つ時。父母の寢床には末娘である妹の敏子が一緒に寝ていました。赫子は抜き足差し足で寢床に向かうと敏子が飛ばした枕を拾い巖の顔の口元めがけて塞ぎ込みました。どうやら力が緩かったのでしょう。巖は目を覚まし抵抗をみせたようです。

「敏子！手伝いなさい！父さんぶっ殺してやるから、手伝いなさい。」

赫子は自分の力が足りないと考えたのでしょう。敏子の応援を求めたのですが驚いた敏子は加勢するどころではなかったようです。

そのうち形勢は目に見えて赫子の不利。

「ヤバイ」とみるや赫子は枕から手を放し大声を上げて泣き出してしまいました。

夜中のことです。大声で泣き始めた妹を心配した男兄弟たちが二階から「何事か」と降りてきました。

巖は「上に連れていけ」と一言告げた切り何も言うことはありませんでした。ただこの日を境に巖の千代に対する態度は柔らかなものとなったようです。

赫子の謀反は失敗に終わりました。

でも結果的には父親からの責めも受けることも無く平穏な日々を送った赫子の功績は小さくは無かったです。

男兄弟たちからの覚えも随分と目出度くなったのですから。



「外の募集の張り紙見て来たんですけど。まだ募集してますか？」

「してるけど……保証人いるうちの店」

いきなりでした。一件目の蕎麦屋からすし屋へ凡て保証人の声です。

昼の忙しい時間を避けて片っ端から張り紙のあるお店を廻ってはみたものの履歴書を出すまでに至ったお店はありませんでした。

流石に悟も落ち込みました。ただ落ち込んでばかりいる暇はありませんでした。悟は棒二守屋という百貨店に行くワイシャツとネクタイを買いました。五千円ほどの予想外の出費です。

履歴書上では十八歳ということにしていたようです。ただどうしても幼く見えたのでしょう。履歴書を出すところまで行かぬようでは話にもならないことは明らかでした。

「取り敢えず、今日は旅館に帰って作戦を練り直しだなあ。ワイシャツとネクタイで少しは大人っぽく見えるだろう。」

悟のお財布の中の残金は三万一千二百二十円まで減っていました。

「お金も少なくなってきたなあ。予定外のものにお金を遣っちゃったからなあ……晩ごはんも食べなきゃだし……少し早いけどここでご飯を食べちゃおう。」

悟は棒二守屋の地下で焼きそばを食べると夜食用に菓子パンを二つ買いました。

これで残金は三万二百四十円になりました。

外はもう日が暮れていました。

雪が降っていました。

港に停泊している船でしょうか。

霧笛が一度鳴りました。

「煙草が吸いたいなあ……」

「面接も上手くいかない子供が煙草……」

「チョット不味いよなあ。外で吸うのは。」

そんなことを考えているとバスが走ってきました。

「函館山バス停行き……かあ……行ってみようか。」

悟は偶然目にしたバスに飛び乗りました。

世界三大夜景のひとつと云われる函館山の夜景です。

冬だというのに人がたくさん乗っていました。

皆家族連れでした。

悟はそんな乗客たちを見ていられなかったようです。

皆楽しそうにお喋りをしています。

やはり子供だったのでしょう。

カップルやアベックを見ても何も感じることは無かったようです。

ただ家族連れを見ると苦しくなったのでしよう。

「何してるだろう。今頃。心配してるだろうなあ……」と。

バスは函館元町を過ぎると函館山登山道を上りはじめました。

九十九折の山道を登ってゆきます。

「立待岬もバスで行けるのか……」バスの中吊り路線案内図を見ると周辺観光地へのバスルートの案内が表示されていました。

程なくするとバスは駐車場へと滑り込んでゆきました。悟は帰りのバス時刻を確認すると展望台へと歩みを進めます。

まだ雪は降っていません。冷え込んでいます。雪はサラサラとしたものでした。

「なまら寒いっけよ……」

眼前に広がる函館山からの夜景は美しいものでした。降る雪がチラチラと街灯りを受けて煌めきます。

悟は観光客たちから距離を取ると煙草を二本吸いました。

連絡船が港を後にするようです。

「甲板員のおじさんは乗っているのだろうか……」煙草を吸いながら考えました。

夜景を見ていると脳裏には昼間の面接シーンが何度も何度も浮かんでは消えを繰り返しました。

「仕事決まるんだろうか……」

この瞬間です。

十四歳の少年が生まれてはじめて「死」というものを間近に感じた瞬間となったようです。

バスの中で見た「立待岬」という言葉が妙に近く感じられました。

「あらあらあら〜寒かったしょ。早くなかさ入って……お風呂さ入ってしっかり温まんないば風邪ひくんだよ」

函館山を下りると旅館のすぐそばにバスターミナルがありました。

「けっこう降ってきましたね雪……」

「したからさあ〜お風呂さ入って温まってこないば〜」

まるで母親のように感じられました。

「いやあ〜、お兄ちゃん、晩ごはんは食べたのかい？なんか作るかい？」

「棒二守屋で食べたから大丈夫です。菓子パンも買ってきたし」

そう言う悟は部屋のカギを受けると部屋へと上がってゆきました。なにか妙に人と話をしたくない気分だったようです。多分、優しさに触れることが怖かったのかもかもしれません。

生まれてはじめて「死」というものを間近に感じた子供にとって。触れる人の優しは意思をくじくには十分足り得たのではないでしょうか。

部屋に入ってテレビをつけると君代が好きで見ていたドラマが流れていました。

「見ているんだろうか……風呂さいくか」

そう眩くと悟は部屋の明かりを常夜灯まで落としました。

Day 4 につづく

ご案内。「開く閉じる」に一貫性が見られぬところが多く見受けられますが最終更新の後にて調整する所存です。どうか、不出来をご笑読頂ければ幸いです。また使用する漢字について、例えば……言うと言うなどに揺れであり一貫性が無いところも散見されます。これも後ほど手を入れます。

Day 4

悟が五万六千円を握りしめて石狩の家を飛び出してから四日目の朝を迎えました。旅館の自室の窓を開け放つと外は吹雪でした。夜明け前から除雪車が函館駅前を行ったり来たりしていました。

斜めに銜えたハイライト
マッチ擦りて炎をつける
窓辺乗りだし雪うけて
まどろみ眼に雪しみる
風におおられ暁カモメ
体風上むけただよ
滑空波乗り自由自在
あんたはいいよ自由でさ
だってあんたは家いらさ
食べ物だって困りゃしない
勘定する金必要ない
かもめさんあんたは鳥でよかったよ

悟は煙草を吸いながら詩をひと編みしました。

「今日も元気だ煙草がうまい〜ってかぁ……」
イカレた十四歳でした。

灰皿は取り換えられることも無く五六本の吸い殻が溜まっていました。ホテルや旅館になど一人で逗留したことの無い子供です。灰皿が毎日替えられるものなどは考えもせませんでした。ここで一寸でも「不思議だなあ〜」と思えば……。

「ぶうれえ……二万円

ぶられるうらあわわなりいぶう……九千円

……二万九千六百三十円か……」

悟は銜え煙草のまま心許なくなってきたお金を数えました。

同時に一つの問題に直面していたようです。

「明日の朝にはチェックアウトしなきゃならないのだなあ」と。

今日中に仕事が決まり運よく寮に入ることができれば良いでしょう。でも昨日の面接を経験した限りにおいては何も楽観できるものではありませんでした。

悟の中では不安が次第に現実感を伴い大きく育っていました。

そのせいでしょう。

「今日は火曜日……母ちゃんは、はん場のご飯炊きは休みだなあ、今日は体育がある日か……そうだ、峰子はどうしてるだろう。また泣いてるかもしれないなあ」

少しホームシックと現実からの逃避が首を擡げてきていたようです。

煙草の火を押し潰すように灰皿で消しました。

ただ……まだ気付くには若すぎたのでしよう。

日常の苦悩も逃避して感じる苦悩も表裏。

結局は同じこと。違いは責任が伴うか伴わないか。十四歳の少年には飛び出した外の世界が要求する責任というものを知るには早すぎたのかもしれない。

「働くに保証人が必要」ということでさえ社会のルール程度にしか考えてはいなかったようですから。ただなんとなく「甘くなさそうだ」とは感じはじめていたようです。



「えーと……はい、皆さん静かにして。松本君と京本君が家を出てから四日が経ちますが、誰かのところに二人から連絡はありませんでしたか？ 班長のところにもない？ そう……では、もしも何か心当たりのある人や連絡があったときには先生に直ぐに教えてください。はい、では授業をはじめます。」

担任の高橋峰子は毎晩遅くまで奔走していたようです。

早い時間は京本の自宅へ行き状況の確認。ただ京本の家ではあまり歓迎されなかったようで玄関先で話しをして終わりだったようです。

松本の家に行くと腰が長くなったようで一度食事もして帰ったことがあったようです。

そのころ学校では一つの可能性について協議が重ねられていました。家を出て帰っていない生徒が二人いたのです。

もう一人は「京本正樹」。俗にいう不良であり問題児でした。

後に京本は禁止薬物の吸引で前後不覚となり救急搬送になっていたことが明らかとなるのです。ただこの時点の学校サイドとしては教育委員会への報告義務もありました。結果それぞれの案件ごとに報告書を出すことにしたようなのですが……。

「松本君と京本君が一緒にいるとは考えられませんか？ 二人の接点はどうでしょう。普段一緒に遊んだりとかは……」

「京本は家庭環境も複雑で、それが原因の一つでもあるのでしょう。素行に問題も多く、これまでも何度か出奔したり登校拒否をしていましたから、驚くには値せずなのですが……」

生活指導教諭の三島が教育委員会の担当者に向けて説明します。

「松本は、家庭環境的にはごく普通の家で、ただ、生活面での困窮は否めなかったようではあるのですが……クラスの委員や親しかった者たちに話を聞くと、時々煙草を吸いに京本の家に入りにしていたという話は出ていますが、所謂、ツレとして何か不良行為であり、問題行動を起こしたことはありません。」

「たばこを吸いに……ですか……ということは、満更一人ではないかもしれぬ……という可能性も排除できないということになりますね」

教育委員会の担当者は自説を展開してみせました。

三島は「可能性は否定しませんが、別案件として警察へは説明すべきかと」松本の場合は、書置きもありませんから計画的な単独の家出かと。まあこれは担任の高橋先生も同じ意見なのですが……」

「松本君の学校生活はどうでしたか？ 委員会などですが……」

「手元の資料では、一年生の時に美化委員と図書委員ですね。二年生になってからは図書委員と放送委員をしていたようです。共に担当教諭からの問題点の指摘はありませんね……」

【さて、ここで先に拾っておきましょう。京本が家に帰らなくなったのは日曜日の夜からだったようです。その後、月曜日の夜に札幌市二十四軒で暴走族と遊んでいるところを補導されたのですが、その時点で既に禁止薬物の吸引による酩酊状態が重かったことから直ぐに病院搬送、治療措置が取られたようです。京本が酩酊状態から覚め、警察からはじめての取り調べを受けたのは水曜日の朝。悟の家出から五日目の朝のことです。この時点で、学校や京本の自宅にはすぐに連絡が入ったようで、学校側は警察に松本悟と一緒にいないか、松本悟の行動について知っていることの有無を確認したようです。結果、京本からの証言により、松本悟の家出は単独によるものであり、現時点においては事件性はなく、素行の不良によるものと判断しきれずの見解に至ったようです。京本はこの後に家庭裁判所経由での保護観察処分となりました。】

■

「お姉さん、一つお聞きしたいんですけど……」
「はい、なんででしょう」

悟は朝食会場への行きしなに旅館の下働きのお姉さん呼び止めました。朝の忙しい時間帯。呼び止められたお姉さんは気もそぞろです。

「あと二泊したいのですが、延長は出来ますか？」

「それは、フロントの女将さんでなければ判らないので、私から伝えて後からお返事させてもらいますから。」そう云うとそそくさと走り去ってゆきました。

どうやら悟はあと二泊延泊する気です。

もしも延長が出来なければまた函館駅の旅館案内所で頼もうと思っていたようです。ただ悟にするのなら旅館案内所の従業員が同じ係だった場合不信感を持たれることへの不安が大きかったのでしょう。出来たらこのまま延長できることを願っていました。

さて下働きのお姉さん。早速女将さんに報告に向かいました。

「…… そうかい。延泊したいってかい。どうもおかしいね。あのぐらいの年の子が一人で旅に出るのと自体が面妖だろう？ 挙句が延泊……普通じゃないね。学校だろ？ まだ。まあ、いいだろう。受けてやりなよ。宿賃は前金で預かるんだよ。……朝食？ だったらお前が行って伝えてやりな。宿賃だけは後でフロントに預けるようになってね。」

虎屋の女将は悟の延泊の申し出を受けました。

ただどうにも釈然としないものを抱えていたようです。

あとで宿帳に書かれた電話番号に電話をかけてみようかと考を纏めたようです。

「はいはい、松本さん聞いてますよ。あと二泊の延泊ですね。うちは大丈夫ですけど、松本さん、学校は大丈夫なの？ お家のご両親は心配しないの？」

「夕べここに帰ってくる前に公衆電話から電話をしておきましたから大丈夫です。進学も決まっていますから学校は、風邪ということにしてずる休みです」

「あらあら〜 はいはい。じゃあおばさんも内緒にしておいてあげましょ」
女将はそういうとお金を預かりました。

無理が滲みます。それでもここは虎屋の女将も商売人。これ以上は深入りしません。それはそうでしょう。後から電話で確認すれば済むことです。それより一部屋でも埋めておくことが旅館のお商売。みすみす平日の宿泊客を逃すことはしたくはありません。

悟は延泊分の七千二百円をフロントで支払うと自室に戻りました。

すると……

下働きのお姉さんが悟の部屋に入っているではありませんか。どうやら灰皿を調べていたようです。

悟もここに至ってようやく「マズイ！」と思ったようです。

「掃除ですか？ 今日昼から出かれますから、掃除はいいですよ。それから延長の件は女将さんにお金を払っておきましたので、あと二泊しますね。」

マズイと考えたのはお互い様でした。

下働きのお姉さんは手元を滑らせ灰皿をひっくり返すとあたり一面灰だらけにしてみました。

思わず口を突いてでる「灰皿交換しますね〜」の言葉。

まあこれが通常のルーティンです。

染み付いた癖というものはつつい顔を覗かせます。

テーブル拭き用の布巾で畳の灰を拭きました。

さー大変です。

煙草の灰は畳の目に入り込むと取れたものではありません。

灰色に染まった畳の面が次第次第に広がります。

やっちゃった

兄ちゃん急に

ヌッと姿見せ

手元くるいて

大慌て

灰皿まかして

気は動転

拭いた布巾は真っ黒で

寢床の畳も真っ黒で

お前恨めし私の顔は真っ赤々

お猿のお尻のように真っ赤に染めた下働きのお姉さんの顔。

それは酷くなった霜焼けのように悟には見えませんでした。

休筆に至る
2026/02/13
現在

■ 青年編

小説 『細氷』17才のダイヤモンドダスト

ルノワール2.png



昭和〇〇年1月〇〇日

深夜二十一時三十分。

北緯四十三度に位置する小さな町のバス停。一人の若く美しい女が降り立つ。バスが若く美しい女を運んできたのだ。

バスは雪が堆積したバス停に若く美しい女を吐き出すと、二十一時半の深夜だというのにガラガラというけたたましいエンジン音を響かせ走りだす。降車客はこの若く美しい女ただ一人だった。もちろん乗車する客などはいない。

タイヤに巻かれたチェーン。所々に露出したアスファルトを噛む音が深夜の町にこだまする。

「チャイチャイチュリチュリ……チャイチュリ」と。時折バスのテールランプ、ブレーキ灯が後ろ髪を引かれたようにその赤い明かりをとます。パク……パクツと。

「こんな時間にこんな所で降りるのか」ブレーキ灯の点滅はそう云っているように思えた。

若く美しい女は取り残されたようにバス停に佇んでいる。

白いENBAのヤツケに千鳥格子のキュロットスカート。ロングブーツ。白と紺、赤の毛糸の帽子には雪の結晶柄が編みこまれていた。肩下十五センチまで伸びているであろうストレーロングの髪が三日月の明かりを浴びて艶めいている。雪明りと相まったそれは、深夜、寝入りばなの町に相応しく思えた。

若く美しい女はバス停の前で革手袋をはめた右手を鼻と口の前に持ってゆくと振ってみせる。手を振っているように見えた。一瞬隠れているのがバレたのか。そう思ったがバスが残した排気ガスに噎せ返ったであろうことが見て取れた。

寒冷地特有のバス停は掘立小屋を思わせるほどの粗末な造りだった。

髪の毛をアップにし割烹着を着け鍋の中からカレーを取り出すおばさんの看板が錆びつき劣化したのだろうか、時おり吹き上げる風にあおられガシャンバシャンと哭いていた。強いつむじが粉雪を巻き上げ深夜の町を奔放に行き交う。

俺は掘立小屋バス停の陰にいた。

所々破れたバス停の壁の穴から若く美しい女を見ていた。盗み見ているのではない。脅かしてやろうが、俺の目論見は経験したことの無いような胸の高鳴りを前に頓挫した。期待と不安が交錯した。今夜、これからのことに思いを向けるだけで水柱は灼熱をとめないその先端からは溶けた雫をあふれさせる。

除雪車でも通った後なのだろうか。道路わきには堆く（うずたかく）雪が寄せら、若く美しい女は除雪された後であろう雪に黒く滲んだ軽油と灯油の混合排気ガス特有の痕跡をみつけると、黒く煤けた雪を足で覆い隠すように掻きならしていた。

「カヤ……」

若く美しい女がバス停に降り立ってから三分とは経っていなかっただろう。俺はその女の名前を呼ぶ。

女は元林茅野十七歳、高校二年生のクラスメートだ。

「もう……、こうくん、寒いすんごいシバレルね」

茅野は驚くわけでもなく嬉しそうに俺の顔をみた。が、その目元は赤く腫れあがり、ふたえの大きくエキゾチックな輝きを湛えていたであろう瞳は充血をみせている。若く美しい女の泣き顔というものを見たことは無かった俺はそのあまりの美しさを目の当たりに言葉を失っていた。

【カヤ、おまえ帰るべきだったよ。バスに乗り遅れたから今日は帰るね……そう電話を入れれば済んだはずなんだ。それで今まで通りだったはずなんだ。今まで通りお前の親友、俺の彼女のメグの彼氏の今まで居られたはずなのに】

俺は茅野をほんの少しだけ恨んでいた。

真冬の寝入りばなの町は数分と待つまでもなく空気が凍る速度をはやめる。茅野のまつげが白く凍りはじめていた。

「カヤ、お前のまつげ折れるぞ……」俺はそう云いながら自分の右腕をまくり上げると、腕の内側を茅野の目元に近づけ「早く目をつけろ」と促した。茅野は目を閉じると腕を両手で捧げ持ち自分の目につけた。

「ありがとう……、溶けたとけた」そう云うと目を腕に押し当てたままゴシゴシと左右に振り大きく鼻をすすって星空を見上げる。

「こっちまで来ると星が綺麗だね」

「悪かったな、田舎で」

茅野は頬を伝う溶けた水滴を皮のスキー手袋の背で拭いとりながら笑ってみせた。

【ヤバイなあこれ、最悪のピンチだろ、若い女の泣き顔って初めてみたけど、なまらめんこい。あぶらっこ過ぎるだろ。あの泣き顔みせたあとにニコってするのは反則だべ】

俺の頭の中では奇跡とも呼べる印象をもって若く美しい女の泣き顔と笑顔はその存在を刻んだ瞬間となった。

木村浩介十七歳の俺は北緯四十三度の地方都市のはずれに住んでおり、この夜、急遽自宅に来ることが決まった元林茅野をバス停まで迎えに来たのだった。

二人の吐く息が凍る。

中空を漂い、ときに絡まり合いながら……

重さを感じさせるようにそれは凍りついた雪の上に墮ちる。

月明かりの下、キラキラと輝きながら。

北緯四十三度の地方都市のはずれにある町。

時刻は深夜二十一時三十九分だった。



自宅の電話が両親不在の静まり返った茶の間で鳴る。両親は母方の実家をたずねたようであり今晩は帰らないとの書き置きが残されていた。「にいちゃん。電話あ」階下から弟・雄二の声が告げる。

俺は反射的に壁掛け時計に一瞥をくれた。「五時過ぎ……誰ヨ……」万年布団に横たえた体を起こすと茶の間への降りすがら「誰ヨ」と雄二に聞く。

「知らねえけど、女の人」雄二は面倒くさそうに返事をしてみせた。

【メグか……】寝ぼけた頭の中、相手を特定しようとする考えだけが逡巡。俺は電話台からやにわに電話を手にすると「もしもし」と声にした。

「こうくん？ わたしカヤ。今喋っても大丈夫？」電話はクラスメートでメグの親友の茅野からのものだった。

「大丈夫だけど……、カヤ、おまえ今外か？」外を走る車の音やクラクションの音、パトカーの走り抜ける音が受話器越しに聞こえる。

「うん……バスターミナルの公衆電話からなの」

「急ぐのか？ 自宅に帰ってからかけてくれてもいいぞ。どうせ今日は両親もいないし。おまえ帰る途中じゃないのか？」

「ありがたい、じゃあ、三十分ぐらいあとにもう一度かけるね」

「お〜」そういうと俺は電話を置いた。

【なんだ……カヤから直接電話なんかかかったことは今まで一度もなかった。メグに電話をしておくか、いや、ひよっとしたら修一との間で何かあったんじゃないのか。話が彼氏がらみだから仲の良い俺にまづ電話をして来たとする、カヤからメグに話をするのを待つのが筋だろ】

茶の間でミカンを喰いながらテレビを見ていた雄二が「メグちゃん？」おあいそなのだろうそう訊ねる。「いや、双子の片割れ……カヤだった」そうは言ったものの雄二はカヤのことまでは知らない。

メグとカヤは双子のように似ていると学校でも評判だった。カヤは育ちの良いお嬢様タイプ。メグは平均的な家庭で大切に育てられたごく普通の真面目な女の子だ。二人は中学の時から親友であり、俺はメグと付き合っていた。付き合いも九カ月を数えるまでになっていた俺たちは、一周年には一泊で温泉にでも行くという計画を立てるほど仲も良かった。

そんな俺たちの付き合いは学校の先生たちの間でも公認の関係となっていたのだが、その理由がふざけたものであり、俺がメグと付き合うなら俺の矯正になるという思惑がはたらいていたと担任から聞かされたことがあった。そういう意味においては担任達の思惑は的を得ていたといえる。たしかに俺の私生活は矯正された。

折も折、メグの兄のお嫁さんが勤めるスーパーの食料品売り場でのアルバイト募集の話しを聞きつけたメグが俺にバイトを勧めた。

「こうくん、バイトするなら手伝って欲しいって、義姉が云っているけどどうする？」と。そんなことから俺は学校帰りに自宅とは遥かに反対方向のスーパーでアルバイトをするようになっていた。メグの家はバイト先からも近かった。俺は頻繁にメグの家に出入りをするようになった。建築関係の自営業を営

んでいたメグの両親からも「こうくん」と呼ばれ、随分可愛がられ時折泊まるようにすらなっていたほどだった。メグの両親は俺たちの交際を温かく見守ってくれていたようだ。

時計の針が夜の六時を指す少し前。茶の間の電話が鳴った。

「もしもし、木村ですけど」

「こうくん？ カヤ……、ごめんね何回も」

「なんもよ、したっけ、どしたのよ」

「あのね、修ちゃんとは別れたの。こうくん仲良かったでしょ。だから伝えておこうと思って……」茅野の言葉からは、俺が修から何か聞いていないか確かめたい思惑も感じられた。

【やっぱり。あれこれ電話をして詮索しなくて良かった】俺はそう思った。電話口の茅野は既に泣いていた。

茅野の話では、冬の羊の放牧風景を眺めに行きたいと云い出した茅野は、修はと市街地にある有名な展望台公園へと行ったらしい。どうやらそこで修が切り出したようだった。なんでも、好きな女が出来たから別れようと。

俺は気がかりを茅野に訊ねた「んで、おまえ、メグには話したのか？」と。

「まだ……。明日にでも云うかもしれないけど、整理つかないっしょまだ」

「だべなあ……。で俺になにか出来ることあるのか……」

「はなし聞いてほしいだけ。分かってくれるの多分こうくとメグしかいないし」

「…… チョット寒くて遠いけど来るか？」

「いいの？ 行っても」カヤの返事に戸惑う様子は見られなかった。むしろそう云われることを待っていたようにすら感じられた。

【そりゃあ今日の今のことだ、独りでは居たくないよな……】

「いいよ。両親もいないし俺もまだ飯食ってないから、カヤが来たら何か作ってやるよ」

俺はそこまでを告げると、バスに乗る直前に電話を貰えるように伝えると受話器を置いた。受話器を置くと急にブルブルとした震えが俺の体を貫く。まるで電気が走ったような痺れ、震えだった。【はあ？ バッカじゃねえの何妄想してんのよ、あり得ねえし】一瞬よぎった妄想が背徳の二文字を伴っていたことには気付けた。

弟の雄二は今晚も友人の中杉の家に遊びに行くことと云っていたことを思い出す。頭の中で考えることと口に出す言葉、体のバランスがまったくおかしなことになってきていることには気がつかない。

俺は茶の間の物入れから掃除機を取り出すと二階に持って上がり部屋の窓を開け放し掃除機をかけた。煙草くさい部屋はとも十七歳の部屋ではなかった。ブラバスのオードトワレを部屋中にふる。

壁に設えられた本棚には学校の教科書と参考書、それだけが俺の身分が高校生であることを担保していた。あとは正常な高校生が読むことは無いであろう週刊宝石と書かれた厚さ3センチほどの小説集が本棚を埋めている。

寧ろ教科書や参考書より週刊宝石の方が多いうことに大人たちが気付いたら何某かの病気を疑ったかもしれない。

「2ミリ5ミリだな。まあ掃除機かけて、客布団一組と毛布だけ用意しとくか。流石に灰皿ぐらい洗っておくか。なんか、ジュースあったべか？」台所に据え付けられた冷蔵庫の脇には炭酸飲料数種類が箱に入れられ積まれていた。

二階の自室にコーラとグラスを持ち込み、コーラはベランダの発泡スチロールの箱に放り込む。

時計を見ると時刻は二十時を表示していた。

階下から雄二の声が「にいちゃあん、行ってくるわ」と響く。

「悪いことすんなよ。」一応冗らしい一言を告げるのだが、この期に及んでは今一つ説得力に欠けていると思えた。心の内を読んだかのように雄二は「にいちゃんもね」と返す。「るせえ、るせえ、早くいけ」「じゃあねえ」

さて、これで落ち着けるのか。今のうちに風呂でも入っておくか。なぜ風呂に入ろうとする自分が居るのかに頭は向けない。既に思考がサル化していた。風呂場へと歩みを進めた途端、茶の間の電話が鳴る。電話は母親からのものだった。

あたり前の会話しかない。「ご飯は食べたのか」「雄二は何してる」「火の始末だけは気をつけろ」毎度刺激を受けることの無い色気も艶もない言葉だけが繰り返される。そのたびに俺は【うちのお袋はなんのために小説を読んでいるのか、文学的センスの欠片もない】そう思うことが常となっていた。

「なあんもねえよ、はい、じゃあゆっくりしてチョウダイ」俺はそう告げると電話を置いた。

電話を置くとすぐに電話が鳴る。

【うるせえなあ】

「はあい！ なによ！」言葉がぞんざいになる。

「えっコウケン？ メグだけど、今、まづかった？」

電話はメグからのものだった。俺は慌てて母親から電話があったことを伝え、またかかってきたものと勘違いをしたことを告げた。茶の間の時計は既に二十時二十分を指していた。メグとの電話は一時間に及ぶことが珍しくはなかった。「なんの用よ」と聞くことはできない。いや、そもそもこのタイミングで電話が来るということに俺は不安をおぼえた。

【俺は云うべきなのか。でも、カヤがメグに伝えていなかったとするとどうなる。カヤの立場がおかしなことにならないか。いや、カヤがメグに伝えていたとして、俺がメグにそのことを今云わなかったとしたら……、いや違う。カヤはメグに今夜のことは絶対に云っていない。(根拠に乏しい面妖な自信と思考の方向性に不調和を覗かせていることには気づかない) 従ってメグはカヤが来ることは知らない。てことは俺はどうなる？】俺はメグとの電話をしながら、とうとう問題の本質に辿り着いた。それはこの時点で抜き差ししないことに進展を見ることが約束された瞬間となったのだが、サル化した俺はこの期に及んですら楽観的に構えていた。

「メグ、風呂が沸いたから風呂に入ってくるかなあ」嘘をつく。メグはなんの疑いも持たず「うん、また明日ねエ」と明るく告げると電話を切った。

時計の針は二十時四十分を指していた。

【これは……ひょっとして俺はピンチじゃないのか。まてまて、おかしいって。なんで俺がピンチになるんだよ。カヤが修と別れてその別れ話に付き合っつて、メグの親友のカヤの話しを聞くだけの俺がなんでピンチなんだ】サル化した俺はこの期に及んでさえ本質と向き合うことを避け、「不条理感」を弄んでいるに過ぎないことには目をつむた。

電話の呼び出し音が響く。時計を見ると二十時五十三分。

「こうくん、かやだけど、五十五分のバスに乗るね、じゃあバスもう出るから切るね、したっけあとで」茅野は用件だけを云い残すと一方的に電話を切った。俺は時計を見ながら到着時間を割り出す。

【カヤ……、云えねえよなあやっぱり来るなどは。そりゃあ云えねえだろ。なんだか嬉しそうにしてたしなあ。聞いてほしいよなあやっぱり。だけど、一番の問題は二人でメグに何も言っていないことだろう。カヤ、おまえどうするつもりなんだよ今夜のこと。メグに秘密にするつもりなのかよ。おいおい待てマテ、俺は客布団を用意したよな、いやこれはダメだ。取り敢えず客布団だけ雄二の部屋に移動しよう。チョットこれはさすがにおかしい】俺は平常心をとうの昔に失っていた。舞い上がりテンパっていた。既に背徳感俺の思考を鈍らせ俺の背中を押している。

俺は二階に上がると客布団を雄二の部屋に運んだままでは良かったものの、自分の布団のシートと布団カバーは真新しいものへと変え、部屋の隅にたたんで置いたのだった。空気の入れ替えをすべく開け放つておいた窓からは夜の凍てついた空気が流れ込んでいた。

【俺……、やっぱ誘ったのは俺なんだろうなあ。ただ、二人とも簡単に考え過ぎていたよな。聞いてほしい聞いてやりたい、たったそれだけのこと。あいつとの間に何もなかったとしても、たぶん、二人ともメグには云えないだろう。きっとカヤも今夜のことは二人だけの話しにしておいて欲しいと言っだろう】結論を先送りにし、脳が勝手に正常な判断を放棄したに過ぎなく、快楽という都合の良い可能性が残された方を選択をしたに過ぎなかったことには目を瞑ったままだ。

【でも、話を聞いてやってバスに乗せて返せばいいんだろう。簡単なことだ。これで最悪のピンチは回避できるだろう。そうだ最終のバスを調べておこう。最終バスは二十二時三十五分って、なんだよ一時間しか話せないのか。まあ仕方が無いか。一応、最初にカヤには伝えておこう】

もしも茅野にバスの時間を聞かれた時には答えられるように用意しておくのが最善であり、最終のバス時刻を事前に伝えておくことがルールのように思えた。

俺は、入念に茅野を迎え入れる準備を整えながら、起きていないことについて様々な角度から一人反省会を催していたのである。

時計に目をやると時刻は二十一時二十分を指していた。

北緯四十三度の地方都市。それも街はずれの小さな町の夜は早い。特に冬場の夜の訪れは一層と早い。二十一時三十分は既に深夜時間帯であり町を歩く者もまばらであり行き交う車もほとんど無いのが当たり前の景色だ。

元林茅野をバス停まで迎えに来た俺は茅野の前に立つと自らの右腕を捲り上げ、白く凍りはじめた茅野のまつげの前まで差し出した……「ありがとう、溶けたとけた」

夜の空を見上げ弦月をともなつた星たちを二人で眺める。不思議だった。メグとでさえこんな景色は見たことはない。二人の距離はこれまでで一番近い。二人の吐く息は月明かりを受けキラキラと輝きながら宙を舞う。絡み合い惹かれ合い憑いては離れを繰り返して次第に地面に堕ちてい行く。

「ダイヤモンドダストって云うんだよね」茅野が言葉にする。

「よく知ってるなあ、日本語だと細氷って云うんだ」俺は茅野の言葉をあたたためるように「さいひょう」と言葉にした。

「さいひょう」はじめて聞いたよ」そう云うと茅野は俺の顔をニコニコしながら見ていた。湿度を抱えた空気が冷やされ霞みはじめる。凍ったそれは月明かりに映しだされキラキラと光り輝いていた。

「寒いから家いくべし。腹減ったろう。俺もまだご飯食べてないからご飯食べよう。チャーハンとスープだけ作ったから」

「こうくん自分で作ったの？ 凄いな。メグから聞いていたけど、こうくん料理するんだよ……」
「簡単なものだけな……」

肩を並べて歩いていると茅野がブーツを滑らせ転びそうになる。俺は反射的に腕を取り茅野の体を支えた。俺は茅野の手を握った。強くそっと。茅野の手は戸惑うように俺の手に委ねられていた。自ら握り返すことは無い。

茅野のブーツがまた滑る。今度は茅野が俺の手を強く握った。

鍵を開け玄関に入ると茶の間へと続く扉を開ける。

「あったかい」

「寒かったべ、少し暖かさに慣れるまでこれ使っておけ」俺は用意しておいたタオルケットを茅野のひざ元に投げかけた。

「チョットスープ温めて来るわ」そういうと俺は茶の間の時計を見る。

既に時刻は二十一時五十分を指していた。

「カヤ……もしもお前が嫌でなければ泊っていくか。最終のバスまであと四十分しかないし。お前の方が問題なければ俺は泊っても大丈夫だぞ」

俺はスープに火を入れながら言葉にした。

【おい、誰が喋ってんだよ！ 俺かよ、俺が喋ってんのかよ……】

「泊ってもいいかなあ。家には友達の家泊まりに行ってくるって言って出てきたし。朝早くのバスで帰って着替えして学校に行くつもりだったし」俺のチャーハンを温める手が震える。

「凄いねえ〜本当になれてるね」茅野の声が俺の真後ろです。後ろから覗き込んだ茅野の甘い匂いが俺の肩口から漂う。

「食うぞ（くちまうぞ）」俺はそう云うと、茶の間のソファからタオルケットを取り茅野に渡した。茅野はタオルケットで足を巻くように包み込むとスープを両手で包み込みフーフーと息を吹きかけ冷ましながら飲んでいた。

温まってきたせいなのだろう。外ではあんなに赤くなっていた目元の赤みが取れ、茅野の顔は真っ白で柔らかく艶めいて見えた。

【こんなにマジマジとカヤの顔を見たことは無かったなあ】俺は茅野の左目の端、下のところに大きめな黒子があるのをみとめた。

【カヤ……、お前のその黒子は泣き黒子って云うんだぞ。大丈夫かお前】

俺はチャーハンを頬張りながら他愛のない話を茅野に振る。茅野の笑顔は美しかった。育ちが良いせいなのだろう食事の仕方も品が良かった。

「なんか不思議な感じ」茅野がスープを手を持ちながら言葉にする。俺は返す言葉に窮していた。何を言葉として発したとしても下心を見透かされそうに思えた。

「カヤ、多かっただら残せよ。遠慮しないでいいから残せ残せ」箸の進みが遅い茅野に残すことを促す。

「うん、体も温まったよ。チャーハンはごめんだけど多いから残すね」

「気にするな。まあ、不思議っちゃあ不思議だよな。俺、カヤの顔をこんなに間近で見た記憶もなかったし。今、初めてゆっくり見てる」

【何言ってるんだ俺。ゆっくり見ないことが普通だよ】

「だよねえ、カヤもおんなじ。同じクラスに居てもそんなに近くで見るとも無いし、まして男子じゃそんなに見れないし。修だって最初の頃はカヤの顔ちゃんと見てくれなかったもん。でも女の子って顔を見ていてほしいのよ。色んなことに気付いてほしいから。でもね、修はダメだったなあ」

そう云う茅野の目から一筋の涙がこぼれ落ちた。

【メグ……ごめん俺はヤバイかもしれない。俺は今夜きつとカヤを抱く】

「上に行こうか」俺がそう告げるとカヤはそれに従った。

部屋のストーブに火を入れると窓を少しだけ開け俺は煙草に火をつけた。

「こうくん……、私にも一本ちょうだい」正直驚いた。カヤの口から煙草を求める言葉が出るとは思わなかった。俺は無言のまま煙草とライターを茅野に手渡した。

驚いたことに茅野は煙草を吸いながら、噓返すことも無く手に持つ煙草をくゆらせる姿も胴に入ったものだった。

「煙草、吸いなれてるなあ」

「ウフツ。時々ね。時々……三年目ぐらいかな」

俺は笑うことしか出来ずにいた。「メグは知っているのか」危なく口を衝きそうになる言葉を飲み込む。換気のために開けた窓から雪が入り込み始めていた。

「雪降ってきたな……」

「ほんとだ」

机の前の椅子に座った俺を横切るように机に手を置き、身を乗り出した茅野は窓の外の雪を見た。茅野の指には煙草は無かった。俺の膝が茅野の膝上あたりに触れている。【無理だべ……カヤ】俺は回転式の灰皿で煙草の火を潰すように消すと後ろから茅野を抱きしめた。茅野は抵抗をみせなかった。自ら体を開き俺の首にしがみ付くと胸に顔をうずめる。俺は椅子に座ると茅野を俺の足の上、横向きに座らせ自分の鼻を使いながら茅野のこめかみ辺りをツンツンする。茅野の顔が上がり俺を見る。

俺たちは鼻と鼻で挨拶を交わすと唇を重ねた。

頬に茅野の涙が伝わり流れ落ちていくのが感じられた。首に回した茅野の腕に力が入った。茅野を抱きしめたその手に力を籠める。茅野は「はっ」と一度口を外すと自分のおでこを俺のおでこに寄せた。二人の唇の間にはキラキラと輝く絹糸が雫をともない繋がっていた。どちらからともなく再び唇を重ねる。お互いの舌を求めあいそれぞれの口腔を彷徨う。茅野の舌はときに宙を舞った。まだ馴れていないのだろう。それでも茅野は懸命だった。絡み合い惹かれ合い憑いては離れを繰り返す。

「男の人って……、好きでもない子と出来るの？」

俺の部屋の時計は二十二時三十分を過ぎたところだった。

最終のバスは時おりブレーキ灯を灯しながら走り出した頃だろう。むき出しになったアスファルトを傷つけ削るように「チャイチャイチュリチュリ……チャイチュリ」と深夜の町にコダマを響かせ。



朝を迎えるころ。茅野の躰は俺に馴染んでいた。乳首を優しく噛むだけで首をのけぞらせデコルテを露に嘆いてみせた。花卉に指を這わせ秘芯の包みに触れるだけでとめない潤いが真新しいシーツを濡らした。もう駄目……と何度啼いただろう。そのたびに茅野は俺の首や背中に回した手に力を込めた。

膝頭をあまく噛み、脹脛を優しく噛みながら足の指を含み舌を這わせた。搾りたてのレモンのような刺激を伴う若い潤いも朝には無味無臭に近くなっていた。

朝七時前。茅野はバス乗って帰って行った。俺も茅野もどちらからもメグのことは口には出さなかった。それが当然であるかのように、どちらからも名前も出さなかった。

その日から三日後の夕方。俺はメグに全てを打ち明け謝った。

次の日俺は学校で茅野に告げた。メグに全てを打ち明けたことを。

「エエーっバツカじゃなあ、なんで云うかなあ」

【あゝ、そうかあ。俺はバカなんだ。多分、救いようが無いほどの馬鹿なのだろう】俺はそう気付いた。あまりにも遅かった。

ただ俺の中のなにかは、この日死んだ。たしかに絶望と共に死んだ。

幼な過ぎたのか。バカだったのか。愚かだったのか。無知だったのか。死んだものは生き返らない。どうでも良かった。

それから数日後、俺は学校を退学した。

細氷が春の雨に変わる前に。

俺の時計はあれ以来、時間を刻むことをやめたままであることだけは確かなのだ。

了

ルノワール2.png



エセー・随想好日『私の中のなにかが死んだ日』

ルノワール2.png



文藝の短編賞応募にむけ書き下ろしたつもりだった。

読めば読むほど既視感をともない当時のことが思い出される。

一つ一つの言葉。一つ一つの仕草……

煙草を吸う

指を絡めながら流した涙

「男の人って……あなたの方がそう眩いた日

後のことなど考えもせずに

二人にとって共通の傷つく人の顔さえ

その瞬間を昂らせるものだったのか

幼過ぎたのか。無知だったのか。無責任だったのか

傍にいて欲しいと思うことは悪なのか

傍にいてやりたいと思うことは悪なのか

ただきつと人ではなかったのだろうか

ただあの日を境に俺たちの中の何かは死んだ

あまりにも早すぎる死を自分たちの中に見た

息を吹き返すことだけは無かった

17歳という早すぎる死

思えば四十数年それをずっと抱えている。

いつかは書こう。いつかは書かなければ。

焼けた栗を素手で握るように……

手のひらを焼き、握った手の中爆(は)ぜる。

出口を求めるように

助けてくれと叫ぶように

それは容赦なく握った手の中で爆(は)ぜた

幾夜も幾年月も

影を追いながら

書き上げてからも時に魘(うな)され、原稿に向かうと頭を掻きむしり、そして奇声を発する始末だ。まあ、別に人様の前でおかしなことになるわけではないのであるからして自己完結できる話ではある。

むかし読んだ吉行淳之介のエッセーのなか。

オモシロい表現が使われていたことを思い出す。

「キヤツと叫んでろくろ首になる」というもののだが、確か、野坂か阿川か安岡か北のいずれかが言い出したようだが、吉行はこの言葉をいたく気に入っていた。想い出したが、マアジャンの席で危険パイを切る時に北杜夫先生が使った言葉だったかもしれない。たしか麻雀の時だ。

男は生きていると、ときにキヤツと叫んでろくろ首になるようだ。

深く同意するのである。ろくろ首の首で「め」の字を書いて鉈でぶった切られるほどのものであるのだが。

結局ふたつのことを除いて書けた。

これは墓場までだ。かかずとも良いことだ。

あまりにも傷つきあまりにも傷つけた。

あの日のこと。

わたしの中で完全に何か死んだ日。

決定的な何か死んだ日だった。

もう一人決定的に何か死んだ日になった人物がいるだろう。

そして一番深い愛をみせ何も悪くはなかったはずの人間の何かも死んだ日となつたろう。

レクイエムを捧げよう。それぞれが抱えそれぞれが失ったもの達に。

そして誰かがそのレクイエムを書かなければならなかっただけのことなのだ。関わった誰かが死んだものを抱えた誰かが。

いまだ骸に原罪と共に閉じこもったままの誰かが。

そしてそのまま眠るだけである。

了

当然のようにわたしは結局この作品の応募も見送った。

鎮魂歌で賞に応募。この不埒者。そう思っただけのこと。でも、インターネット小説の分野では送っ

たのであるよ(笑) なんのこっちゃWWW

そのうちe-pubooに綴じるだろう。

世一

劇詩する『詩編竿屋のこえ』

「奏でてよ

鈴々(りんりん)チリリン

風鈴さん

メダカときんぎよも聞いているワ」

顔よせて

息を吹きかけ

ふうふうと

手を後ろくみ 頬(ほほ)朱(あか)く染め

竿やこえ

道の向こうの

裏通り

背中きえいる 偲(おも)い出の夏

母音律 あいうえお順

劇詩(げきし、英語 dramatic poetry)とは、劇形式の詩のことであり、叙事詩・抒情詩と並ぶ詩の三大部門の一つ[1][2]。「韻文によって書かれた劇」という意味で、劇に重きを置く場合は、詩劇(しげき、英語 poetic drama, verse drama)と表現する[3]。

その昔は竿屋さんも「風鈴」を売ってあるいていた。

最初の一節だけ読めば、「竿屋のこえ」というタイトルに違和感が滲んでも不思議はない。ただこの詩の場合は、風鈴が主役ではない。

読者の予想を裏切るのが一流の「いかさま師(芸術家)」の手業、手練手管。

懐古主義的……ノスタルジーを触媒に少しのショッパサが感じられれば頂きますなのだ。……二度ほど、大きくグラツとするところは表現できたと感じている。

この世界、一流しか登りつめられないし残れないからね。甘くない。

時刻(とき)の物語り 詩編 令和5年8月12日 10時6分の「下
書き」から

時の狭間に溺詩する。「詩刻(しこく)」

時間は溶けだすのさ

そして流れて帰依てゆく

いつも貴方はそう云った

どうして消えるではなくて帰依なの

どこに流れて帰依するの

帰依する場所がここだったなら**

せめて溶けだす時間をずらしたら

そうわたしは思いついちゃった

部屋の時計を遅らせよう**

貴方の来る日に5分ずつ

だんだんと少しずつ

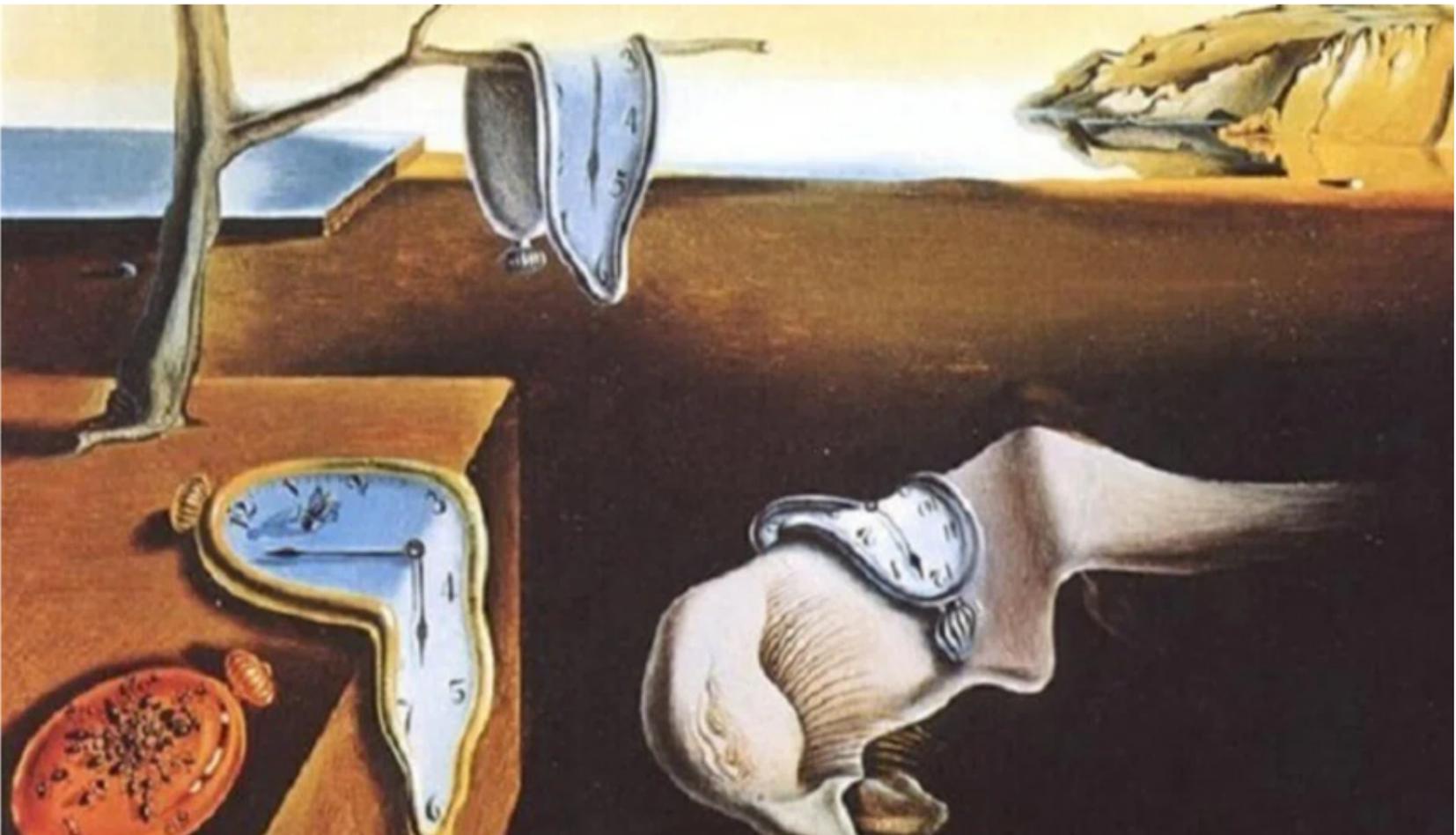
気付かぬ程度に遅らせよう

もうそんな時間かよ

まだこんな時間よ……

……今日もあなたは帰依てゆく

スクリーンショット 2024-08-01 08:23:11.png



■そして

詩する『食葬(CANNIBALISM)』

詩編『食葬(CANNIBALISM)』

我が身葬ふれよ

いまこそ時合い

どうせ喰わなきゃ書けねえんだ

内観内省

おもて看板似非(エセ)物語り

喰わにゃ書けない真がある

葬ふらにゃ書けない砦がある

喰ったところに蛆がわく

もっとおくれと蛆がわく

おいしいよ

おいしいよ

甘くて辛(から)くておいしいよ

苦くて辛(つら)くておいしいよ

喰えよ葬ふれよそして書け

両手両足残ってる

さてさて次はどこ喰うよ

雨戸もヌメ

カーテンヌメ

灯りも墮としてどこ喰うよ

闇の中の祝祭(Carnival)

Cannibalism Carnival

喰えや書けや食葬しろや

どうせ書かなきゃ逝けねえだろう

喰って恍惚

書いて自慰

■そして

葬ふれりや蛆は甘露に咽ぶ

速水御舟炎舞 . p n g



時刻(とき)の物語り 詩編 令和4年12月1日 12時30分

詩編 『もう一つの夢殿』

人は泣きて生まれ落ちる

一生のうちに何度泣くかを告げられぬまま
知らされぬままに

潮満ちて人は笑うことをおぼえる

一生のうちに何度笑うかを告げられぬまま
知らされぬままに。

いつしか泣くことは、哭くことを選び

笑うことは嗤うことを選ぶ

それぞれの夢殿を前に人

はたと気つく

何度泣けただろう

何度笑えたのか

哭いた数は九十九に及び

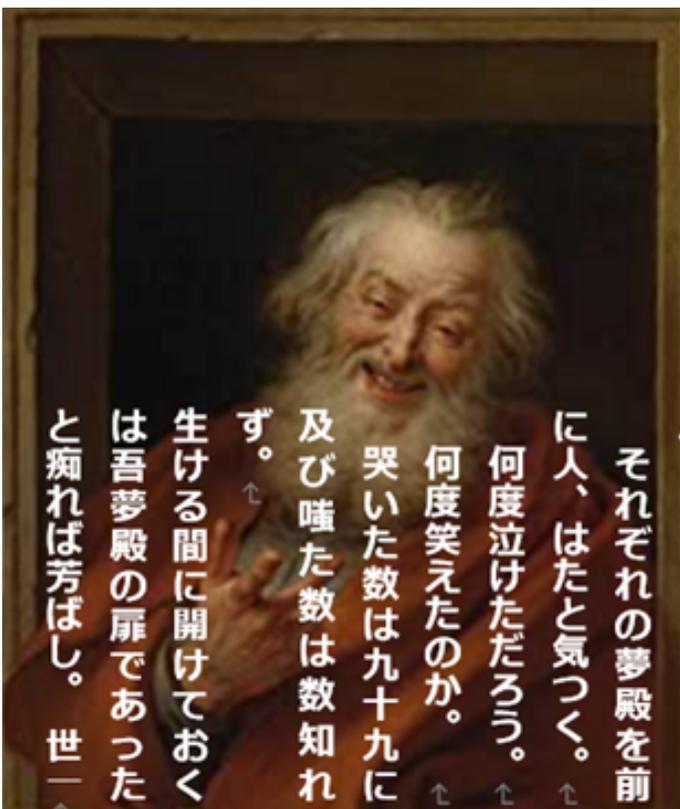
嗤た数は数知れず

生ける間に開けておくは

吾夢殿の扉であった

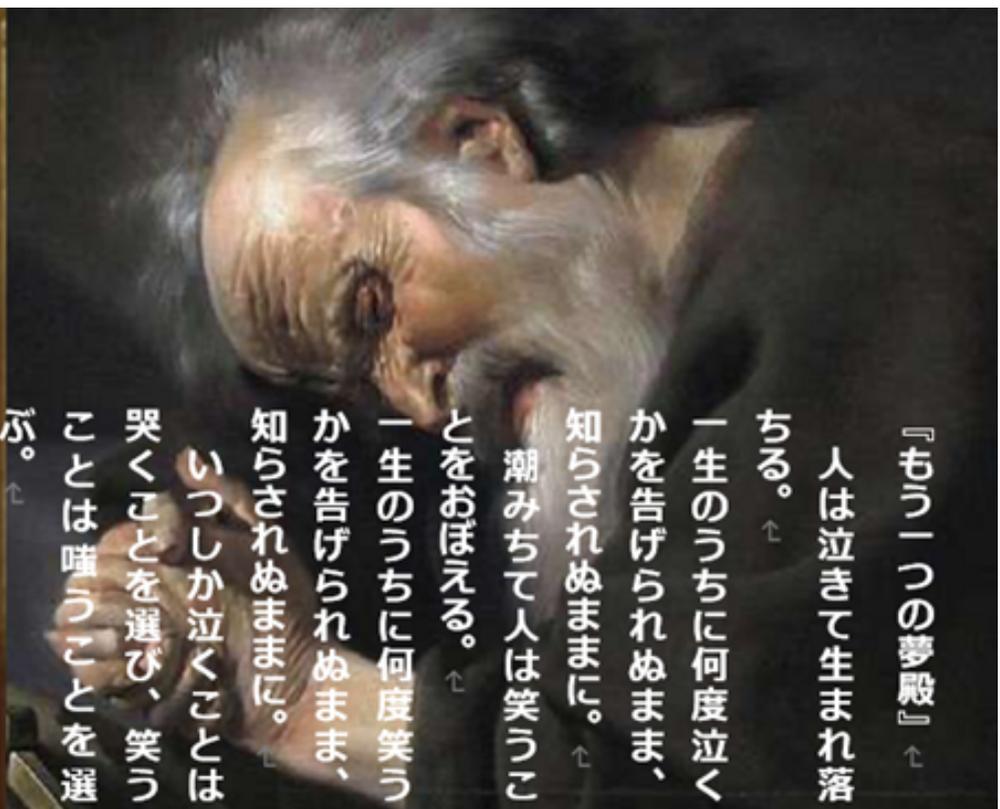
と痴れば芳し

世一



それぞれの夢殿を前
に人、はたと氣つく。
何度泣けただろう。
何度笑えたのか。
哭いた数は九十九に
及び唾た数は数知れ
ず。
生ける間に開けておく
は吾夢殿の扉であつた
と痴れば芳ばし。世

デモクリトス BC 370年ごろ没



『もう一つの夢殿』
人は泣きて生まれ落
ちる。
一生のうちに何度泣く
かを告げられぬまま、
知らされぬままに。
潮みちて人は笑うこ
とをおぼえる。
一生のうちに何度笑う
かを告げられぬまま、
知らされぬままに。
いつしか泣くことは
哭くことを選び、笑う
ことは唾うことを選
ぶ。

ヘラクレイトス BC 480年頃没

時刻(とき)の物語り 詩編 令和5年2月8日 10時23分

世一、糞詩(ふんし)する『詩びと』

『詩びと』

ひとは詩のなかひとを呪う
ひとは詩のなかひとを愛す
ひとは詩のなかひとをコロス
ひとは詩のなかひとを慈しむ
根源的呪詛の言葉と知らず

詩のなか呪い愛しコロシ慈しむ

ひとは詩のなか一人哭く
ひとは詩のなか一人啜う
ひとは詩のなか一人歛ぶ
ひとは詩のなか一人憤る
良い人になりたい思いなど

何処かに置き去りのままに

ひとは詩のなか優しくなる
ひとは詩のなか厳しくなる
ひとは詩のなか利口になる
ひとは詩のなか愚かになる
それが人間の本质と知らず

言葉巧みに我が魂を騙しているとも知らぬまま

■そして

詩びとが吐いても吐かずとも陽は昇り陽は墮ちる
詩びとが呪愛は時空を選ばず内を駆ける

ひとは詩のなか黄昏と書く

夕削とは知らず。夕闇が削がれる頃合いと知らずに

生きる者の言葉は生き血

詩びとは闇夜に二度啼く

詩びとの狩りのはじまりだ

詩びと

ひとは詩のなかひとを呪う

ひとは詩のなかひとを愛す

ひとは詩のなかひとをコロス

ひとは詩のなかひとを慈しむ

根源的呪詛の言葉と知らず

詩のなか呪い愛しコロシ慈しむ

ひとは詩のなか一人哭く

ひとは詩のなか一人嘔う

ひとは詩のなか一人歎ぶ

ひとは詩のなか一人憤る

良い人になりたし思いな

何処かに置き去りのままに

ひとは詩のなか優しくなる

ひとは詩のなか厳しくなる

ひとは詩のなか利口になる

ひとは詩のなか愚かになる

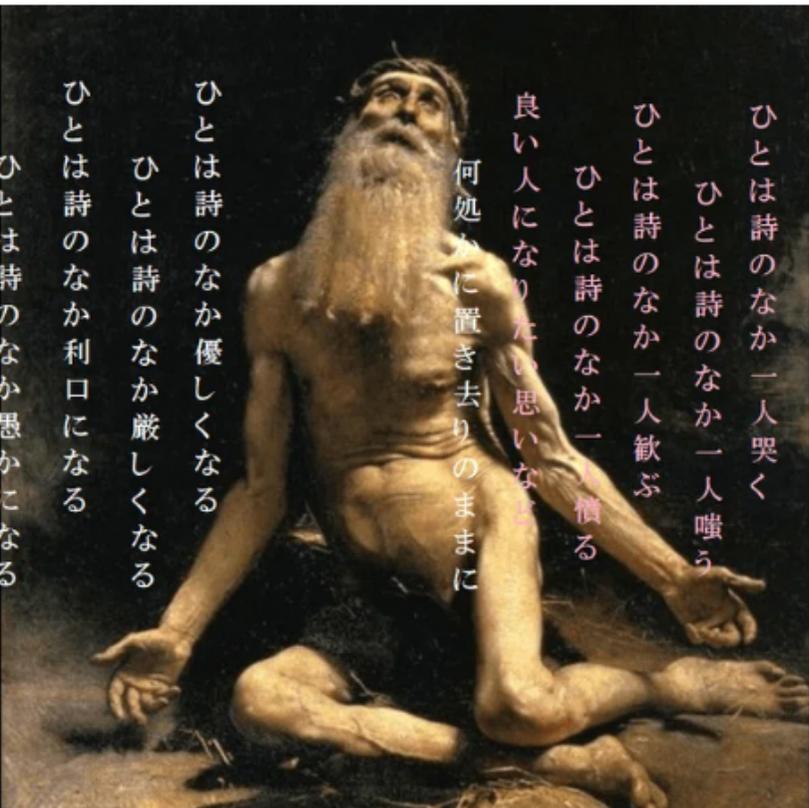
人間の本質と知らず

言葉巧みに我が魂を騙しているとも知らぬまま

詩びとが吐いても吐かずとも

陽は昇り陽は墮ちる

詩びとガ呪愛は時空を選ばず内を駆ける



『義人の苦難』ヨブ記から レオンボナ19世紀 印象派

ショートショート「小説・尋常なる異常という日常」

※一部、血にかかわる描写が続きます。弱い方はお帰り下さいますよう。また、心の病、こころを弱めておられる方にはお勧めできません。速やかに出口にお進みください。また、元気な時でも油断できません。むしろ書き手としても小さくない葛藤を抱きながらの上梓です。では、はじまりはじまり〜



う・に・い・く・ら、う・に・い・く・ら……イチマンエン
う・に・い・く・ら、う・に・い・く・ら……ニマンエン

うべー、今日の昼の売り上げさあ、48000円もあったぞ。そのうち、デリの売り上げだけで32000円はデカいなあ。

そんなにあったの〜デリで。やっぱ、雨降るとデリが伸びるよなあ〜

賄いでも食べ終わったのだろう。つま楊枝を啜え、煙草に火をつけたうべは紫煙を吸い込むと天を見上げ、大きく吐き出した煙を追う仕草をみせる。

続けざまに大仰にゲップをしてみせた口元の髭にはご飯粒がくっつき、なんとも間抜けな塩梅をみせていた。云うまでもなく、こんな姿は客には見せられるものではなく、街中で見かけたとしたら、女子供にいたっては、遠巻きにそして逃げるように、振り返り振り返り歩いてゆくと思えた。

けして食べ物づくりを生業とした日本料理職人歴二十数年、某テレビ局の「料理の○人」から声が掛かった料理人のそれとは思えないのは当然のこと、この姿を見止めた客にそれを伝えたとこで信じる者は皆無だろう。

うべー、どうでもいいけどさ、ボチボチ、サロン洗濯しろよ。余りにも汚いべ。

うん〜汚い〜やっぱ汚い〜

それじゃあ、客前に出られんべよ。替えのサロンは持っていないのかよ〜じゃあ、取り敢えず、俺の使っておけよ。俺、休憩のときにサッと洗ってくるから。

有線放送から流れるMJQ、ミルトのヴィブラフォンの調べが外の雨音にシンクロを魅せる**と、店の電話がその着信メロディーでぶち壊す。

「はいっ、デリー〜 これ50000円ゲット〜」

「あいよお〜」

ありがとうございます、〇〇〇〇屋です。

最初にご住所から頂けますか。はい。ええ、大阪市西区〇〇崎、ええ、はい。ではご注文をどうぞ*
— 畏まりました。1590円になります。お味噌汁もついてますよ。それでは後ほど—

「うにいく一丁、イクラダブルで〜」

「うにいく一丁イクラダブル〜あいなあ〜」

客がいなくても、元気だけは良かった。

外は冷たい冬の雨が堕ちていた。時間は2時をまわっていた。ポチポチ、デリバリーの電話も止まる
ころだ。ランチで埋まっていた客席も凡て空席。

パソコンに向かい、顧客情報の登録を打ち込む。顧客ナンバー、日付、時間、性別、名前、住所、電話番号、注文内容、利用金額、注文回数、特記事項。

配達先の地図を確認する——。

うべっ、ここアレだな、料理組合の裏にあるマンションだな……

料理組合って、あそこのおれかい〜

弟のまうべの手はデリバリーの料理を手早く作る。手がとまることは無い。日本料理職人歴二十数年
の手業が光る。兎に角、丁寧で早い。段取りの勝利なのだろう。なのにサロンは汚れていた。着るものも
頓着をみせない。

「会議、バックカ野郎、会議で喋れるぐらいだったら料理人なんかやってるかい〜」という使いに
くさも板前修業時代にはあったようだ。

沸騰寸前まで温めた味噌汁を、ポットに流し込むとデリの準備は完了だ。

じゃあ行ってくるわ

僕は自転車で出前に向かう。傘を手に、初冬の冷たい雨の中、今日、十数度目の出前に向かった。

【今日の売り上げは10万超えるな〜】夜の予約から売り上げを逆算し、仕入れの計画を立てていた。

配達先は簡単に見つけることが出来た。マンション前には持ち主不肖のサドルの取り外された自転車
が所在なさげに留め置かれ、場所柄に見られる荒んだ気配が弥が上にも治安への懸念を感じさせた。

【盗難防止かもしれないなあ。うちの自転車も帰るときはこうしておこうか】

ページの安っぽいタイルが貼り付けられた壁はところどころ剥げ落ち、マンション名のプレートの文
字も塗装が剥げ落ちていた。

マンションの玄関内に入ると、正面右手には郵便受けが並んでいた。整然とという言葉からは程遠く、ポ
ストの投函口の凡てから死んだ犬の舌のようにチラシがだらりとだらしなく顔を覗かせていた。

「ちらしは入れないでください」と書かれた注意書きがなにか申し訳なさそうに左に傾いている。

お、フラゴナルかよ、ブランコ掛けるかねここに。意味わかって掛けてんのかよ。それにしても……ロココの申し子も、こんな処で色褪せちゃって仕方ねえなあ。

しかし、ロココもこうなると場末感を増す役にしかたたんな。本来は尋常ならざる存在感を感じさせるロココの巨匠の画だったはずが、今となってはあまりにも尋常すぎる異常な存在だ。このマンシヨンの格を落とす……いや、然るべくか。

エレベーターホールのガラス枠の中には、色褪せ、変色したフラゴナルの複写画「ブランコ」が掛けられていた。西日がいいる玄関だった。画の日焼けが著しい。複写だから余計なことなのだろう。ブランコから、スカートの中、秘所をみせる女、左下の木陰からスカートの中を覗き見て歓喜する男。

左上には、天使が指先を立て、「シーっ」としている。

右後ろでブランコを揺らしているのが、彼女の旦那。だっていうのだから、モチーフとしては悪趣味であり、場末感の演出にはもってこいではある。

一見、見るだにおいては尋常な風景なのだが、その実異常。異常な日常である。

「間男と亭主とその嫁」てなタイトルにした方が風俗画としての存在感は高まっただろうに。

一階に停まっていたエレベーターに乗り込むと、独り言を呟きお客様の部屋の階をブッシュする。エレベーターが古いせいだろう。一度、大きく沈み込んでから上へと動き出す。

程なくエレベーターは小刻みに揺れながら3階で停まった。グラグラと震えながら扉があく。

正面右手からは料理組合の行燈やら提灯やら灯を墮としたネオンが見えた。大阪西の歓楽街。○島料理組合の一角だった。

呼び鈴のインターホンを鳴らすと、程なくして若い女性の声が応答する。

「まいどう○○○○屋です」

「……ちょっと待ってください」の声。

鍵がはずされる音が聞こえる。

チェーンが外される音が聞こえる。

扉があいた。

「おまたせしま——お嬢さん、どうしたの、大丈夫ですか」

「あ……うふふ……だいじょうぶです」

玄関の三和土を真っ赤に染めるおびたらしい血。

壁、廊下は云うに及ばず、目に入るところの凡てに血糊が付着していた。それも古いものではない。少女

といっても大袈裟ではない彼女の腕からは、今正に鮮血がしたり落ちていた。血は止まっていなかった。左手首付近を出どころとし、腕を伝い肘の先から流れ落ち、玄関に血だまりをつくる。

少女の右手の指先にはさまれた2枚の千円札に血糊がつかぬようヒラヒラとさせると、少女は「足りませんか」と尋ねた。ピン札だった。

「はい。いま・・・おつりを・・・〇〇さん、大丈夫ですか」受付のときに聞き取った名前を告げる。

「お味噌汁が汚れちゃいけないので、外で入れますね。ごめんなさい。」

「あゝ大丈夫です。すみません」

「救急車・・・呼びましょうか」

「大丈夫です。」

「ウニクラ井のイクラダブルです。病院に行ってくださいね」

「ありがとうございます」というと、玄関は閉じられた。

シュールだ。あまりにも。現実とは思えぬシュールさである。

嘔吐いた。僕はエレベーターホール脇の非常階段のところまで走ると、おもいきり嘔吐いた。鮮血をながしながら真っ赤なイクラを頬張る少女の姿を想像して嘔吐く――。

【賄いを喰う前でよかった。胃液しかでやしない。さて、どうする。どうすることが正着か。】

エレベーターに乗ると自問した。

1階エレベーターホール。フラゴナルのブランコの前、携帯電話を手にすると110番をプッシュした。

「事件ですか緊急ですか」

「部屋で血を流している女性があります」

「・・・はい・・・はい。では警察官を向かわせます。そこで待てますか」

「はい。救急車も来た方がいいと思います」

電話を切るとフラゴナルに眼をやる。

アイロニーという言葉が頭の中流れる。

間男に恥部をみせている女は喜んでるように見える。後ろでは亭主がブランコの紐を操る。あの紐が……。

ここは〇島…… 日常の一コマなのか。尋常な少女が異常な中に身をやつし血を流す。

尋常な少女が出前を注文しただけなのだ。

異常な状況下で。

それが成立する日常ということに過ぎないのか。

「紙一重……か。」

了

スクリーンショット 2024.12.15 13:15:05.png



随想好日 『河井寛次郎という哲学者』

京都国立近代美術館所蔵・河井寛次郎作 白地草花絵扁壺



「白地草花絵扁壺」 昭和14年作

『暮しが仕事、仕事が暮し』

そう謳った哲学者³がいた。島根県安来市出身の陶芸作家であり、大正から昭和の激動期を創作活動に身を捧げた。河井寛次郎氏がその人だ。

創作活動期は「京都」を拠点として作陶に向き合っており、現在も河井寛次郎記念館として窯跡をはじめ様々な作品を楽しむことが出来る。

外国人観光客の足が多いのも特徴的だ。

河井は書家として、詩人としても名を知られている。

チョットインターネットでググっただけでも河井の遺した言葉にぶち当たることに苦労することは無いだろう。

中でも『暮しが仕事、仕事が暮し』と詠んだこの作などは知られたところだ。どうだろう。この一編を読んだだけでも並みの哲学者ではないことがわかってしまうものではないだろうか。

さて、まずは冒頭のサムネイルを眺めて頂けると有難い。

ここを訪れていただけ優しく奇特な読者皆さんの感性をフルに働かせて眺めてみて欲しい。タイトルはあるのだがここで書くことは控え、巻末で紹介しようと思う。

京都は、東大路を北へ上り、1号線の手前150メートルを西に入ると、途端に静謐な町並みに変わる。100メートルも歩くだろうか。北へ上る小さな辻があり、これを上ると右手に記念館が現れるのだが、記念館前はひっそりとしており、ともすると、うっかり通り過ぎてしまいうような佇まいを見せている。「営業」とは程遠い風情だ。今にして思えば(2015/02/02)受け継がれてきたご家族にとって、あの佇まいを創り上げ維持されるためには相当の試行錯誤があったであろうことが推測される。

暮しが仕事、仕事が暮しを体現化してきた芸術家、河井寛次郎にとって、暮らし場所が「浮き上がる」ことは良しとしなかったであろうことを想像することは容易い。

謙虚に、それぞれの生活の場に溶け込むことによって氏の仕事のスタイルは確かなものへと積み上げられたと眺めることは当然のことと思える。

話しは前後するが、島根県安来市出身と言えば、芸術愛好家のむぎには何度か通われているであろう、「足立美術館」が知られている。足立美術館の創設者・足立全康氏は特に地元出身の芸術家の蒐集に心を砕いたといわれている。そんな縁からか、足立美術館にも数十点の河井寛次郎作品が収蔵されている。

筆者も河井寛次郎と云う名は昔から私も聞き知っていた。同時に作品も代表的なものは存じ上げている(見たことがあるレベル)。

特に、ここに紹介した一枚は有名な作品の一つだろう。

したがって、以下は私の「感性」を文字おこしたものとご理解頂ければ有難い。

以前、氏の作品をながむる機会を得た私が感じたこれら作品群のテーマは、「シンメトリー」への拘りと「表裏」の矛盾。

即ち「人間」であり、「暮らしの線上にある信仰」への畏れ。すなわち「死生観」へと行きついた。

作品から滲みだす雰囲気は、完全にシルクロードからの影響を受けたものであることが染付からも覗うことが出来る。葉象化した梵字。草花をモチーフとしてもサンスクリットが顔を覗かせる。

河井は作品作りを通じ、「畏れ」そのものを表現したかったのではないだろうか。人々の暮らしに生きづく畏れ。それは死生観、即ち信仰へと通じる。

「自他合一」河井の座右の銘であったようだ。

畏れは敬(うやまい)に通じる。

己が限界は、合一によって更なる飛躍を遂げる。

所謂、芸術的に美術的に「美しい」と形容されるには少々言葉がそぐわない。しかし凡ての作品が「映くしい」のである。

『本質』を映し出す手段としての「芸」であり、映くしさだったと私が書けば幾分恣意的にもうつるか。

多くの作品にシンメトリー(左右対称)と表裏がある。

左右対称なれども、表裏対象ではない。

氏の人間観を表した作品群と言えるかもしれない。

そんな河井がいきついた境地が円であり、丸であり、真球だった。完全なるシンメトリー、表裏の一体化、理想を突き詰め行きついたところが真球だったようだ。自他合一の究極の姿としての「真球」である。

しかし、河井は同時に人間の持つ不完全さをも肯定していたことが覗える。それが、シンメトリーの「歪み」として表現されているように思えて仕方がない。人間国宝の話しも自ら断った稀代の陶芸作家である。

己を表現する肩書など持たず、暮らしの中に仕事があり、仕事の中に暮らしがある、と戒めた創作活動は私の様な凡人の理解が及ぶところではない。

若いころの作品でも、四角い作品の凡てが、角を削ぎ落され丸みを帯びた肩を見せている。直線的な四角さはない。すべて丸みを帯びた四角さである。

氏が、なにをテーマとしていたかを知る人は多くはないだろう。

行きつくところ「死生観」だったのかもしれない。私はそう眺めている。

私を感じたことは、「河井寛次郎記念館」という「暮らし場所」「仕事場所」でながむるからこそ、類いまれな存在感を感じさせる作品群たり得たのではないだろうかということであり、さきの足立美術館の中で、同じテーマを感じさせることが出来るかと言えば、それはとてつもなく難しいと予測する。

逆もまた、真なのかもしれない。もちろん、これは力量の問題ではない。あえて申しあげるのなら「身の置き場」ということに尽きるのである。

それぞれが、それぞれに相応しい身の置き場に、その身を置いた時、持てる力は開放の時を得る。

「芸術と哲学」は対だ。

京都へお訪ねの際は是非一度お運び頂きたい。

自他合一、シンメトリー、表裏 ** ** **

「人間」というテーマが表だとするなら ** ** **。

裏は当然のように「死生観」と落ち着くだろう。

暮しが仕事、仕事が暮しということを突き詰めるならば「死生」を掌るもの達への畏れということに結節するのではないだろうか。

用の美、民藝作陶家。河井を形容する言葉は様々にある。

それもこれも自分で付けた呼称ではない。

人々の暮らしに寄り添ったところから本来の美のあり様を突き詰めた芸術家であり、その姿勢は河井の哲学によって裏打ちされたものと眺めることが出来るだろう。

京都国立近代美術館所蔵・河井寛次郎作 白地草花絵扁壺



「白地草花絵扁壺」昭和14年作

画像

京都国立近代美術館所蔵 白地草花絵扁壺 河井寛次郎

さて、皆さんには河井がなにを表現した様にご覧になれるだろうか。

私には、初夏、燕のひなが巢立ちを迎え、その雛に飛び方を教えている親燕の姿に見えるのである。

上手に飛べよ、まあるく飛べよと***。

了

小説『VANITAS』

第一章 萌芽

上野は国立西洋美術館の前庭。松原隆二の脚はとまっていた。オーギュストロダン作「地獄の門」の前だった。高さ5.4m幅3.9m重さ約7トンのブロンズ彫刻は1933年の完成である。

【確か世界で7カ所ほどあったはずだが……それにしても、何故、日本に2カ所もの地獄の門を作る必要があったものか。まあ、静岡県立美術館はロダン作品に特化した美術館でもあるからして然もありませんという按配に留め置くことは簡単なのだが。それにしても……】隆二の眼は国立西洋美術館正面入り口に掲げられたポスターを見やった。そこには『Vanitasとどうもう一つの真理』世界のVanitasを一堂に集めて』と銘がうたれていた。

隆二は僅かのあいだ肺に溜めたタバコの煙を細く細く、尾を繋ぎ止めるように吐き出してみせた。静かに、懐かしむように、紫煙と上野の森の空気を混合させ乍ら。目は、鉛色の東京の空へと移したまま見上げたきり動かなかった。無表情のまま。観る者にはそれは差乍らブロンズのようにも映っただろう。

「上野か……」昔、上野、金儲け……導き出された答えは、イラン人という人達であり、偽造テレホンカードが彼らの収入源だった時代であったことを思い出していた。

「地獄の沙汰も金次第……、さしづめ地獄の門も金次第で開いたり閉じたりか。風俗姉ちゃんの下じゃねえっんだよ、ねえ、考える人よ」隆二は薄い笑みを滲ませるとワザとらしく下卑た言葉にしてみ

せた。人間によっては畏まった場所であり環境に身を置くと妙に悪ぶってみたくなる性質をみせる者もいるのだが、隆二もこのタイプに属していたのかもしれない。

ロダンは、「考える人」をPoëte（詩人・フランス語）と名付けていた。ロダンは「詩人」と名付けている。ロダンは何故、詩人と名付けたのか。

地獄の門のファサード付近に設えられたPoëteは後にそれだが鑄造され現在の「考える人」となっている。

フロレンス（フィレンツェ）出身の詩人であり、哲学者として活躍したダンテによる「神曲」地獄篇第三は名高い。

我を過ぐれば憂ひの都あり、

我を過ぐれば永遠の苦患あり、

我過ぐれば滅亡の民あり

義は尊きわが造り主を動かし、

聖なる威力、比類なき智慧、

第一の愛、我を造れり

永遠の物のほか物として我よりさきに

造られしはなし、しかしてわれ永遠に立つ、

汝等こゝに入るもの一切の望みを棄てよ

「神曲」岩波文庫 山川丙三郎氏 訳

ダンテには、子供のころから密かに心に秘めた女性がいた。それがベアトリーチェだった。がダンテの恋は実りを得ることなく、双方ともに別な伴侶を得ている。その後ベアトリーチェは24才という若さで、病のためこの世を去っている。ベアトリーチェの死報に触れたダンテは半狂乱となり悲嘆に暮れたと伝わっている。

後にダンテが生涯をかけて産み落としたのが「神曲」ということであり、地獄の門なのだが、ダンテの憂鬱質がどれほどのものであったか分かろうという史実である。

「考える人」は、ダンテが密かに永遠の愛を誓った、ベアトリーチェの余りにも若すぎる死に触れ打ちひしがれたダンテそのものを顕しているだろうことが想像に容易く、「詩人」と名付けたロダンのダンテへのオマージュと眺めることが相応しい……隆二はそう考えていた。地獄の門、憂いの都は、ダンテにとってのそれだったのだろうか。

「まあ Vanitas をやるのであれば、日本でここより相応しい美術館は無いということか……」隆二はそう言葉にするとここで二本目の煙草に火をつけた。

2013年春、隆二のもとにひとつのニュースが齎された。それは思いのほか大事となりそうな気配を孕んでいた。

「バカが。だから生兵法は怪我のもとと云う。しっかりとした勉強をしていないことを自ら晒したに過ぎまい。だからゼロを学ばなければならぬのに。それにしても……この芽は摘んでおかなくば寧ろ対岸の火事では済まなくなるかもしれないわなあ……どう動くか」隆二はパソコンのメールを閉じるとそう呟いていた。

時は福田内閣の折(2008年)にはじまったASEAN諸国の経済的且つ社会的資源でもあるところのイスラム法・シャリアに基づく「ハラール」をはじめとする東南アジアのイスラム市場への取り組みがスタートした黎明期でもあった。

2008年当時、日本はまず東南アジアのイスラム市場向け輸出市場のロジックを調査研究する方向へと舵を切っていた。この時に中核的ポジションを担った国がマレーシアだった。華僑系とプミプトラ系統(現地人)の自国民が混在する社会を形成していたマレーシアだったが、確かなイスラム社会が形成され社会基盤もイスラム法が機能しており、ハラールに関するガバナンスも JAKIM(マレーシア連邦政府総理府イスラム開発庁)によって厳格に管理されていた。

福田内閣より特命を受けた内閣官房参与の○○氏(後に・岡山県庁に出身)と某大学の教授○○氏のチームによる、輸出市場むけのロジック構築と制度化への取り組みがはじまったのである。

日本という国が「宗教」を市場化した画期的な夜明けでもあった。

後に農林水産省と経済産業省が軸となり、マレーシアをはじめとするASEAN諸国のイスラム市場向け輸出事業がスタートすることとなるのだが、先にも触れたように、たった二人の優秀な特命チームの活躍はもう一度触れておかなければならないだろう。同時にこの二人の活躍を補佐したのが国際機関であるところのJETRO(日本貿易振興機構)とJICA(独立行政法人国際協力機構)だった。

ASEAN-China Free Trade Agreement



AC-FTA

ASEAN Member Countries

域内ムスリム人口
27300万人

2010年1月
発効

域内人口19億人
名目GDP 約6兆ドル



後にこれらへの取り組みが契機となり、今日のTPP（環太平洋経済連携協定）への発展と礎となるのだがここでは割愛する。

が、日本には急がなければならない事情があった。TPP（環太平洋経済連携協定）という大きな枠組みを構築する上での事情。

それが、右図に示されたACFTA、ASEAN、中国自由貿易協定。中国主導で進められた協定の取り組みの発行が迫っていた。域内2億7千3百万人のムスリム巨大市場を抱えたASEANと中国の枠組み。当時、中国にしても新疆ウイグル自治区を中心としたイスラム社会が形成されており、イスラム社会資源も相応に有していた中国は、ACFTAを通じて経済的側面からイスラム社会資源へのコミットを果たそうとしていた。

結果、ACFTAは2010年1月に発行を迎えた。日本は数カ月ほど遅れてマレーシアをはじめとするイスラム市場へのハラル資源の輸出事業が開始されることになるのだが、2年という短い期間でこのロジックをまとめ上げた一足たちの活躍は、今日の日本経済を下支えする大いなる功績の一つだったと言えるだろう。

中国はその後、新疆ウイグル自治区のイスラム系自治区民に対する帰属や人権をめぐる侵害行為を行ったことから国際社会（欧米中心）よりジェノサイド認定を受け批難を受けるに至っている。

隆二のもとに齎された報はメタが運営するSNSによって次のように記されていたのである。

「お疲れ様です。いやあとんでもないのが出てきましたよ。まあ、前々から問題ありの人物だったのですがね、ヤッコさんやちまいましたね。国内の在日ムスリムの人達を捉まえて、コンバートムスリムが偉そうなことを言ってるな」ことやったらいいんですわ。そしたらムスリムの人たちが怒りだしちゃいました、もう、上へ下への大騒ぎです。これは拙いでしょう。あいつ、しっかり勉強もせずにムスリムフレンドリーの旗振り役もしてましたからね。これじゃあ冷や水浴びせたようなものですわ」という隆二の関係者からのものだった。

ここで云うところの「コンバートムスリム」とは、俗にいう処の「改宗組」のことである。要は日本国内に住み、日本人として仏教や神道に帰依信仰していた者たちが、イスラム教への信仰の誓いを立てた者たちを意味指しているのである。

本来、この言葉自体が「ムスリム」間で非公式な場面において使われる言葉であり、この信仰を持たない立場の人間が使うことにはムスリムサイドによるアレルギーも伴っていた。

従って、ムスリムでもない人間が同胞を指して「コンバートムスリム」と揶揄するなど以てのほかであったのだ。

隆二による「バカが。だから生兵法は怪我のもとと云う……どう動くか」という独り言は当然と言えば当然のものであった。

「まずは、事実関係だけは確認しておかなくばなるまいな」そう口にする隆二はメタに登録されてある関係先へと事実関係の把握にむけての送信に着手し始めていた。

■
遡ること一年前の2012年12月のある日のこと。隆二の躰は東京の某大学で開催された観光系の学会の登壇者としてマイクの前に立っていた。インバウンド市場における「信仰」を持った人々を市場化する上での取り組み。所謂イスラム教徒・ムスリムたちを日本に呼び込むうえでの策についての講演だった。

「……さて、ということ、所謂日本流の観光客向けの釣言葉である、非日常を切り口とするこの合理性を見出すことは出来ない」と知っておかれるべきでしょう。何度も言うようですが、彼らにとっての旅は日常の延長線にあることが相応しく、寧ろ日常を守ることが宗教上のシヤリア、イスラム法に通じてきます。同時に、教義戒律への遵守姿勢についても個々人によって変わってきます。ともすると厳格、寛容などという言葉で信仰の姿勢を表現することもありますが、入り口として押さえておくべきは、この様な主観的考え方は取り除いておかれるべきでしょう。信仰は何処まで行っても個々人のものですから、外部の人間がそれに対し、寛容、厳格という判断は慎む必要があります」

「では、具体的にどうすれば良いのかという疑問が湧いてくるでしょう。単純です。今のところ日本は、徹底的な情報開示姿勢に徹するだけです。寧ろ、今の日本にはこれしか出来ません。2010年よりASEANを主とするイスラム市場向けへの輸出事業は〇〇先生達の活躍により、制度の設計が進み、農水、経産の主導で始まりましたが、これはアウトバウンドです。即ち、ハンドリングの主権者は輸入元に在りますから寧ろ日本はそれに倣うことが当然なわけです。しかし、インバウンドの主権者は受入国、ホスト国の日本です。現時点において日本にはそのための資源は限定的です。従って、日本は資源造成と現有資源の情報開示という前後輪を動かす取り組みが必要となるのです……」

九十分の公演は30名ほどの学会員で埋まっていた。参加者は実業系会員が多かったようだ。隆二の講演が終るとゲストコメンテーターの影山が司会者から指名を受け、コメントを口にした。

「仰ることがとてもわかりやすく、新たな市場としてこれから注目を集めることになるのでしょうか、現在までのところは資源の充実という観点からも時期尚早と云いますか、まだ早いのかなというのが率直な感想でした……」とやった。後にこの影山が隆二の運営する研究所に合流することになるなど、この時は考えもなかったのである。

ただ、講演会場の反応は、概ね影山が言葉にしたようなものであり、隆二は先の予見できない観光学

の専門家たちへの苛立ちを深めたのだった。

【たった数年ですら予見できずか、これでは人も育つまい。観光学自体が萌芽と云えば萌芽。実業系の都合が優先されているのだろう】隆二の中では5年先を予見できない専門家は専門家に非ずとしていたことから、然もありなんということではあったようだ。

隆二の講演からほんの数日後のこと。メタを通じた関係者からのメールが隆二のもとに配信された。「大変です。観光庁が来年度の重点取り組み地域にASEANのムスリム市場と打ちだしました」理事長、これ知っていたのですか。そして、ついでには2013年2月に観光庁主催でムスリムインバウンドセミナーを開催するから仔細確認の上応募してくれていきますよ」と記されていた。

ついに来たか。隆二は震えていた。それにしてもなんというタイミングだろう。

風が吹き始めていることを実感していた。

つい先日、学術系の学会で話したことが国の制度政策上の重点施策として制度化されるのである。ここまで丸々2年。一人閉じこもり朝から晩までムスリムとイスラム教、そして世界の宗教を取り巻くインバウンド環境について勉強してきたことが小さな花をつけはじめたのであった。

観光庁のホームページへ飛び隆二は内容を確認すると次のように記されていた。

『日・ASEAN友好協力40周年記念事業として、ムスリム訪日旅行者を受け入れる環境整備や受入サービスの提供などに関心のある関係者を対象に、東南アジアのムスリム市場に特化したセミナーを開催いたします。』

注目される同市場の現状と日本国内において先進的にムスリム旅行者の受け入れに取り組んでいる事例等を紹介することで、各地域における受入環境の整備促進や、飲食・宿泊などの各種施設における関連サービスの充実を期待しております。』

日本でアウトバウンド・ハラルへの調査研究がはじまってから5年。

当該市場を輸出市場として見据えた国の取り組みがスタートして2年。

「そして来年……ついに日本は宗教への取り組みを実現化する。にいぼんのお夜明けぜよ！」

隆二は言葉に出して叫んでいた。

第二章 混迷

2012年12月、国土交通省・観光庁からリリースされた「ムスリムインバウンドセミナー」は一瞬の

うちにその席は予約で埋まっていた。隆二も何度か観光庁への問い合わせをはじめ関係者からのネゴも入れてはみたものの席をとるには至らなかった。

明けて2013年の2月。日本ではじめてのこととなる、イスラム教徒をインバウンドゲストとして市場化するためのセミナーが国主導のもと開催されたのだった。登壇者には北海道でリゾートホテルを運営するK観光。京都で有名老舗京料理店を営む京料理Mらの経営幹部が顔をそろえていたと伝わる。後に隆二は参加した関係者からその時の詳細を聴くに至っていた。

「思った通りと云いますか……、観光庁もこの市場に取り組む難しさを改めて知ったでしょうね。」

「なに〜なになに、早く聞かせてよ〜なんかあったの?」

「遣っちゃったんですよ。登壇者が。質疑応答の時。質問者はムスリムでした。」

「うんうん。それで?」

「お話の中で、イスラム教徒にも教義戒律に厳格な人や緩い人がいる〜ということでしたがどうゆうことですか、あなたはムスリムですか?……と聞いたわけです。まあ、違いますと答えた訳ですが……間髪入れずですよ。ムスリムでもないあなたに厳格とか緩いとかどうして判断が出来るのですか?とやったわけです。もう止まりませんでしたよ暫く」隆二に情報を齎してくれた関係者はそう仔細を告げた。

「それを言ったのは日本人?」

「違いますね〜多分ASEANのどこかの国の日本在住者でしょうね。どうも認証団体かモスクに関係しているんじゃないですかね」

「有り得るね。国内の認証団体にとっても千載一隅の商機だかね。日本は認証団体にとっては最後の楽園であることは間違いないもの。しかし、キッチリとした勉強をしていないというのは恐ろしいねえ、登壇者にしたら半分受け狙いみたいなリップサービスの思ひもあったのだろうけど、しかし、日本人は宗教音痴だよね」

「いや、本当ですよ。質問したムスリムの立場に立ったなら、ムスリムでもない、イスラム教徒でもない日本の商人たちが、ムスリムのおもてなしについて喋るということがそもそも面白くない(笑)まあ、これも当然と言えば当然でしょう」それではまた〜という言葉を残すと隆二は電話を置いた。

【早速か。これで観光庁さんも市場開拓の方向性については再度の煮詰め直しが必要になったということだろう。政教分離のお題目を何処までこの市場で通用させることが出来るかは見どころではあるものの傍観するわけにもいかずだ……アウトバウンド・ハラルにしたところで、農水、経産も結局のところ、道はつけたあとは住民でやってくれのスタイル。アウトバウンドは主権元のガバナンスが否応なく機能している。一方で、インはこの通りだ。ホスト国が政教分離を掲げている以上、出来ることは限られている。ましてや観光庁さんも旗揚げまだ日が浅い。荷が勝ち過ぎといったところだろう。にしてもだ……観光庁ヨ。あんたたちの組織はプロパーの役人はほんの少数。それも各省庁からの寄せ集め。今回のセミナーだってハンドリングしたのはJ〇Bあたりからの出向組が関の山。当然と言えば当然の結果に過ぎないわけだ。ただこの後を考えると認証団体の姿勢如何によっては観光産業事業現場は大いに混乱、そして混乱を深めることになるだろう。ハラルだけではない。この後に来るのがベジタリアンでありヴィー

ガンでありコーシャだ。凡てがライフスタイルとイデオロギーから派生した国際社会によって担保されたルール。観光行政、インバウンド行政最後発の国である日本にとっては難しい舵取りが迫られるだろう。今のうちに後から出て来るモノを含めたグランドデザインと交通整理の考え方は持つておくべきなのだが……】消え入る前の最後の足掻きか。ポツポツと音を鳴らし乍らストロブの灯も墮ちはじめる。2月のうすら寒い部屋の片隅。隆二の眼は消える寸前のストロブの灯を見つめたまま動かなかった。

2013年当時、日本に在住するイスラム教徒たちは23万人程度と言われていた。※2024年末の時点における日本在住イスラム教徒は42万人と言われている。これは日本の総人口に占める割合でみると0・3%だ。2023年度との比較では約7万人増えていることになる。

20年前と比べると約4倍弱。この傾向は日本国内の労働力不足に伴う外国人受け入れ施策でもある技能実習生らが増えていることも要因の一つにもあげられる。

国・地域別で最多はインドネシアの約20万人、バングラデシュ約3万5千人、パキスタン約3万人、マレーシア約1万2千人、トルコ約8千人となっている。

尚、イスラム教徒にとって最も大切なモスクの数だが、25年7月時点で全国に約160カ所存在している。

※印巻末で出典記載

さて、ここで一寸乱暴な数字を導き出してみようか。

42万人のうち、28万5千人の人々が先にあげた主要国から受け入れたイスラム教徒、ムスリムたちであると考えたとき。残りの13万5千人のチャンネルについて考えてみて欲しい。

そしてもう一つ。イスラム教という宗教の性質上、家長がイスラム教徒である以上配偶者もイスラム教徒にならなければならないという定めがある。同時に、夫婦間において生まれた子供たちも自動的にイスラム教徒として生きて行くことが定められている。

さて、これらから導き出される一つの答えとしては、今後、爆発的にイスラム教徒が日本の中にも増えてゆくという構図が見えてくるのである。

地元コミュニティにイスラム教徒の家族、小規模コミュニティが根ざして生活をする場合。近隣の住民も宗教的なルールに乗っ取った生活様式であるとの理解を示すことは可能でもあり、例えば、ハラルにしても「そういうものである」と理解することも可能なのだが。

問題は情報が届いていない、足りていない地域のコミュニティにイスラム教徒が入って行ったときのアレルギーであり市民感情、市民反応に対する処し方の難しさという側面も垣間見える。

例えば図2をご覧ください。

טת טו טז טז טז טז טז טז טז



図2は、ハラールであることをイスラム教徒にわかりやすくするための表示だが、現時点においても日本人のどれほどの人たちがこの意味を理解しておられるかは疑問なところでもある。先進各国の政府系機関には「ハラール」に取り組むためのオフィシャルでありアライアンスでありの棲み分けは別としても政府系ガバナンス機関が存在している。この動きはCODEXにおいて、1997年にハラールとコーシャの存在が国際的に「認知採択」されたところから始まっている。しかしながら2013年時点にしてなお日本は「国民」という姿勢を崩せずいたのである。

「餃子屋かよ」セミが鳴くには半年早いつて云うんだよ」



各国のハラールマーク

図3 主要国の国家的ハラールオーガニゼーションマーク

※インドネシアのマークだが、インドネシアウラマー評議会(MUI)の主幹事業であったハラール認証制度とハラール資源の管理等が、2019年にBPJPH(宗教省大臣直属機関・ハラール製品保証庁)が新たな事業移管先となっており、これに伴いロゴも変更となっていることに留意してほしい。

隆二の考えていた通り、観光庁による日本初のムスリムツーリズムセミナー以降、制度者(国内のハラール認証機関)はもとより、各種事業現場、コンサル事業現場は蜂の巣をつついたような状況下に置かれていた。

2013年春……そのような状況下の中、外務省外郭団体である「日本アセアンセンター」からのムスリムツーリストを受け入れるための後方支援がはじまった。

それが「ムスリムフレンドリー」という概念だったのである。国内事業者、国内のインバウンドに取り組む地方自治体はこれで一気に「ムスリムフレンドリー」へと雪崩を打って取り組み始めることとなる。制度者達の反応は様々だった。

「ハラールにムスリムフレンドリーなどは通用しない。有り得ない」とハラールの担保性を重要視する認証機関たち。逆にムスリムフレンドリーという言葉を商機と捉え、「ムスリムフレンドリー認証」という認証化に取り組む認証機関たち。中には、ムスリムフレンドリーは駄目だと言っていた舌の根も乾かぬうちに宗旨替えとも思える「ムスリムフレンドリー研修」なるコンテンツを創り出す認証団体もあった。ムスリムでもないのにハラール認証を仲介するブローカー、そしてコンサルタント達。その様子は差乍ら玉石混濁、百鬼夜行を往くと隆二には映った。※

ハラールは、いや「認証」という制度は、「政教分離の国」日本という中で一気に混迷を深めて行くことになるのであった。

この状況に業を煮やし危機感を感じた隆二はここで4つの動きに打って出ることになる。

・まずは、国内に見られる認証機関の存在をブラッシュアップすること

これは、誰も手をつけていなかった。理由は「センチティブ」さが機能した結果だった。観光庁の一つの躓きでも分かるように、国内の認証サイドからのアレルギー反応が予想できなかったことによる二の足を踏んだ結果が顕れていた形だ。

・取り組み上の得られる果実の大きさと伴うリスクのブラッシュアップをすること

残念ながら日本は「無知」すぎた。知らな過ぎたのだった。日本という国が先ごろ声を上げたムスリムツーリストを受け入れるまでの、国内に在住するムスリムたちの生活の有り様を何も知らなかったのだ。長らく続いた氷河期が、一転して陽が昇り、光が射す。光を浴びた者達に目は行くが、そこには必ず影が付き纏う。闇夜であれば影は目立たぬ。しかし、この国は「影」に対しても無知過ぎた。

・国際社会のハラルルの存在と位置づけ

光りが当たれば影が出来るのも真理の一つ。持て囃されればネガティブな側面も必ず出る。情報が無かった。日本にはそのネガティブな側面をわかりやすく開示、可視化するシステムが機能していなかった。選択は果実とリスクの相互バランスによって機能を見ることは当然であり、良い話しばかりが出回ることには将来に観る「脆弱」さを意味していた。

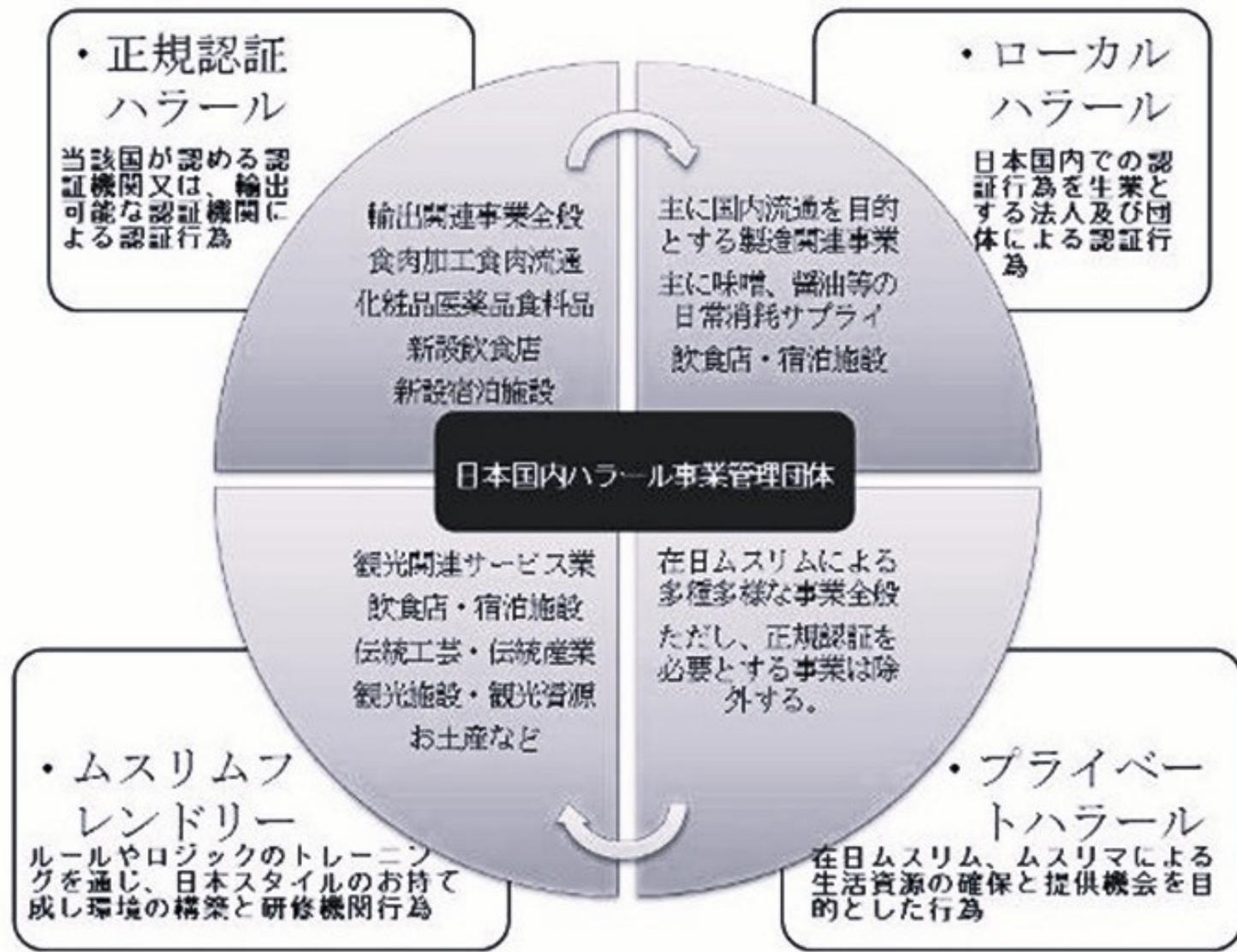
「さて、わたしが取り組むべき目先のことは理解もできたものの。立ち位置が決まらない。そもそも日本という国は何故「政教分離」へと舵を切ったのか。まあ、イスラム教徒いう宗教が日本に入るのが遅かった理由は陸続きでは無かったこと、そして鎖国があったこととして理解できるが、さて、近代日本に至って政教分離のそもそも理念とは如何なる考えによって始まったのか」そう隆二は悩んでいた。政教分離がこの国の政治に齎す功罪。

「そうだ、ついでだからもう一つ調べておくとするか」

・日本の宗教、宗派におけるハラルルとの関係に関する調査

日蓮宗、創価学会、天理教、神道 凡そ調べが付く日本の宗教と宗派にとって、イスラム教のハラルルは日常生活に取り入れることは出来るのか否か。

これを調べることは隆二にとっての立ち位置を考える上で重要なファクトだった。



さて、混迷を深める「in」の制度設計に観た日本の宗教への取り組み。

隆二は「in」の確かなコンテンツ造成を進める上で、アウトバウンドハラールロジックを纏め上げた
○○大学教授の○○氏の意見を聞くために連絡を取り付けた。

「先生、突然申し訳ありません。先日もメールで申し上げた通り、わたしの師匠でもある田崎より紹介を受け連絡をさせて頂いております。お時間は大丈夫でしょうか……」

「あゝ、はいはい」と○○氏の対応はとても柔らかく、所謂、五月蠅がられるものではなく隆二はホッと胸を撫で下ろすに至っていた。

「早速ですが、先生。教えて頂きたいことがあるのです。他でもないのですが、観光庁をはじめ日本アセアンセンターさんなどの動きも活発となって来ているのはご承知だと思っておりますが、一方で、国内の在日ムスリムサイドから認証行為でありサービス行為に対する様々な声が上がりに出し、混沌とし始めている状況。先生、この辺りについてご指導いただけませんか」隆二は口に出す言葉一つ一つを今までにないほど慎重に選び言葉としていた。

○○氏の言葉は柔らかく、尤もなものとして隆二は始末をつけるより他は無いものだった。○○氏は愉快そうに一つ笑を挟むと次のように言葉とした。

「松原さん……それは、inは松原さんにお任せします……」と。

隆二はこの遣り取りを終わらせると己の愚かさど、○○先生の懐の深さに一層の感銘を受けていた。

「本来、○○先生のような人が制度設計に関わってくれると説得力も増す。俺が声を上げたところで、精々がどこの誰よというところからの聞きだろう。が、○○先生がinの制度設計に手を出さないことは当然のように理解できる。政教分離の国にあって他国の宗教を国内に取り込み、制度を作り上げようとする方がどうかしているのだ。まして、相手はイスラム教。教義教則は多岐にわたる。宗派でさえ何派にも枝分かれする。それによって教義教則は変わるのだ。○○先生の仕上げた仕事はマレーシアスタンダードと云われるハラールへの確かな入り口構築。まあ、JAKIMの場合は相互認証制度が機能している国も少なくない。マレーシアスタンダードのロジックを身に付ければ、日本としても、インドネシア以外のASEANは市場化できる。しかし……先生は俺にお任せしますと云ってたよな……どゆこと。まあ、事前にメールでご挨拶だけは済ませておいたから、事前情報は取れていると思うのだが……、お任せする……かあ」

隆二はこの時点で既に幾つかのルールを自分に課してホームページをはじめブログなどを通じ発信をし

ていた。

- ① 宗教や認証行為で金品の授受をはじめとする商行為は行わないこと。
- ② 宗教と信仰を持つ者達に対する配慮を大前提として取り組むこと。
- ③ 大義は国益。目先の利益に迫られ誘導せず、国益に通じる取り組みとすること。
- ④ 全方向的耐性を持った発信、取り組みに終始すること。
- ⑤ ハラールに捉われることなく、数年先を見据えた有り様を切り口とすること。
- ⑥ 清濁を併せ呑みつつ己の立脚地を見失うべからず。と。

しかし、隆二のルールが世間に通用するはずもなく、制度者達による様々な都合は、市場を、事業現場を混乱に貶め、終いには輸出も出来ると言いながら輸出もできない。これじゃあ国際社会には通用しないという声も上がり出す始末。一方で国はinの制度設計に関し「国民」という錦の御旗を下ろすことは出来なかった。政教分離という基本的政治姿勢と国政への取り組み。

「この姿勢が今日の日本をここまで守ってきた。国民をここまで守ってきた……しかし、有体にいうなら、臭いものには蓋。現代の鎖国とも映る。一方で、いいとこどりを得意とする人間たちの温床ともみえる」

隆二は早々に4つの動きに打って出たのだが、その際、一番最初に手をつけたのが「国内認証機関のブラッシュアップ」と日本の各宗教団体のイスラム教・ハラールへの日常生活における取入れの可能の是非についてだった。

図4 参照

隆二は日本で初めての「国内のハラール認証団体等展開図」を仕上げリリースをはじめていた。これは日本における在日ムスリムをはじめモスクが中心となるハラール認証団体を体型的且つ、一目で判断の付くわかりやすいものとなり関係者間の評判も上々……ではあったのだが、ある日一本の電話が鳴る。

「理事長、大変ですよ」理事長が作ったコンテンツがパクられていますよ」偶々申し込んでいた〇〇のセミナーに行ったんですけど、映されていたパワポのデータや展開図、コンテンツまで丸パクリでしたよ」これ、著作権侵害で訴えた方がいいんじゃないですか」との知らせが齎されたのである。

これを契機として、隆二の所で作り上げたロジック、コンテンツは何度も何度も様々なところで盗用されることになる。その度に、隆二のもとにはご注進を齎す者たちがいたのだが……。

「全くしょうがねえなあ。使わせてくださいと言えれば済むのに。コンサル系の看板挙げてる連中にとっては、それも言えねんだらう」これが隆二による常なるスタンスだった。後に、驚くことに隆二自身がスピーカーとして登壇したセミナー現場の二つとなりのブースで、丸っパクリのコンテンツを隆二自身が目にするようになるのだが、それでも隆二はそのブースの担当達に文句を言うことは無かった。

考えようによっては……というまでも無く、隆二にとってはロジックであり作り上げたコンテンツは「経営資源」であると考えるのが当然だった。しかし、この時に隆二が考えていたことは

「俺が作るものは国の経営資源にならなきゃいけない。だから、パクりたきゃパクれ。そして使えるものなら凡て使い。そして広めてくれ。この考え方を……」と、一人で出来ること一人で広められることの限界を見越し、寧ろ周りの力を使い広めることを考えていたのであった。

「本来、制度設計に力を尽くそうと考える者は一纏まりになったほうが強さは増す。しかし、この時期は覇権争い喧しく、離合集散は当たり前。ともすると足の引っ張り合いは日常茶飯事だ。何かを云うことは簡単だ。ただし、それが俺の考える国益に結び付くかと考えたときそうは為らない。ロジックやコンテンツ程度の共有は腹を太く見てみぬふりとしようじゃないか。分かる者たちには判る。それでいい」と肚を括っていたのであった。

この頃には隆二の仕事を進める上での立脚地も決まっていた。

それは日本の各宗教団体へのヒヤリングを通じての結果がそれを容易なものとしていたことは確かだった。

「恐れ入ります、創価学会さんですか？」 恐縮ですが広報ご担当に電話をお願いできますでしょうか。松原と申しますが」

「どの様なご用件でしょうか」

「はい実は、イスラム教のハラールと云うものをご存知でしょうか？」

「はい。それが。」

「創価学会の信徒の皆さんは、ハラールと云うものを摂取可能なのでしょうか？」

「………ノーコメントで」

「天理教さんですか？……… ハラール……」

「ノーコメントで」

「神社庁さんですか？………」

「ノーコメントで」

この現実を目の当たりにした時、隆二の頭の中には「政教分離」に進んだ近代日本の政府の覚悟が見えた気がしていた。

「政教分離というものを、俺はお題目程度に考えていたのかもしれない。いや間違いなくそう考えていた。しかし、この現実はどう考えるべきではないのだろうか。」

調べりゃ出てくる仏教徒人口1億人強、神道人口1億人強、合計で2億人という、日本人口ですら平気で上回るこの国のブワブワな宗教観。結局、近代日本政府の目指したところは一人の国民も漏らさぬ平等の有り様というこでしかないのだろう。国民の「宗教観」を顕す数字を見る限り、ブッチャケ宗教と

信仰に向き合う国民の状態把握は意味をなしていない。

バカバカしいただの数字でしかない。

政府が「水も漏らさぬ」制度政策の有り様を求めた結果の政教分離。であるのなら、それに基づいた国民の選択が機能する仕組みづくりこそが是。ここからしかあるまい」と考えていたのである。

「しかし、各宗教団体のノーコメントという回答を見るにつけだ……選択の機能とは言ったものの政府サイドの制度設計側に身を置く人間でもなし、具体的なやり様、実現性のあるやり様というものが浮かばない……、たとえ浮かんだとして国や社会に対する影響力や如何にと考えると…… ハァ、これはやはり学校だけはしっかり出ておくべきだったのだろうなあ……50で思い返してみたとて時すでに遅し。挙句にここまでの生きすがら受けてきた矢玉鉄砲傷も深すぎる。善因善果悪業悪果。それもこれも自分の責任。さて……俺……どうやるよ」

風雲急を告げる日本による宗教への取り組み。

国際社会より遅れること20年。

日本は何を、そして、どこを拠り所として行くべきなのか。

隆二の挑戦は今始まったばかりだった。

■

隆二は高校を2年の終わりに中退していた。学校からは随分とめられた。進学予定者の中には入っていた隆二を学校側としても「進学率」を少しでも落とすたくはなかったようだ。

校内での喫煙や、友人の下級生へのカツアゲに付き合い、2年時には3度の停学処分。それでも3年には進級出来る前提があった。しかし進学が前提に無い者に対して学校側は厳しかった。ホームルームの出席が一限足らずだけで留年を宣告される者もいた。

隆二は世界史か英語の高校教員になることを漠然と考えていた。

「爺ちゃんのこと考えたら歯科医を継ぎたい思いもある……だけど、うちにはそんな大学行けるような金はない。まして、非嫡出子の子供。それも一番孫。婆ちゃんがオモシロイ顔をするわけがない。精々、学校の先生か……」しかし……

世界史の担当教諭などは隆二のノートを目にすると授業後に職員室へと呼びつけた。

「隆二、お前のノートはどうなっている。わたしの授業、黒板に書きつけたことが殆ど書いていない。それぞれが一つのこと掘り下げていることは認めるが、これじゃテストの点数が取れない。ノートに免じて赤点は出さぬが、黒板をうつすようにしろ。これがやりたきゃ大学へ行ってからだ」とのご託宣。が、ここからの世界史の先生の隆二に対する目は、覚え目出度きものと化していた。

英語のグラマーの教諭などはある種の嫉妬をみせ。

「隆二、おまえどうなってるのよ。リーダーあれだけの点数取れるのにグラマーなめてんのかよ。ある意味、カンニングしてのリーダーの点数ではないことは分かる。だったら、なお更グラマーもっとしっかり勉強しろよ。」隆二は1年生の二期期中間テスト以降、リーダーは85点以下は取ったことが無かった。一学期目は二度とも「赤点」だった。そこから英語にのめり込む。

地学などほとんどないことになった事がある。全国模試で学年一番になったのである。奇跡だった。

「このクラスに、1組から9組迄の中で学年一位を取った者がいる。今から答案用紙を返すが、点数の低い順に返す。名前を呼ぶから取りに来い……」

この高校には特待生クラス「アップパー」という10組目が存在した。このクラスの者達は有名公立高校の受験に失敗した者たちだけで構成され、授業料免除という免罪符が与えられるのである。1年時から2年時への進級の際、成績優秀者はアップパーへと組み込まれるシステムもあったが、残念ながら隆二はそれには届かなかった。寧ろ届きたいと思わなかった。週で7時間も授業が増えるのである。

隆二の名前は中々呼ばれなかった。

次第に「おめえ、何で呼ばれねんだよ」という声が隣近所から届く。

「最期！ 松原！ ……」

名前を呼ぶ先生の首が不思議そうに傾く。眼は明らかに奇異なるものを見る目の色を宿していた。

「どうしたんだ、お前これ……」

「……知らんよ」

マークシート方式だった。隆二は「鉛筆転がし」で地学を70点以上取っていた。寧ろ自分で考えた処の正解率は低く、鉛筆転がしが奇跡の正解率をよんでいた。

「松原、チョット来い……まあ、カンニングは……してないよな。そういう話しは聞いたこともない。地学好きなのか？」

「別に……なんか地味でしょ？ 地学って」隆二がそう告げると担当教諭は何も言わず帰って行った。後ろ姿からは何やら寂しさが漂っていた。

が、そんな凡ては水泡に帰し、隆二はあまりにも早すぎる人生経験、修行をつむこととなる。

思いもよらぬところで狂った人生の歯車。結局、隆二は一生「コンプレックス」という余計なものを抱えたまま社会からの逃避に向き合うことになるのだが……。

隆二が中退した理由は大きく四つあった。二つは隆二がはたらいた「不逞」に起因する。一つは隆二の家庭の経済的困窮により学校に納める授業料ですら滞る有様だったこと。隆二もバイトをしながら時おり授業料の足しとしてはいたものの、経済的困窮改善の方向は見られなかった。

最後の一つが寧ろ中退の決定打となったことは、後の隆二の異性関係の乱雑さ煩雑さいい加減さに大きな影響を齎したようだ。隆二は17歳にして知るには余りにも衝撃的な人間の持つ一つの側面を見るに至る。「どうして言うかなあ」隆二が不逞をはたらいた相手から齎された一撃。

隆二は不逞をはたらいってしまったことを当時付き合っていた同級生の女の子に告げてしまっていたのである。純粹過ぎた。馬鹿正直すぎた。苦しすぎた。顔が見ていられなかった。悩みに悩み隆二は当時の彼女にそれを告げたのだが……不逞相手が悪かった。

相手は、付き合っていた女の子の一番の親友だった。

隆二は不逞相手にもそれを告げたことを伝えていた。

「どうして言うかなあ」

その時のひと言がこれだった。

隆二はこの一言を耳にした時、間髪入れず学校をやめる決心をすることになる。

「あゝ……駄目だ。これは駄目なのだ。失恋に落ち込んでいる相手、俺はけしてその淋しさに付け込んではいない。ただ、おかしな高揚感とへんな期待があったことは事実だ。でも、結果的にはなるようになるべくしてそうなっただけ。ましてあいつも処女だった。どうして言うかなあゝって、おい。百戦錬磨を相手にしたのかよ俺。駄目だ。無理だ。整理がつかない。これは俺の居場所が消し飛んだ瞬間なんだ。しかし、これが人間なのか。これが女という生き物なのか……」隆二は中退を決意した。

後に隆二は次のように述懐する……

【あの時、結果的には中退を選択したのが間違이었다とは思う。結局、俺は逃げ出したに過ぎなかった。楽な方へと。そのことによって俺の思考は完全に閉ざされたからね。考えることを放棄したんだよ。女なんてそんな生き物なんだ。言わなければ無いと同じ。言った者が悪い。やった。前提は消し飛んじまう。ただ一つ、俺の選択が後の『あいづら』の関係修復の薬効となったであろうことだけは僅かでも期待は出来るのかもしれない。そりゃあそうだ。あのまま俺が学校に居てみる。そして俺がそれを両方に告げないでいてみる。高校二年生で体験するには金払っても体験できないようなエンターテイメント。修羅場を観ることになっていたかもしれない。まあ、これも人生経験と割り切ることが出来れば、もう少し利口になっていたかもしれないのだがね】と。

松原隆二、十七歳の冬は春の訪れを想像するには余りにも身も心も冷えすぎていた。

第三章 起動

隆二の躰は関西広域自治体(仮名)連合本部内の応接室へと通されていた。

ここで少し関西広域自治体連合について解説を入れることとしよう。

設立は2010年。関西圏の自治体(県・府・市町村)が結集し、当該エリア内において直面する様々な課題に向き合い、東京一極集中で進められてきたこれまでの様々な制度政策を分散し会員自治体をはじめとする地域の活性化に資することを目的として旗揚げされている。

取り組みの骨子としては次に示すようなものが代表的となる。

- ・防災力
- ・産業力
- ・環境保全力
- ・広域自治力
- ・文化力

隆二の計画であり考えはこうだった。

「このイスラム、ハラールという文化は必ずや近い将来日本の産業上大きなウエートを占める時代が来る。現在みられる混乱はその時代を前にした通過儀礼のひとつ、綱引きの一つの頭れと云うことでしかない。国が変わる時、変え手は常に外からやって来るものだ。そしてその外からの手が入らぬ限り国と云うものは動かないのだ。それは今までのこの国の歴史が証明している。インバウンドという観光にしても同じことが言えるだろう。邪魔くさいという声が喧しい中、日本は観光立国宣言を発し、観光立国推進基本法を發布した。これは有体に言えば外からの観光客、*Foreigner*が日本を変えたのだ。当然だろう。アイデンティティー・イデオロギー・ライフスタイルが多岐にわたるインバウンド市場に取り組むうえで、従来のマスツーリズムという業界のご都合主義が通じるわけがない。旅行会社の旗を高く掲げたその後ろ……、今時そんな旗の後ろを歩くのは、日本人と台湾人と韓国人ぐらいのものだ。旗の後ろを歩くのは上手だが、旗が無くなった途端に路頭に迷うのが関の山、自由行動となった瞬間に脚はお土産屋さんに向かうぐらいのもの。

しかし……まだ日本人は知らない。宗教と信仰を持った人々が旅に出たときどの様な行動形態をみせるのか。知っているものはまだほんの僅かだ。まして、ハラールへの取り組みに歩を進める者達はハラールしか見ていない。人間を見ていないのだ。何故、ハラールへの取り組みが必要なかと考えたとき、その答えはイスラム教だからという答えしか持っていないだろう。

俺は違う。俺はハラールを *Tourism* の構成要素の一つとしてみている。あご・あし・まくらと唄われた観光構成要素の三大資源。食事・移動・宿泊。彼らにとってはその全てがハラールであることが求められる。これまではホテルのナイトテーブル、あたり前のように置かれた聖書。しかし、これからはこれに代わってキブラマークが必要になるだろう。むしろ信仰によって部屋は変わっていても不思議はない。予約時に「信仰」を確認するリファレンスレターが出ることさえ考えられる。風呂に至っては、大浴場に裸で他人と入るなど言語道断だ。これからは部屋付きの露天風呂や部屋付きの外湯が要求されるようになる。食べるものは云うに及ばずだ。イスラムという宗教をして信仰は国が丸ごとイスラムとして成立している。社会インフラ・公共インフラ・様々な生活資源。

現に見てみるがいい。マレーシアやインドネシアから来るツーリストの鞆の中を……一度でも豚が触れた皿は使えぬとのことから、紙皿を大量に持参し、スプーンフォークは云うに及ばずコップの果てから持参する。コンビニでは紙皿や簡易式のフォークナイフが飛ぶように売れていると聞く。経験者に言われて来たのだろう。ハラルカップ麺を何十食と持参するに至っていた。この現況に鑑みるに、観光・Tourismという入り口から資源造成に取り組むことが一番の近道なのだ。行政機関。それも大きな画を書くことが出来る行政機関。ここを墮とすしか道はない」隆二はそう考えていた。

隆二の前に座ったのは関西広域自治体連合の事務方ナンバー2の「林」だった。

少々わざとらしくもあり、大袈裟な男と映った。隆二の言葉に大仰に驚いて見せる。ただ、問題意識の高さと付加価値意識、観光という切り口に対する意識は過去一番高かった。

「松原さん……松原さんは何故、イスラムをやりはじめたのですか？」

「イスラムをやりはじめた訳ではありません。イスラムはその他大勢の一つに過ぎません。この後、日本はユダヤ教から派生したコーシャをはじめヴィーガン、ベジタリアンという国際社会では普遍性を伴うコンテンツの襲来に直面することになるでしょう。そういう意味においてイスラムは切り口の一つ。寧ろ、総合的受け皿を構築する上で避けては通れないコンテンツの一つに過ぎないと考えています」

「その基づくべき根っこが観光……ツーリズムということですね。」林は天井を見上げながら思案にくれるように指を唇に当てていた。

「松原さんはお幾つですか？」きた……隆二は思った。次は出身地か……

「松原さんは東京の方ですか？」ビンゴだ……った。

「独立されるまでのお仕事は？」まあ、3大要素を一つずつ……

めんどくせえ……この通過儀礼を通らなければ仕事にならぬのである。

一つ云うのなら「はい、東京出身です」これをやった瞬間に会話は終わるということを嫌と云うほど隆二は潜り抜けてきた。

【膝を乗り出させるためには……】

「ええ、出身は小樽なんですがね、就職は東京の旅行会社でした。独立は関空の開港に合わせて大阪で独立したのですが……独立して年明け早々阪神淡路大震災。鳴かず飛ばずの3年間。地べたを舐めるような生活をしていたのですが、やっとなんとか……」

小樽という言葉の響きはどこか郷愁を抱かせるものがあるのだろう。小樽という言葉聞いて顔つきが緩まぬ者はいなかった。これは住んだことの無い観光客なればこそその目線でもあった。

【小樽の怖さを知るまいよ、どれ程排他的な地域性であるのか。外からの者に対する冷たい目は大阪の比ではない。まあ、非嫡出子とはいえ小樽の〇〇の坊ちゃんと云えば小樽で一目二目置かぬ者はいなかったのだが……】

どの道この時点で直ぐになんとかなる話ではなかった。ましてこの時は隆二をわかりやすく示す実績も無かった。隆二は此の期においも丁寧な情報発信と小さな関りを一つ一つ構築してゆくより道は無かったのである。

2013年の夏に隆二が関西広域自治体連合を訪れた後、日本は急速に宗教派生因子の一つでもあるハラルへと向けての動きが活発化しただが、この時点においてのこの存在はおよそ不確かでありブワブワな存在。寧ろ『言った者勝ち』という切り口ばかりが際立っていた。

と同時に、隆二のもとにも人が集まりはじめていた。中でも一番早くに合流したのが「影山」だった。中東のキャリア、航空会社の日本支社勤めを経て大学の教員を目指し長きの浪人生活を経て隆二の研究所に合流。出会いは2012年の学会のことだった。当時影山も大学教員としての「実績」に乏しかったこともあり、なにかそれらしい看板・タイトルが欲しかったという思いが働いての合流。隆二にしたところで、我が身を振り返った時の「重石の重さ」は明らかな勘目足らずだった。

「影山がうまい事大学教員でもなってくれたら少しは重さも増すだろう」そう考えていた。

後に影山は研究所の非常勤の役員理事を務めながら四国の大学の助教の席を射止めている。それからだろう隆二の動きにも俄然とスイッチが入り、様々な活動へとシフトする。

中でも重要視していたのが「ブログ」での活動だった。絶対に書くことをやめなかった。兎に角毎日書き続け、ハラルやムスリムフレンドリーを含めた国際社会における存在が担保された「資源」の切り口と考え方、そしてベーシックについて書き綴っていた。

例えばである。国際社会においてツーリズムのコンテンツの一つに『Religious Tourism(宗教ツーリズム)』というものがあるのだが、これは聖地巡礼に留まることなく信仰を持った者たちによるツーリズム、ある種のアイデンティティーとイデオロギー、ライフスタイルに裏打ちされた旅を総称して云うのだが、国際社会においては普遍性を保った旅の「造成」機会の一つでもあった。

ここで申し上げる「造成」とは機会提供側と理解してほしい。

常にご利用側と提供側という目線を持ち、どこから考えるべきかというのが隆二のポリシーでもあった。その Religious Tourism のサブコンテンツとして存在していたのが『ハラルツーリズム』というセグメントである。

これは、イスラム教徒の教義戒律に特化しイスラム教徒の信仰を守るための考え方であり、絶対的な基づく場所であった。名だたる国際会議の席上、OICの席上、WTOの部会会議の席上使用される言葉は「ハラルツーリズム(HALAL Tourism)」という言葉だった。

しかし、今から12年前にしてなお、ウィキペディアには(HALAL Tourism)と云う言葉は出てはいないもの、定義づけは置き去りとされていた。

ここで隆二は一つの問題点を見つけるに至る。

「ハラールツーリズムという言葉自体、ハラールという教義に基づいていることは理解できるから問題は無かる。しかし、未だに確たる定義づけを見ないということが問題でもある。センシティブさが機能しての及び腰と理解は出来るものの、これはある意味、市場拡大の損出も意味する。他方で、ムスリムフレンドリーとなった時はどうだろう」と。

「ムスリムとはイスラムという信仰の民を指す言葉ではあるが、フレンドリーとは何なのだ？ 名詞として使われることもあるが、寧ろ、形容詞・副詞としての存在感の方が高くは無いのか。言うなればイスラム教がシャリアの中でいう所の〈偶像〉に近いものではないのか。およそブワブワとした存在。フレンドリーなど彼らの信仰から行けば、偶像そのものだろう。だから国際社会においてはムスリムフレンドリーなどという言葉は使わないのだ。ムスリム旅行者の多いムスリムヘブンと云われるオーストラリアを見てみるがいい。そんな言葉は使っていない。切り口は「ムスリム専用」〈ハラールオンリー〉〈ハラールツーリズム〉だ。それが、日本での取り組みが始まったとたんにムスリムフレンドリーが横行し、さも宗教的概念、ベーシックのように都合よく使いまわされる。これは今のうちにムスリムフレンドリーを、受け入れ側のホスピタリティの一つとして定義づけしておく必要がある」と考えたのである。

日本アセアンセンターが使い始めた「ムスリムフレンドリー」ということば。残念ながら日本アセアンセンターも政府機関の一部。市民の取り組みが基本路線であるところの「宗教」の前では、この言葉がそれ以上強く打ち出せる立場は無かったのである。

動き出してはみたものの混迷はなおも続いていた。

そんな中、2013年の暮れにとある団体の担当者からの問い合わせオファーが隆二のもとに齎される。一般社団法人日本効率協会(仮名)だった。もともと経済産業省が所管する外郭組織の一つだったはずだが、組織の再編などから一般社団化していたはずである。

この組織が毎年3月に開催する「インターナショナルレストラン・ホテルコンベンション」(仮名)でのムスリムフレンドリーに関するセミナーへの登壇依頼だったのである。

明けて2014年3月、隆二は初のオフィシャルな場での「考え方」を話す機会を手にした。

2014年3月、隆二の躰は一般社団法人日本効率協会(仮名)の主催する「インターナショナルレストラン・ホテルコンベンション」(仮名)のセミナー会場壇上に在った。聴衆は170名を超えており、満席だった。隆二にとってはこれ程の聴衆を前に「アジル」ことは初体験だったのだが、この男、上がることを知らない。寧ろ、人間が増えれば増えるほど熱がこもるタイプでもある。

そもそも、旅行会社の添乗員生活が長かったこともあり、元来、人前で喋ることを苦にするタイプではない。寧ろ、5分黙っていると口が疲れてくるタイプと自ら言うほどの喋り好きではある。なにせ、ツアーに乗務していた「バスガイド」を自分のバスから下ろし、自分がマイクを握ったまんまツアーを進めたという逸話があるほどだ。平時からマイクを持つ時間が長い添乗員ではあった。

ただ、このセミナー「失敗できない！絶対に失敗できない！」という思いは強かった。それはそうだ。

スピーカーには、ハラール認証団体の代表者も招かれており、ハラールを体系的に解説し、「認証が必要」「認証の重要性」を中心に話しを進める。ただ幸いにも認証団体のスピーカーが話をするのが最初だったこともあり、隆二は相手の出方・方針、攻め手を確認することが出来たこともあり、自分の話しに必要なこと、不要なことを反映することも出来たことは幾分の余裕も持つに至れたようだ。

パワポの資料を使いレーザーポインターを操りながら話をすすめる。

主題であるところの「ムスリムフレンドリー」の持てなし側の本来あるべき基づくべき姿勢については力を入れて話しをした。しかし、隆二が最も力説したのは*「選択の機能が働く仕組みづくりの重要性」についてだった。

鰻が流通すれば中国産が〇〇県産表示とされ店頭に並ぶ。餃子が流通すれば中国製が北〇道自社製品と表示され店頭に並ぶ。日本の製造と流通現場の脆弱性に触れ、「ハラール」で同じことが起きることは国際問題化する恐れについて説いた。

国際相互認証発給団体、ローカルハラール認証発給団体、プライベートハラール取り組み事業、そしてムスリムフレンドリーの立つべき場所。

同時に、消費者が「宗教」を裏付けとした製品を知らずに手にすることへの危険性については時間を割いた。様々な宗教がある日本。当然教義教則ルールも多岐にわたる。

他の宗教のルールのもと加工されたものが摂取できない宗教があることも当たり前のことではしかなかった。もっとも問題なのは、それが隠され消費者が知らぬうちに手にする危険性こそ避けなければならぬ状況だった。

巷では、ハラールを巡って様々な声が上がっていた。それもこれもハラールを広めようとする「必要とする側からの声」であり、「商機と捉えたブローカー・コンサル系」からの声を中心だった。ある時などは「商機と捉えたブローカー・コンサル系」と某自治体の取り組みからは「ハラールを食べて健康に！」「ハラールを食べて綺麗になろう！」などとする取り組みが目につき始める始末。

隆二が最も恐れていた事実。広めるためには何でもあり。言った者勝ち。自治体からの事業予算を勝ち取った取り組みこそが是。最早、混乱ではなかった。そりゃあそうだ。先導者が意図的にそういうモノを市場に投下するのである。シツチャカメツチャカである。

「端的に申し上げるのであれば、必要とする人がおられると同じく、必要とすることが出来ない国民も居るのです。まず大切なのは、ハラールに対する正しい知識を可視化すること。そして国民が選択の権利を行使することが可能な状況を作り上げることなのです。創価学会さんにも天理教さんにも神道さんにもヒヤリングしました。みなさん異口同音にノーコメントを貫いてらっしゃいました。皆さんはこのことからどう感じられますか？」隆二の論旨は明確だった。

必要とする者たちが当たり前前に手にすることが出来、必要とせぬ者、必要と出来ぬ者たちが手にしなく

てすむ制度、そして機会造成。これこそが消費者保護の精神であり、立ち場づくりであると。

隆二のセミナーが終わると沢山の聴衆が名刺交換に隆二のもとを訪れていた。結果は上々だった。ハラル認証団体の代表のもとへは隆二から名刺交換の挨拶に向かった。

「なにか言われるかな……」隆二はそう考えていたようだが、寧ろ、隆二の立場に理解を示し「イロイロナモノがデテキティマスカラ、コウツウセイリスルノモダイジナコトデス」と声を掛けてくれた。

あらかたの名刺交換が終わると、一人の女性が隆二のもとに駆け寄ってくると名刺交換をするなり……「理事長、うちの雑誌で連載原稿書いて頂けませんか」ときた。

その雑誌とは、週間「レストランアンドホテルズ(仮名)」という、レストラン、ホテルに特化した業界向けの専門週刊誌だったのである。

隆二は、この執筆を通じ後に隆二の研究所の理事となる「米沢」との縁を結ぶことになるのであった。

隆二のもとに届けられた連載のオファーそれは「1年間」隔週のものだった。見開きページ。およそ5000文字。ショートショート1本分に値する原稿だった。

隆二は持ちうる限りの知識を込めて書いた。そして時おり理事の影山にその執筆を回していた。

「影山さん、わたしが週間レストランアンドホテルズ(仮名)の執筆しているのは知っていると思うんだけど、良かったら何本か書いてみない？ わたしも大変なのもあるのだけど、大学に出す研究成果や学外成果にもなるでしょう？ まして専門誌だから観光学の分野でもあるし、大学からの評価にも影響あるんじゃない？」いざ書きはじめてみると、隔週とはいえ5000文字の原稿を書くのは大変な作業だった。

「あゝ、書きます書きます。学校側に出す学外成果で結構悩んでいたので助かりますから」そう言う期間中の4本ほどを影山がペンを担った。

「あと何本かは、師匠や相談役にお願しておこう」これで隆二もだいぶと楽になった。

ただ、隆二は別に自分が楽になることだけを考えて振っていたわけではなかった。人間というものは外に見せる顔というものが誰しもある。その顔作りを手伝うのも自分の仕事だと考えていたのである。研究所の関係者たちは皆大学に関係した仕事を持つか、公共団体、公益団体と関係したポジションを持っていた。自慢することは無いにしろ、成果を求められることは当たり前前のポジションだった。

雑誌一本の執筆でさえ専門誌ということであれば成果は小さくは無かったのである。

ただ隆二。そういう神経を使えば使うほど自分の高校中退という事実を呪う思いが支配的になるのだった。【学校行けばよかったもう一度。高卒資格検定試験だけでもとって大学行けばよかった。大学行ってたら俺はどうなっていただろう。多分弁護士か政治家にでも挑戦していたのかもしれない】と。

一般社団法人日本効率協会(仮名)の主催する「インターナショナルレストラン・ホテルコンベンション」でのセミナーと執筆活動以来、隆二のもとには企業・公共団体からの講演依頼が次々に入ってきていた。隆二はこれもスケジュールが合うようであればと、影山をはじめとする関係者に落していった。

そんな中、隆二は米沢という男と会うことになる。

切っ掛けは隆二が執筆していた週間レストランアンドホテルズの記事の中で見たホテルサイドの取り組みが目を引いたのである。

「これは！ このホテルは早い！ 本来のあるべき姿を具体的に形にしている。一度話を聞いてみたい！ 原稿を書く参考にもなるだろう」と考えたのである。

米沢は大阪に本部・本社を置く老舗民族系ホテルの沖縄支社・ホテルの総支配人を務めていた。その後隆二からの電話では何度か話しを、まあ、取材のような形で話しを聞かせてもらっていたのだが、ある時の会話で、米沢が帰阪するという話しを聞いた際に会う約束を取り付けていた。

数カ月後のこと。合うのはこの日が初めてだった。

隆二は「流石」という言葉を反芻していた。

【流石名門ホテルの総支配人。伸びた背筋からは人間の素地。出来の違いが滲みだしていた。こんなものは太刀打ちできない。人間としての出来はもちろんだが、懐の広さ、誠実さ、真面目さ。そして質実剛健、泰然自若とした構え。これが一流ホテルの総支配人。こんな人に手伝ってもらえたら】そう考えていた。幸いというべきか、米沢は定年を間近に控えていた。

「この後、〇〇大学へ行くことは決まっていますが、時間も結構自由になりそうなので空いた時間は趣味のゴルフでもして遊ぼうかと……」

「米沢さん、空いた時間でいいのでうちの研究所の仕事を手伝って頂けませんか？ 主にセミナーなどの講演活動とか、クライアントへのお手伝い、レクチャーが中心となると思います。そんなに沢山はありませんが、外部活動実績として書けるぐらいのものにはなると思います」

米沢が隆二の研究所に合流した瞬間だった。

2014年、2015年の2年間はハラルルにとっても難しい時期となったことは記しておかなければならないだろう。

隆二のもとへも「相談」が格に増えた時期でもあった。

最も多かった相談が「ハラルル認証はとったが輸出できない。これは詐欺ではないのか」というものだった。起るべくして起きた懸案である。

隆二は考えた。自分のところで相談を受けるメリットは何処にもない。まして、宗教で糊口を湿らす行為はせずを信条としている隆二にとって、相談を受けるメリットは僅かながらにも存在していなかった。挙句、この手の相談をしてくる者は、概して自分の考えを纏めて如何に劣悪な認証であり如何にいい加減な認証であるのかを判ってほしく、「詐欺」という確信的裏付けを欲しがっていたからに過ぎないのである。

この時点で、詐欺認証として論われていたのは2団体だった。

一つは日本効率協会のセミナースピーカーもつとめていた団体。もう一つはマレーシア系の認証団体だった。

「100万円以上のお金を払ってサファイアチケットを取得したのですが、結局、荷出しはしたものの荷受けはされず差し戻し。これはもう詐欺ですよね。」

「弁護士さんとは相談されましたか？」 社長、申し訳ないのですが、そもそも相談するところを間違えておられますね。もしも私にこれは詐欺ですよという言葉が期待していらっしゃったのなら、私はそういうことは言いませんよ。まして萌芽市場ですから何が原因となって輸入指し止めになったかは先方からのレターを確認しなければわからないことです。まずは、詐欺ありきではなく、なぜこういう扱いになったか、冷静に経緯分析する必要がありますね。私は社長からの相談をお受けするのに謝金のお話しはしておりませんね。儲かったと思ってください。知恵と知識をもらうのに只で受け取れる知恵も知識も無いのです。ご自分で勉強して選んだハラール認証団体。相手任せにするのではなく、自分でももう少し勉強しましょうよ。思い通りにならなければ、なんでも詐欺は短絡的過ぎるでしょう」これが隆二のスタンスだった。

まあ、隆二にするのなら「詐欺・詐害行為」に及ぶ案件でもあったことから、コンサル契約をしていないところから謝金を受け取ることは後に「非弁行為」に及ぶ可能性も無くは無かった。結果、隆二はこの手の相談は凡て無料で受けていた。

金にもならない相談に時間を割いて話しを聞く理由が何処にあったのだろう。

- ・現場の事業者の声を生で聴ける
- ・認証団体の脆弱性を生で確認できる
- ・事業現場・認証現場の現実を生で確認できる

これは大きかった。どうしても視野狭窄に陥りがちな案件である。現場で起きている事実の収集という意味においても各方面から聞ける話のメリットは小さくは無かった。

同時に隆二はハラール認証団体に対しても情報をフィードバックすることに心砕いた。

「あゝ、会長。大阪の国際ですが、今、お時間大丈夫ですか？ いえ、実は会長のところへ出された認証を受けたという事業者の方がいらっしゃいますね。はい。まあ、名前はいいでしよう。要は、輸出が出来る認証ではない。これは詐欺だというわけです。まず、私に経緯を説明される必要はありません。どうか、先方様と丁寧なやりとりだけをして差し上げてください。こういう問題が躓きの種となることは、国益の点からみても大いなる損失を招きかねませんから。まあまあ萌芽ですからね。先方のポートサイドも混乱していても不思議はありませんよ。ただ事業者にするなら横持行って来い。ダブルになりますから、更に売れないとなると損出丸抱えですからね」

後に分かった話ともなるのだが、この会長さんのところの認証。実はローカルハラール認証であり、輸出に適應できる認証ではなかったのである。結局、モスク系宗教団体系統の認証機関を繋ぎ、無事輸出

できるようになったというからバカバカしい話しではある。そういう意味においては、認証団体からも随分感謝されたのであった。

「ハラール認証を取得したいのだけど、どこがいいか分からない。まずは話しを聞きたいのですが」「ご紹介申し上げることは各かではありませんが、無料で話しを聞けるとは考えないでください。日本の商慣習、営業の考え方は通用しません。東京からの新幹線往復代、90分の説明で60000円、凡そ10万円の出費は覚悟してください。それでもよろしければお繋ぎいたしましたしょう」

その度に、認証団体は隆二に繋ぎ謝金を払おうとしたのだが、隆二は頑なに固辞した。ハラールは信仰を持つ者の財産。朝に柏手2つ打ち、夜に蝋燭線香を手向ける人間の財ではないと。今のわたしにとつては「喋られなくなる」ことが一番のマイナス。顔色を窺いながら言葉選ぶことほど愚かしいことは無い。寧ろ、恩は売ってナンボ。金とは縁を遠ざけるべし。大事な場面。ここからが正念場と腹を括るのであった。

が、2015年に入り1月早々のこと。日本を震撼させる事件が齎されたのである。それがイスラム系過激派組織による日本人ジャーナリストと民間軍事会社代表の「拉致」事件であった。この事件を契機として、日本の中のハラール熱は一時的に潮が引くように静かになった。拉致後過激派組織は2億ドルの身代金支払いを日本側に要求。4日以内にこれが受け入れられない場合は処刑すると通告してきていた。民間、政府の別なくあらゆる方面から交渉を試みたようだが、残念ながら1月24日、2月の1日と二人の日本人は相次いで命を奪われるに至っている。また、インターネットで処刑の実況を行うという卑劣な蛮行に対し、国際社会の世論の高まりは熱を帯び国連安全保障理事会も非難声明を出すなど、気運の高まりをみせたのだった。

この後、半年間ほどはテレビや新聞を通じて「イスラム教のハラール」という言葉を目にする事無き時期が続いたのだが、隆二は「どの道痴れたところ。一時的なバイアスがかかっているだけの話しである。そういう国なのだ、日本という国は」と冷めた目で眺めていたのであった。

一方で、2015年に入ると「受け入れ側」のハラールでありムスリムフレンドリーへの取り組みもスピード感が伴って来ていた。飲食施設をはじめとする各方面では「ムスリムフレンドリーメニュー」為るものが登場し、ムスリムインバウンド市場への打ち出しも進んでいた。

そんな中、ホテル日本東京(仮名)が2015年4月28日に一つのプレスリリースを打ち上げた。

日本政府が平成25年度より東南アジア・訪日100万人プランを立ち上げ、観光局と連携してインバウンドの中でも特にマレーシアやインドネシアからの旅行者の受け入れを強化している背景を踏まえ、ホテル日本東京はムスリムのお客様にも安心してご利用いただけるようハラール認証団体が策定したムスリムフレンドリー基準をクリアし、ハラールメニューの認証を取得いたしました。都内のホテルへのハ

ルール認証発行、ならびにハラールメニューの認証発行は今回が初となります」と。

いよいよ認証団体も「ムスリムフレンドリー」をお商売のネタとして積極的に進める方向へのシフトを見た時期だった。

さて、国際社会で云われるところの一般的な「ハラールレストラン」は本来には非常に厳格なルールのもと認証をとることが定められている。

例えば、アルコールを供するレストランはこの時点でハラールレストランの認証はとれない。であることから、これまで海外においては「レストラン」を作る時点から「ハラール化」「ハラール認証対象施設」という取り組みが一般的であった。

だが、それを言っているは為るものもならないのである。結果、認証機関、認証団体は「ムスリムフレンドリー認証」と「ハラールメニュー認証」というブワブワなものを一つの鍋で煮込むことにしたのであった。

「これしかないだろう。日本でハラールをやるとすればこれしかあるまい。まあ、認証機関、認証団体としても中庸の徳という苦し紛れの墮とし処ということではしかあるまいが」

イスラム過激派組織による日本人拉致殺害以降、一次的な模様眺めを経たのち集客事業現場においては一気に各種認証にむけた取り組みが加速し始めたのであった。

さて、ここまで2008年以来2015年までの宗教派生因子である「ハラール」の変遷を、国、社会、信仰を持つ者達所謂「制度者」達の視点から、それぞれ事実にして時系列に忠実に追いかけてみたわけだが、ここまでのまとめとして最後に一つ付け足しておかなければならないことがある。日本が政教分離の国でありながら、ハラールという存在に「イン」の制度設計に取り組まねばならなかった最大の理由。

それが「2020東京オリンピック」招致に向けての資源造成という側面だったのである。

2013年9月7日。アルゼンチンはブエノスアイレスでのIOC総会の席上において、2020年のオリンピック開催地が「東京」に決まったことは記憶にある方もおられるだろう。

さて日本はこの招致に向けて絶対に整えなければならぬ資源造成とロジックの一つに早くから具体的に直面していた。アセアン友好40周年事業をはじめ様々な礼賛の言葉は並ぶのだが、結論を書かせて頂くなら、日本でオリンピックを開催する上で最も大きなネックとして存在していたのはCODEXへの準拠姿勢を具体的に作り上げることだった。

※ CODEX 国際食品規格委員会 食品、食品生産、食品ラベル、および食品の安全性に関し国連食糧農業機関(FAO)と世界保健機関(WHO)によって発行された、国際的に認められた基準、実施規範

ガイドライン、およびその他の推奨事項をまとめたものを指す。

さて、1997年 CODEX の席上において、HALALとローシャが信仰派生に由来する遵守すべき実施基準であり実施規範とすべきとの採択を受けるに至っている。即ち、オリンピックをはじめとする国際大会等の国際的なイベントにおいての実施環境、受け入れ環境の造成において配慮すべき国際基準として定められた画期的瞬間を迎えている。

これに至る経緯としては1996年のアトランタオリンピックが上げられるのだが、この年のオリンピックを契機として「イスラム社会」がオリンピックへの参加を急速に深めることになるのだが、残念ながら、アトランタオリンピックの時点では、ハラールをはじめとする資源造成は絶対的に足りていない状態だった。結果、イスラム社会の選手団が口にするのできる「ハラール資源」がならず、適正なパフォーマンスを発揮できなかったことから、翌年の1997年 CODEX の席上において国際規格・基準として採択されるに至ったのである。

日本がこの動きに呼応する形になったのが2008年の福田政権からであるから、凡そ10年以上の遅れを見ているわけだ。従い、日本がオリンピックを誘致し、成功させるためにはスポーツの成績以前に「開催環境と資源の造成」という確かなロジックを身に付ける必要があった。

結果、日本は「アウトバウンド」まずは輸出市場向けのハラールロジックへの取り組みを加速させ、国際社会のガバナンスに耐え得る「認証システム」を手にする方向へのシフトを急いだのである。

結果、日本のハラール認証団体は2015年以降、急速に国際社会で通用する「正規認証機関」を国内に増やすに至っている。

隆二は早くからこれに着目し、最も早くから東京都、そして日本オリンピック委員会、東京オリンピック運営事務局等に2013年早々にレターとリポートを直接送りつけている。

「観光でありツーリズムはコンテンツ産業であることは確かなことなのだが、しかし、これまでの日本のマスツーリズムの姿勢はコンテンツ提供サイドからみた都合に市場が右往左往させられてきた。しかし、これからのツーリズムはそれでは通用しない。マスツーリズムという制度側の思惑は機能しないインディビジュアルなツーリズムが時代の趨勢を築く。それだけ、アイデンティティー、イデオロギー、ライフスタイルの多様性が市場に溢れることになる。観光であり、ツーリズムに携わる者は、各種コンテンツにどれほど多くの多様性を紡ぎあげることが出来るか。ここが勝負どころとなる」隆二はそう覚悟を新たにするのであった。

第四章 抜擢

2017年の初夏、ある日の昼下がり。隆二のもと一本の電話が鳴る。

「もしもし、ご無沙汰しております。関西広域自治体連合の林でございます」慇懃ではあるものの自信

が漲った声と声量。

隆二は正直なところ驚いた。2013年に初めてアポを取って以来、この間に再訪しハラールを取り巻く国内の進捗に関して話しをしたのは2015年の一度切り。行政全体の取り組みの方向性として、ハラールをはじめとする国際社会における多様なライフスタイルとアイデンティティーとイデオロギーへの取り組みも簡単には行かないか。ましてや「関西広域」となれば、それぞれに台所をはじめとする事情も一筋縄では行かない。隆二はそう考えていた。

そんな時分の林からの電話である。

「実は、折り入ってご相談があるのですが、一度、お時間頂戴しお話しできないでしょうか」というものだった。

「いえいえ、ご無沙汰してしまっているのはこちらも一緒です。もちろん、お時間を頂きたいのはこちらも同じことではございますが、どうされました？ 急と云えば急なお話のようですが……」

「ご相談の詳細はお会いした時にお話し申し上げるのですが、実は……」

林はこの時点で、関西広域自治体連合・事務方トップに躍進を果たしていた。その林が抜擢されたのが、2017年に国土交通省・観光庁から日本版DMO（ディステイネーション・マネージメント・オーガニゼーション）の認証組織となった「関西広域観光本部」の事務方トップの座だった。これまでインバウンドにおける事業は、観光庁から自治体の観光行政部門への発信と配信が中心だったのだが、2015年の日本版DMO設置運用計画発布以降、国内に、より専門性の高い観光事業部門・集客事業部門を設置することによる、国内の観光資源を効率的に海外市場に対しアプローチすることを目的として設立されていた組織だったのである。

「そういうわけで、是非、初年度事業の取り組みとしてハラールをはじめとする多様な国際社会のルールの切り口の可視化を通じ、会員自治体・会員観光関連事業者の取り組みの啓もう啓発にご助力願いたいと考えております。つきましてはご予定など如何でしょうか」というものだった。

隆二にとってはついに「行政」と近いところでの取り組みともなり、願ってもない申し出だった。

「結局、こういうことだろう。わたしがもしもここまでハラールを飯の種として、信仰と宗教を糊口を凌ぐ手段としていたなら、こういう声は掛かっていないだろう。大業を成さんとするとき、目先の利は捨てねばならずということなのだろう」

数日後からはじまった関西広域観光本部との遣り取りは実際のところ簡単ではなかった。隆二にとって、擦り合わせで尤も苦勞したのは「ポジション取り」の違いだった。まず、このポジション取り、即ち「立ち位置」の違いを理解してもらうことが重要だった。

「ハラール」というものがホットであるようだと思知すれば、ハラールを広めればよいのではないか。ハラールの切り口を構築し、会員自治体・会員観光関連事業者で取り組みばよいのではないか。そう考える者が多かった。残念ながらゼロを知らうとしない。必要としない人たちが多かった。

「出向組」の考える「功」の側面をクローズアップさせる考え方だった。まして、立ち上がったばかりの組織。功を急ぐ気持ちも分からぬではないが、隆二は会員自治体・会員観光関連事業者という「対象市場」へのアプローチを考える前に、新たに「身内」となった事業運営部隊の理解を深めなければならぬという大仕事からこなさねばならなかったのである。

時間が限られた中で、立ち位置の考え方を理解してもらうことは簡単ではなかった。即席チームとはいえ、それぞれが超一流会社からの出向組。

まして、彼らの道すがらの仕事は「制度設計」からは距離を置き、対象市場、対象事業者に実利を齎すことが正着という実業畑ならではの考え方に支えられていた。

「分らぬではない。しかし、それではダメなのだ。必要とする者達だけの声を取り上げられる社会は、これまで欧米が辿ってきた過ちを繰り返すことになる。まして、日本のように政教分離が錦の御旗として存在する国にあっては、必要とすることのできない人々、必要としない人々、様々なライフスタイルとイデオロギー、アイデンティティーを置き去りにすることは、早晚、遺恨があらぬ形で噴出する。一つの宗教に取り組み利便性を考えるのであれば、凡ての宗教信仰であり、ライフスタイルの凡てを置き去りにせぬ制度の有り様。これこそが是非々の制度の有り様なのだ。同時にオリンピックを数年後に控えたこのタイミングで取り組む以上、国際社会に流通、汎用可能な資源造成という考え方は置き去りに出来ない。オリンピックというものは、一つの宗教の容態であり、領土を持たない主権国家そのものであることをこの国の人間で知る者は多くは無い。そういう存在に、日本は軒先を貸すのである。先様のルールを有難がりながら、軒先貸して母屋とられるか……絶対に避けなければならぬ。他のDMOが同じことを考えたとしても、わたしが関与した以上、本来あるべき制度上の倫理観だけは失うわけにはゆかない」隆二はそう考えていた。

隆二の挑戦は具体的動きを伴い動き始めた。初年度、1年間で10カ所の関連セミナー。『インバウンド市場対策から考えたハラルをはじめとする多様なルールへの取り組み』これが取り組みのタイトルとなった。関西広域観光本部の「エンジン」は関西広域自治体連合であることも起因したのだろう。国の行政機関、観光庁へのアプローチは力強いものがあった。

隆二が、関西広域観光本部との事業委託受託契約を締結すると同時に、隆二は観光庁から「専門家」として認定を受けていた。「広域観光周遊ルート専門家」というのがそのタイトルだった。ついに隆二は目指す場所の一つに手足を掛けたのであった。

■
隆二のこの動きは隆二の研究所に所属する影山や米沢にも少なからずの良い影響を与えることとなった。隆二が国土交通省・観光庁事業の専門家に就任して程なく、今度は隆二の推薦により影山と米沢が専門家に就任した。影山にしろ米沢にしろ大学の観光学部系の教授職にあったことから、観光庁の「専門家」という公職タイトルがつくことは邪魔にならうはずがなく、履歴書に書く上においては「箔」の一つと

して邪魔になるものではなかった。結局2017年に関西広域観光光本部から隆二が推薦を受けて以降、隆二の研究所からは5名の専門家を輩出するに至っており、これも一重に林の元の一足達の働きがあったればこそと隆二は感謝を重ねていたであろうことは想像に難くない。

その一方で林との関係は良好ではあったものの、時おり見せる林の言動の粗さと言行の不一致観に隆二は疑問も覚え始めていた。

「ハラルは必要ない」と云ってみたと思えば、日本最高学府、西の名門、京都の国立大学経営管理大学院の教授と近くなった折には「日本はハラルをやらねばならぬ」と宗旨替えとも思える言葉を連発した。

まあ、そもそも部下に対する対応姿勢からは昭和最後の忘れ形見とも思える今でいう処の「パワハラ気質」が見え隠れしていたことから隆二にしても「適切な距離感を測りつつ」という位置取りとなっていたのであるが。

まあ、この辺の気質というものは、昭和の半ば生まれにとっては当時としては珍しいものではなかったものの、平成半ば以降社会においては「けしからん」存在となっていた。

そんな折、2018年の2月のこと。関西広域観光光本部の初年度事業が最終盤を迎えた頃。林から隆二のもとに連絡が入る。

「松原さん、たまに飯でも行きましようよ」と。

「これはこれは、まあ、なんとかわたしのお役目もここまで漕ぎ着けましたからね。喜んでお供しますよ。いつにしましようか？」

「明日の夜なんかどうでしょうか？」

「急ですねえ〜(笑)」この時点で隆二は何か話があるのであることは察知していた。案の定、林の口がその都合に及びはじめた。

「実は、一緒に食事をしたい人がいますね……、京都の国立大学の大学院の教授で田所先生も一緒にしたいんですよ。それで、田所先生がハラルに大変興味を持っておられて、是非一度、松原さんとの席を設けて欲しいとおっしゃっておられて……、どうでしょうか、大丈夫ですか？ あと大学の関係者の皆さんや経営管理大学院の外部関係機関の方たちなんかも一緒なんです……」

「林さん、人が悪いねえ〜これはもう仕上がっている話なんですよ？ 多分、嫌です〜とは云えないセツティングですよ〜」

「やっぱバレますか？ ただね松原さん。今回の件は関西広域観光光本部とは別の流れとして考えて欲しいのです。ですから、わたしの方から事前情報を松原さんにはこれ以上申し上げることはしません。あとは明日の夜、田所先生の話を聞いて判断してほしいのです……」

【仕事の匂いだ……それも小さくは無い仕事の匂いがある。北海道の三流高校の中退野郎が覚え目出度き

京都の国立大学……の教授とお食事か。しかし、産学……そう。これにあとは官が絡めば日本のハラールをはじめとする宗教と信仰派生因子の制度設計は現実味をみるだろう。しかし、京都の国立大学の大学院の教授が、ハラールで何をやるうというのだろう。どういう背景を抱えているというのだろう。どの道、役者が出揃うまではもう一巡、もう二巡の模様眺めが必要なのか。もう一つ気になるのは林の動きだ。何故、林はここで距離をとろうとするのか……「関り」から距離を置こうとするのか。本来的には林にとつては最も欲しい繋がり、関りではないのか？ 一つだけ言えるのは、林のポジションについてだろう。林はほぼ「官」だ。従って、金の匂いのする「産」絡みの案件からは距離を置かなければならぬ。まして、ハラールを稼ぎ口にし、宗教授派生市場から利益を誘導する仕組みに関わることは林の立場上は出来まい。そう考えると、林の距離を置こうとする理由も腑に落ちる。田所教授から直接話を聞いてくれということも腑に落ちる……仕事の匂い……確かに匂いはする。過去一番実現性の高い匂いと云ってもいいだろう。しかし、俺の考える「仕事」とイコールであるかとなれば疑問ではあるのだが……】

隆二は直ぐに影山と中沢の両名、そして岡本へと連絡をしことの仔細を共有した。

影山にしろ中沢にしろ大学で教鞭を執る身である。京都の国立大学・経営管理大学院という存在がどの程度のネームバリューであるか知らぬ訳はなかった。口にしなかつたが「でかした！ ここが胸突き八丁、理事長何とかうまくやってくれ」と思ったであろうことはその反応から容易に受け取ることが出来た。

岡本……だが。この男は2013年の「やっちゃった君」だったのだが、2017年に隆二が研究所で預かることにしたのであった。

「一人でやっているから間違いがおきる。一人でやっているから根っこ、ゼロ起点を見つけないことが出来ない。やろうとしていることには間違いはない。ただ、根っこが脆弱なだけなのだ。それはゼロを知らぬから脆弱となるのである」とそういう思いから本人に直接働きかけ、研究員として預かりの身としていた。

当時、トラブルをおこし怒り心頭だったムスリムの皆さんも「松原のところなら安心できるだろう」と寛大に見守って頂くことが出来ていた。

影山も中沢も随分心配はしていたようではある。

事あるたびに「彼、大丈夫ですか？」と隆二に声を掛けていた。

さて、林から連絡を受けた食事会当日のこと。

場所は大阪の北新地西向こうの割烹料理屋だった。座って「頂きます」を発声すると万札が飛び出す覚悟を必要とする飯屋である。お姉ちゃんと一緒にあればG万覚悟の料理屋である。

そこに集まったのはなんと9名。

それは差乍ら「決起大会」であり、キックオフのそれであったのである。

【恐ろしい。。大人の世界というものは、これほどまでに恐ろしいものなのか……】隆二は今更ながらに自分の置かれたポジションに震えたのであった。

9名としたが、実際は10名だったのである。

【出たよ、林さん〜 このタイミングであんた、自分だけ帰るってなんなのさ〜おいおい、ひとにお座敷掛けておいてあとは宜しくって、今時こんな人間いたもんかね】そう。林が開始早々で退座したのであった。右手を顔の前に掲げて「ごめん！ あとよろしく！」ってな按配だった。

【結局、訳ありの集まり。既に仕上がった座。顔合わせでありキックオフのそれでありそれぞれの役割確認の体。で……田所先生、わたしに何をやらせようというのですか。まあ、そのところを確認してから判断しても遅くは無いか……】隆二はそう考えていた。

ポジションの落とし処をどうつければよいか始末のつけように悩む女性経営者1名

京都の国立大学経営管理大学院田所研究室の事務方・秘書2名

マレーシアのマラヤ大学の教授2名

田所教授

米田教授

田所研究室の外部事業移管先代表

松原隆二

隆二にとって最も意味の解らない存在は女性経営者とマラヤ大学の2人の教授たちだった。これは仕様ががない。何の説明もないのであるからして、意味の落ち着けようは無かった。あとは子飼いの優秀な取り巻きとして理解もできた。

【マラヤ大学の教授2人がキーパーソンか。田所先生や林が画策した今回のプロジェクトのカギはこの二人が握るのだろうかさて、田所先生。この場をどう説明してくれるのか】

座は当たり前のように田所先生の発声による「乾杯挨拶と乾杯」

この時点に至って尚、田所先生は集まりの目的を言わないのである。

もちろん隆二は参加者凡てと名刺交換はしていた。ただし、隆二も昨日今日社会に出たばかりのおぼこいタイプではない。一切、集まりの目的を自ら聞くことなどはしなかった。

顔合わせの体。林の名代として末席を埋めたに過ぎぬの体を堅持。

マラヤ大学の教授と名刺交換した時点で判ったことだが、JAKIMをはじめHDCとの関係が深い立場にある一足達。2名ともである。

【さて、この2人がこの席を埋めている理由だが……まあ、帰る際には見えてくるのだろうか】

「松原さん、今日は急にお呼びたてして申し訳なかったですね。場所も場所ですし、お酒も入っていませんからあまり立ち入ったお話も出来ないで、どうでしょう、日を改めて私どもの研究室にご足労願えませんでしょうか」松原さんの智慧やお手をお借りしたいことが少なくないのです。是非一度近いところでお時間頂けないでしょうか」宴もたけなわボチボチおひらきかと隆二が感じていたところ、田所からそう声が掛かった。

隆二から何の質問もないことに自ら動いた格好だろう。

懇懇ではあるものの隆二も物を知らぬ子供ではない。

「先生のご都合から仰ってください。わたしの都合は概ね前後可能な案件ばかりですから」と。

「そう言ってください、有り難うございます。では……………」

さて、田所が精算を係に告げると伝票が田所研究室の外部事業移管先代表の元に届けられた。

隆二は【ここが正念場。大事なところ。この考え方、処し方で今日の集まりの意味合いは大凡わかる……】
そう合点していた。

「女性が3名いますから……女性は一人5千円ずつお願いします。マラヤ大学の先生たちはご馳走申し上げるといふことで宜しいですね？ 先生？ はい。ではとは男性4人で一人あたり1万2千円ずつで……足りない分は研究室からということ……先生、宜しくお願いします」

【いやいや、まてまて、俺はウーロン茶二杯だぜ。食べたものは他人様と同等。マラヤの先生達にメシおごったり、研究室のお姉ちゃんやおばちゃんにメシおごる義理なんかねえんですけど。はやしいく貴様、恨むぞく今日のこと。まあ林の元、関西広域観光本部へのお礼の付け届けをしたと思えば安上がり。と云えば安上がりなのだが。それと今日の目的もマラヤ大学の先生たちへの持て成し方で概ね分かった。なんのプロジェクトを計画しているかは知らぬが、結局、マラヤ大学ありきということか？ TAKIとHDCがらみということは、マレーシア政府絡みと云っても過言ではあるまい。問題は、日本政府系のコンサルティングファームの連中が顔を見せていない所だろう。国の制度政策課題としての事業であれば、必ずコンサルティングファームの人間も同席しているはずだ。同時にメンツももう少しオフィシャルに振れる。幾分かジュアルなのだ。まあ、研究室での話を聞いてみなくば判断は出来ぬということなのだろう……しかし、せめてメシ代と交通費ぐらいの駄賃にせにや、なんのこっちゃか分らぬわなあ】
萬年貧乏研究所の泣き所か。隆二にしたところで、こんな美味くもないメシ代に1万2千円のお足を払うことは2月の懐を一層寒々しいものとしたのである。

隆二の躰は2月の京都の底冷えする中を田所研究室に向けて歩みを進めていた。

「あの駅前で飲んだストロングコーヒーが悪かったか……やたらとムネヤケがする」下っ腹から突き上げるようなムネヤケを抱え、躰を幾分折り曲げながら大学へと向かう。

「これが京都、いや、日本の名門国立大学の学びやか……それにしても、やたらとポスターやら看板が目立つなあ……寮をどうせよというのか？」この頃、百年の歴史を持つ「高田寮」の存続を巡り大学側と学生・自治会側が退去と保存を巡っての応酬が繰り広げられていたのである。

隆二にするのであれば門外漢である。

「学校側の設備だろう。寮に対してイデオロギーやアイデンティティーを振りかざすというのも理解できぬというのは、学校生活に愛着を持たなかった俺なればこそなのだろうか。俺にするのであれば、学校の校門前を小汚いポスターやプラカードを張り巡らす学生側の倫理観と美意識に疑問を持つのだが……」

それにしても、こんな立派な大学……通ってみたかったものだ」一人ぶつぶつと呟きながら田所研究室を目指したのだった。

集まったメンツは先日の「料理屋」に集ったメンツそのままであった。

マラヤ大学の教授2名も在籍していた。

ブレインストーミング。ミーティングではない。完全なブレインストーミングの会議の体だった。

田所からの説明からはじまったのだが…… 掻い摘んで言う処、経営管理大学院・田所研究室が主体となり「ハラルルセミナー」を行うというものであった。

主たるセミナー講師はマラヤ大学の二人の教授、そして米田教授等々であった。

司会進行は田所教授。

そしてシンポジウム。

開催地は東京・日本橋。日時も決まっていた。およそ二カ月後だった。

それも、二日に渡ってのセミナーだった。

その後、メンツは2チームに別れそれぞれの役割に応じたミーティングを行うことになったのだが、隆二はここで大切なことを口にするタイミングを窺っていたのである。

「謝金」である。

メンツが2チームに分かれることは良いだろう。割り振りされる仕事も良いだろう。問題は「謝金」である。これが決まらぬことには隆二の立場としては動きようがない。

【さて……これは、林に動いてもらうことが正着だろう。林から来た仕事である。どの道、林はこの仕事の枠外として経営管理大学院との関りは別につけてはいるはずだ。関西広域観光本部として経営管理大学院の仕事として関わることは出来ないとしても、後に、経営管理大学院の特任講師であり、特任教授等の立場で関西広域観光本部の事業であり、インバウンドをはじめとする取り組み、そしてDMOという国の制度事業の講義を受け持つことは可能だろう。いや、寧ろ林の狙いは最初からそこにあったと見ておくべきだろう。問題は、田所先生だろう。ハラルルのセミナーを目的とするだけで、マラヤ大学から二人の教授を呼ぶだろうか……判らぬが、セミナーだけであれば林が距離を置く必要は無かったはずなのだ。林が距離を置かざるを得ない状況となると、商売ツギとなるだろう……さて、では、何を商売のネタとするつもりでいるのか……真坂、ハラルル認証に手を出す気ではあるまいな。まあ、先ずは林に謝金の話しをつけてもらってからではあろうなあ〜】

この頃の隆二のセミナー講師としての謝金は90分、一本十五万円が請求金額のアベレージとなっていた。しかし、観光庁をはじめとする行政絡みの謝金に関してはこの金額は出なかった。概ね一本七〜八万円交通費込みというのが相場だった。

従って、隆二にするのであればここが「底値」である。

まして、この時点においては「拘束時間」が決まっていなかったことから隆二にしても値決めの難しさを抱えていたのである。

隆二にするのなら、そもそもこの国は「話しを聞かせてもらう」「教えてもらう」ということに金を出し渋るという性質が強く窺える国であると隆二は考えていた。夜も日も寝ずに勉強し、様々な関係を構築し、様々な情報をベースとして構築したロジック。それをただで教えてもらおうとする人間、ビジネスマンが多すぎると考えていた。そういう考え方がベースにあるから「パクリ」「盗用」「盗作」が無くならない。

小説を書かせたところで、明らかな盗作なども目にする有様。書くことなど辞めてしまおうが宜しかろう。そう思っていた。

二つのチームに別れてミーティングが始まったのだが、隆二は外部事業移管先代表者と研究室の事務方、そして秘書によるチームに配された。これは寧ろ当然のこととして隆二も理解していたのである。

最初、田所がこのチームの目的と進め方について話しをはじめたのだった。

「松原さん、今度のセミナー参加費を有料でやりたいのですが……どうでしょうか」と田所からの言葉が飛んだ。

「田所先生、どういう参加者を集められるおつもりですか？ それによって考え方は変わって来ると思いますが。まして二日に渡っての開催。時間と費用のロスを考えたとき、参加費を払ってまで参加を考えられる立場の者は限定的と考えた方が良いでしょう。それから、セミナーへの参加者の集め方ですが、先生はどの様にお考えなのでしょう」隆二は田所に向け忌憚のないところを述べた。

「その参加者集めに松原さんの力をお借りしたいのです」ときた。
このチームへの配属を見た時点で隆二にするのであれば大凡の想像はついた。前捌き部隊。そこは絶対に必要である。人集め、ボリューム出しが出来る人間は必ず必要なのだ。

「先生、そういうお話であれば、余計に参加費を徴収するという仕組みは難しくなるでしょうし、その場合はわたしはお役には立てないでしょう。たとえ無料であっても二日間の時間をセミナーで割ける人間というのは、具体的にハラールへの取り組みを考えている人間であり、商業施設でのハラールへの取り組みを考えている人間に限定されてくるでしょう」と伝えた。

「わかりました、では、次のミーティングまでにその辺の結論を出しておくことにしましょう」と田所は隆二に告げたのである。

【おいおいこのお爺ちゃん、どこまで俺をただで動かそうとするのかえ。俺ヨク我慢だガマン。お相手は天下の京都の国立大学。俺にしたって絡めりゃ小さくない実績ともなる。関係各位のみんなの力を借りて、参加者を盛り上げるぐらいのことはやろうじゃない。協力してくれた人たちには別の場面で返すことを考えよう。謝金のことは林経由で話しをつけさせようじゃないか】

翌日、隆二は関西広域観光本部・林の元に電話を入れた。

「いや、松原さん先日は大変失礼いたしました。お任せしたまま席を外してしまいました……」

「本当ですよ(笑) どうですか林さん、今日の昼でもランチをしませんか？ 先日の穴埋めに」

「いいですなあ、今日は大丈夫です。何を喰いますか？」

「美味い蕎麦がいいですね〜」隆二がそう言うことやあって……
「わかりました。良い蕎麦屋がありますからそこへご案内しましょう」となった。

【これで取り敢えず言うべき舞台は整った。まあ、金額的なことを俺から言うことは止めておこう。林にしたところで、関西広域観光本部の前例がある以上、バカバカしい金額を伝えることはあるまい。いや、寧ろ林は金額を口にするには無いだろう。精々が早いうちに謝金の金額を決めてやってくれというところくらいしか言えまい】隆二はそう考えた。

その昼、隆二と林は中之島の蕎麦屋のテーブルについていた。

「松原さん、田所先生の研究室でのミーティングに参加したんですね〜先生からミーティングのフィードバックが上がってきていましたよ〜」

「そうですか〜しかし、先生も中々難しい注文をぶら提げて来られましたね……」

「ほう……というと……」

「参加費を有料でやりたいと仰っておられました〜」

「有料？それは……出来るんですか？ 松原さん……」

「いえ、だからわたしはお伝えしましたよ。有料であれば私がお手伝いできることは限られますねと。ご存知のように、セミナーは二日に渡って行われて、更に有料ということであれば、参加できる人間は多くは無いですよ。わたしの関係者にしたところで、そうなるに参加できる人間はゼロに近いものとなるでしょう」

「でしようなあ〜」

「それと、林さん。申し上げにくいのですが、先生の方から謝金等の話しが一切ないので。一切ない状況下で、次のミーティングにも参加するのが当然という次元で物事を進めておられるので、これは私も少々困惑しております。繋いで頂いたのは林さんですから、林さんの顔を潰すわけにも参りません。どうぞでしょう〜林さんから先生にそれとなく謝金は決まっているのか、決まっていらないなら早めに松原に伝えなくてはと〜因果を含めていただければ助かるのですが〜」

「そうですか〜それは拙いですがなあ〜わかりました。そこは私から先生に伝えるようにしましょう。具体的にどの程度というのはここだけの話しありますか？」

林と隆二の話は険しいものとなることなく、穏やかに蕎麦を啜りながらのものとなった。

2018年3月の末。東京は日本橋のセミナー会議場の席は概ね百数十名を集め満席と埋まっていた。登壇者はひな壇に座り、ハラルをはじめとした取り組みについての講師たちで埋まった。

隆二の関係者だけでも十数名が席を埋めた。また、隆二が働きかけた小売市場であり、東京白金の有名な結婚式場、そしてホテルの関係者たちも席を埋めた。

田所は上機嫌であり主催者として様々な参加者と名刺交換をしていた。そして隆二も高揚していた。林も聴衆の一人として参加していた。

しかしそんな中、隆二は今更ながらに身を置く場所の大切さを痛感し、学歴と人脈の相関性を痛感せざるを得ない中に身を置いていた。

【田所チームが集めたメンツは、日本で名の知れた大手小売業の関連トップ。そして、ゼネコン関係……ゼネコンが何故ハラルセミナーに参加するのは不思議ではあるが。にしても参加している者達は錚々たる顔ぶれ。一方で俺の方とは観れば大学の教員職はうちの二人。あとの十数名は中小企業経営者であり、個人事業主でありかく、こういうことを考えるべきではないが、身を置く場所によって関わる人間のレベルは変わる。そしてその役に立つのが学歴というものなのだろう。まあ、俺の場合はその学歴というところで既に関わる人間に制限をみずから掛けてしまった格好ではあるわけだ。ここまでは来た。ハラルやコーシャ、ベジ、ビーガンへの取り組みを通じ、制度の拡充と構築に声を上げてこころまでは来ることが出来た。さて、問題はここから先なのだが、この先田所を神輿として担ぐべきポジションに自らを置くことが出来るのか。その見極めの場でもある】

隆二はセミナー会場を見渡しながら自らにそう告げていた。が、一つだけ、隆二が気になっていたこと。それは参加者の中に「行政系」「国の役人」が皆無だったところである。

【なぜ、国の役人が一人も参加していない。これはある種面妖だ。いや、寧ろこれがこのセミナーの目的の一面を顕している観ることも出来る。制度上の有り様でありガバナンスに及ぼうとするのであれば、役人を動かすための取り組みは外せない。ということは、やはり商売っ気に振れたセミナーということになるのか。見えてこない。未だに田所のやりたいこと、やろうとすることは見えてこない……田所が自ら動き研究室の研究資金を使い開催したセミナー。まして講師はマレーシア、名門大学のハラルの専門家……田所は何がやりたいのだろう】隆二は初日のセミナーの間ずっとそこに考えを及ぼせていた。

初日のセミナー、講演が終わると田所が開催関係者全員を集めミーティングを行うことを告げた。

「無事、この日を迎えこのセミナーを開催することが出来たこと、皆さん大変お疲れ様でした。明日、もう一日ありますから宜しくお願いします。このセミナーが終わると同時に私たちは事業体を立ち上げ、ハラルを市場に流通させてゆくことに取り組むこととなります。実稼働に至るまでは時間もかかりませんが、それぞれの尽力を宜しくお願いします」とぶち上げた。

隆二は【出たかくついに、目的を吐いた。ここまでだ。残念だがここまでだ。いくら日本を代表する国立大学の大学院の教授、将来、名誉教授の物言いであっても俺がこの事業で手伝えるのはここまでだ。多分、このまま俺がこの事業に絡んだとしたら……販路構築と拡大に関する仕事が廻ってくるだろう。あり得ない。例えば金を詰まれ、何某かのポジションを用意されたところで、俺は魂を得ることは出来ない。宗教で儲けることは、その宗教を信仰する者達の特権。俺たちのように朝に神棚に向かい柏手を打ち、夕に仏前に向かい「お倫」を鳴らし手を合わせる宗教観を持つ者達にとっては絶対不可侵としておかなければならない世界だ、大体、考えてみる国際社会のハラルのロジックを日本に持ち込みそれを制

度化し、ガバナンスの元流通させることが可能かどうか。残念ながら、制度構築という一点、最大の一点において無理なのだ。世界におけるハラルの環境は、既にマネージメントとしての存在を際だたせている。ブロックチェーンの技術運用を通じ、完璧なトレサビリティーのガバナンスを機能させている。さて、それを今の日本が取り組めるのか。不可能だ。国がお題目とする「国民」の取り組みで、ブロックチェーンとトレサビリティーを機能させることは不可能なのである。チョイと捲けただけで「産地偽装」「原材料の虚偽」が未だに表に出てくる国である。考えてみる。小さな製造ラインしか持たない中小の食品製造メーカーが行うであろうことを。ハラル認証をとったハラル製造ラインで作られたものの流通システムを。精々、「これはハラルです」と大上段から振りかぶった姿勢で流通へと取り組むだろう。では、一般の国内消費市場に対してはどうなのか。分かり切っている。ハラルマークを隠して何食わぬ顔して流通させるといふ姑息なことしか出来ないのがこの国のシステムだ。絶対に今の日本においてはガバナンスを効かせることは出来ない。これをやるためには「制度改革」ここからしか出来ないのだ】

「松原さんにも協力いただいて、たくさん商材を売ってもらわなければなりませんから」田所は深くは考えず、口にしたのだろう。盛り上げる言葉の一つも期待したのだろう。しかし、隆二の口を突いてきた言葉は……

「先生、申し訳ありませんが、わたしのお手伝いはここまでとさせていただきます。わたしは今の日本で流通させるハラルに責任が持てるとは思っていません。どうするのですか、トレサビリティーを。どうするのですか、国際社会に見られるブロックチェーンのシステムを。万が一、それらの課題が解決したとしましょう。どうするのですか、一般の国内消費市場を。誰が責任を取るのですか。申し訳ありませんが、わたしにはこれ以上の商売に関するお手伝いは出来ません」とやったのである。一気に座を白けさせた隆二に田所は顔を赤くし気色ばみ吐き捨てるようにこう告げた。

「それは無理だからしょうがない!」と。

隆二は腹に据えかねていたのである。

「凡てが後出しジャンケンである。寧ろ、虎の威を借る狐とすら言えるだろう。最後の最後まで目的を言わず、目的を云うときは天下の宝刀よろしく虎の威を借り上意下達だ。そんなものはそっでやってくれ。俺は今から晩メシだ」と。

ミーティングがはけたのち、隆二は席を立ち部屋を出ようとしたところ、林から声が掛かった。

「松原さん、晩飯喰いましょうよ一緒に」と。

「二人でですか?」隆二の言葉からは、二人で以外は食わないとする覚悟が滲んでいた。

林は「ええ」とだけ告げた。

会場からほど近くの飯屋に二人は入った。

「松原さんどうですか……やれませんか? 年間報酬1200万でどうですか?」

「そういう話になりますか? 林さん。一つお尋ねしますが、わたしを関西広域観光本部に呼んだのは、

ハラルを、そして認証行為を商売としていないからではないのですか？ それから、林さん。当初あなたはハラルは必要ないと仰っていませんか？ 意味として、私は好意的に理解を示していました。ベジタリアンやヴィーガンをベースに考えたとき、ハラルは無くとも取り組みは可能です。しかし、林さん。どうしたのですか。今度は田所先生の信者ですか？」隆二は人を怒らせることが得意だった。本質に切り込み、逃げ道を奪い去ってしまう物言いを得意としていた。いや、有体に言えば「己の信念に忠実」なだけなのだ。それで、人が怒ろうと知ったことではない。正しいか正しくないかは立場と都合が支配的なのだけなのだ。

林にしたところで関西広域観光本部トップの肩書がある以上、物売り商売の片棒を担ぐことは出来まい。その為に隆二が必要だったのである。

一蓮托生。最後の最後まで目的を詳らかにせず、最後の最後に「金」で釣る。見誤っていた。

どいつもこいつも見誤っていた。

三年に及ぶ引き籠りの中で身に付けた隆二の「制度構築」への思いというものを完全に見誤っていた。

【どうせ、金を出せば転ぶだろう】ぐらいに。

そして、奴らは売り子が必要なだけだった……

隆二は岡本に電話を入れると事の仔細を告げたのだった。

「え〜！ 断ったんですか？ いい話しじゃないですか！」

【電話をした相手が悪かったか。このタイミングで岡本を選択した俺のミスジャッジだろう。バカが、俺は岡本に何を期待している。この判断を理解できるのは影山と中沢だけだろう、しかしあいつらは今頃飛行機と新幹線の中……ふっ〜子供かよ。聴いてほしいだけ。褒めてもらいたいだけ。それだけのことじゃあねえか。馬鹿か俺は】隆二は一人呟いた。

2日目のセミナー会場は空席も目立った。やはり2日連続のセミナーはこうなるか〜あたりを見渡すと初日に挨拶を交わした者同士が席を隣り合わせとして無駄話に興じていた。

滞りなく2日目のセミナーも終わり解散となる寸前、隆二は自らに近く、自ら働きかけ参加を打診した関係者をセミナー会場の1か所に集め礼を述べた。

「今回はお忙しい中こうして2日間にもかかわらずお集まりいただいて有り難うございます。今回、わたしが参加をお願いした皆さんはメタで知り合い、それ以来仲良くして頂いた皆さんですが、お立場はそれぞれです。そのことを前提として聴いていただきたいのですが……昨日の夜。このセミナーの目的が明確になりました。このセミナーの大きな目的の一つはハラルサプライの流通経路の構築と、事業資金の出資、賛助会員をはじめとするエンジェルを集めることにありました。あれから開催側とのミーティングを持ったのですが、先生たちをはじめとする関係幹部は私に営業を打診してきました……」10名ほどの参加者は隆二の言葉を固唾をのんで聴いていた。

「結論として申し上げますが、わたしは断りました。皆さんはご存知のように、ハラルはイスラム教を信仰する人々の財産です。わたしはイスラム教徒ではありません。従いまして、宗教と信仰を喰いぶちとする考え方は持ちえません。制度の有り様という考え方。日本に住まうすべての人々が不利益を得

ぬ制度の有り様ということでしょうかありません。今回お集まりいただいたこのメンバーにはムスリムもムスリマも認証関係者もおられますから、もしも田所チームとの繋ぎを考えた方は気軽にわたしに伝えてください。出来る限りのことはさせて頂きます」そう告げた。

「それから、本題なのですが……これからの日本は個々人のライフスタイル・アイデンティティー・イデオロギーというものに直面する時代を迎えます。どうなのでしょう。幸い、ここに集まって頂けた皆さんはハラル、ベジタリアン、ヴィーガン、アレルゲンをはじめとした専門家ばかりです。日本ではまだそういう総合的な取り組みであり多様性を受け入れる仕組みづくりの動きはありません。この機会に皆さんでそういう動き枠組みに取り組んでみませんか？ 勿体ないでしょ？ これだけのメンツが一緒に集まれることなんてそうそうはありませんから。みんなで何か作り上げてみませんか？」隆二がそういう言葉にすると参加者それぞれから賛同の声が上がった。

GlobalFoodComplex（グローバルフードコンプレックス）への取り組みが声を上げた瞬間だった。

第五章 終焉

『中略』2000字ほど

隆二の躰の変化は坂道を転がり落ちるように悪化を見せはじめていた。

目は霞み白内障の進行も留まるところを知らなかった。

両目とも1.5あった視力はみるみる間に墮ち、0.4まで下がり、医者からは糖尿病治療と並行しての白内障手術を勧められていた。

「糖尿の治療をせずにこのまま白内障を放置しておく、緑内障等も併発、目が見えなくなる可能性もありますから」医者はそう言った。

体重は見る間に激減、98キロあった体重が毎日に1キロ、2キロと減ってゆく。

あっという間に80キロ台まで落ちていた。

動脈硬化が進行し、20分直立し立っていると脚が攣りまともに歩けなくなった。

「これは拙いな。仕事どころではない。まずは自分の躰と真剣に向き合わなければ……」

隆二とその仲間たちが立ち上げたグローバルフードコンプレックスへの取り組みも、結局、隆二という船頭がいたればこそのもだった。隆二が自ら動けなくなるとその取り組みの進行は止まった。それはそうだろう。自らリスクを負い大義を振りかざし働くモノ好きは多くは無い。

それぞれに竈門を持った連中ばかりである。

手配事項は枚挙に暇なく、時間、場所、施設、宿泊箇所地の手配、食事の手配、セミナー会場の手配。パ

ンフレットを自ら作り、人選を自ら行い、進行計画を立ち上げ、関連メディアとの詰め。この作業を隆二は一人でやっていた。

が、誰一人として隆二からの「泣き言」であり、文句は聞いたことは無かっただろう。それどころか、並行して研究所に入る仕事ですら隆二はグローバルフードコンプレックスの仲間たちに割り振り案分した。さらには、観光庁事業への専門家推薦に仲間を推薦するに奔走した。

GFCでは交通費と高々の日当ぐらいの手配しかしてやることは出来ない。

せめて、研究所に入る仕事ぐらい仲間の食い扶持の足しにしてやりたかった。専門家に名を連ねれば仕事の依頼も増えるかもしれない。隆二はそう考え可能な限りの動きに身を投じた。

ただ、そんな隆二も気持ちを理解してもらおうことのできなかつた数名には厳しい態度をとらざるを得ないでいたのも事実である。

「参加人数的には赤字の状態での開催となりますから、申し訳ありませんが、移動交通機関はLCC限定とさせていただきますので、往復で航空券を購入されたら領収書の添付をお願いします」

予めそう申し送りしていたのだが、「さやぬき」をした者が明らかとなってしまっていた。

隆二のショックは如何ばかりだったであろう。なぜ、こんな思いをした中で俺がマイナスでありリスクを被らなければならぬのだろう。そう思うことを止められないでいた。

北海道での第一回目のセミナーは新聞社2社にも取材をしてもらい、それも大きな記事となり、隆二の顔写真付きで大きく紹介されていた。

次は金沢だった。金沢はGFCメンバーの一人の地元だった。

隆二は何としても成功させてやりたかった。

「取り敢えず、あと2箇所。合計3カ所だけはやり切ろう。そうすれば1年間の活動実績を通じた公的存在意義は担保し得る……、そうなれば、NPO法人化の道も見えてくる。そこに行き着くまで俺の躰は持つのだろうか」そんな思いと背中合わせの中に隆二はあった。

しかし、隆二はこのころ既に動けなくなるところまで躰の状態は悪化していた。

起きていることが出来ず、食事をとるとすぐに眠たくなり、起きていられず布団で寝る。心臓の調子もおかしくなり始めており、動悸と不整脈が顕著となっていた。

隆二はそれでも病院を拒んだ。

結果、GFCはとん挫した。

隆二にとってはどれほど忸怩たるおもいを抱えた瞬間となっただろう。

「申し訳ない……」そう感じていた。

同時に、隆二にとっての悔しさは計り知れないものとなっていた。が、隆二はこの時すでに誰に告げる

ことなく「入院加療」にあたっていたのであった。

2019年の初冬、隆二の躰は東京上野は国立西洋美術館の前庭にあった。ある意味死に場所を求めての旅だった。

様々なものが去来することをとめられず、走馬灯のように子供の時分のところからの記憶がよみがえっていた。

「苦勞……いや、子供の頃に味わったものは苦勞などと呼べるものではない。苦勞をしたのはおふくろだけだろう。そんなおふくろ達を恨むことは出来ず、寧ろ勝手というものだ」

禁煙場所で人目を憚りながらの喫煙。

「最後のタバコにはならぬだろうが、目を瞑ってくれ。すぐに消すから」そう言うとき短くなった煙草を惜しみつつ最後まで吸っていた。

「上野か……」

「地獄の沙汰も金次第……、さしづめ地獄の門も金次第で開いたり閉じたりか。風俗姉ちゃんの股の下じゃねえっんだよ、ねえ、考える人よ」隆二は薄い笑みを滲ませるとワザとらしく下卑た下らない言葉を並べる。

「VANITASか……ふむ。空は空、一切は空なりってか……、嫌味かよ。まあ、あんたたちがVANITASをやるに相応しい美術館はここしかないと思っっているように、死に場所を探している者にとっても、ここしかないと思える最高の場所なんだよ」隆二は美術館のポスターを読み込むとそうつけた。

隆二は受付窓口で切符を買おうと館内へと歩みをすすめた。

「美術館か……どれくらいぶりになるのだろう。まあ最後の美術館であり、最後の国立西洋美術館だろう。ここが選んだVANITASを読ませてもらおうか。図録集はどこに……ふむ。無駄ではあるな。買ったところで邪魔になるだけだろう。バカバカしい。簡易の展示目録でも手にしておくとするか？であれば、捨てるに困ることも無かろう」そう言うとき館内売店へと向かい展示目録を求めた。

隆二にとっては……つづく

■抱え持ちゆくもの

夢殿・笑うひと泣くひと(第三形態)

斑鳩の地を濡らす秋の長雨は糸を引くようだ。伽藍周辺でも季節変わりの雨を途切れることなくみせている。雨水に染まった玉石は濃い鼠色を纏ったまま微動だにせぬ。

柔らかな陽ざしさえあれば、白地に薄く藍を溶かし込んだ「石」本来の姿は訪れる参詣客の足元で、心地よい旋律を奏で聞かせるに一役買ったはずである。さながら天と地が繋がった合図を思わせるよう雨をおとす空も同じ色か。

「経つ刻を 忘れるほどに 眺むれば 仏の教え 遷す秋霖」

九十九(つくも)に及ぶ白糸が如き雨垂れは救世観音菩薩の功德さながら、現世における数多悪い事からの救済を試みる蜘蛛の糸にも相似して、時には下から上へ降っているようでもあり、昇ってゆくようでもありという不思議な感覚に誘われることがある。

法性の学び入り口に立たされて「さて、この先どうする。進んでみるもよし、退いてみるもよし」と、突きつけられてもいるようで修業の身には些かハッとさせられる。

私がここに坐してどれほどの月日が経とうか。幾度の秋を迎え送ったことだろう。秋雨に眺め入ると現と夢を行き来する。鼠色に変容をみせた玉石の隙間を埋めようとでもするのか、地面からは雨水が浮かびあがる。雨は間断なく木立や伽藍、地を打つものこのこを取り巻く仏性が幸いしてか静寂に馴染みをみせていた。

今また一人の中老男がいつもの様に憂鬱を滲ませ長靴を履き、纏わり憑く雨水すら慈しむように伽藍むこうへやってきた。

この男、名を不染鉄というそうであり、どうやら画を生業とでもするのか足しげく通い来ては法隆寺や夢殿の画を描いていた。

お師様の御言葉によると、東京小石川(現在の文京区)にある浄土宗の寺、光円寺の住職の倅であるということではあったもののそのくせ背筋の伸びたところは覗えない。時折地元の女子大学生数名を従えてくることもあったが、その気配、引率からは甚だ遠くいつも俯き加減に歩く様子からは引率されていく気恥ずかしさと按配の悪さが滲んで見えた。

「おお、今日も来たか」

「はい。今日も来たようにございます」

何やら、心なしか待っていた如く聞こえるのは気のせいではないと感じられた。

降り続く雨模様も手伝ってか確かに訪れる参詣者は少ない。それでも毎日通い来る者もないわけではない。近所に住まう信心深い質屋の婆様しかり、境内に続く茶店の主人ども。

博打にでも行こうとするのか、数人で連れ立って来ては賽銭を放り込み、柏手を打ってゆく埒なき者ら。それぞれに、それぞれの願いを届けにやってくるのである。

「…うむ。どうやら今日もこれと変わりはないか。何よりよ」

「…お師様には、随分お気に留めておられるご様子」

「悲しそうではないか。今にも泣き出しそうに見えるのお」

何故お師様は泣き出しそうなのを見留め嬉しそうにしておられるのだろう。別に意地の悪さをみせているわけではないだろうに。

「憂鬱が見えますか。今日も画は描けぬのでしょうなあ。ここ三日ほどは手ぶらで通い来てありますゆえ」
「画か… 道詮、そこ元は覚えておるだろう。まだ私が木綿布でグルグル巻きにされていた頃のことを。もう何年になるうか」

「…：今が昭和という元号の四十二年だそうですから、あの異人の手による開廟から八三、四年も過ぎました頃にございますか。忘れよう筈もございません」

「もうそんなになるか… よう笑う御仁だったのお、あの異人」

「はい。崇りを畏れた寺の僧たちが、みな蜘蛛の子を散らしたようにその場を離れる様を見て、雷も落ちぬ火も出ぬと大笑いしておりました…」
「そうであったのお。確かあの御仁も画業に精通していたはずであるが…」

「はい。何やら東京美術学校なる学び舎を作るにも奔走し、副校長の職にもあったと聞こえておりました。あの時、ともに来ておりました岡倉天心なる者が校長を務めていたという話でございました」

「道詮、そこ元はいまだ現に明るいようだのお」
お師様はからかうように、されど慈愛あふるる笑みを湛えみせると憂鬱を滲ませ向こうを歩く中老男を見やった。

「お恥ずかしい。ただ… 恩人ですが故のこと」

「うむ。この国はその恩をけして忘れてはならぬのう…」

「はい……」

そう。あれから八十年以上が経ったのか。早いものだ。あの折は明治と云われる元号だったか。

確か、明治は十七年初夏の昼下がりのこと。

お堂前が俄に賑やかとなりだし、何やら押し問答をしている様子が堂内まで伝わってきた。修行の僧どもが徒党を組み堂前に人垣を作ったであろうことは、扉障子に映り込んだ影からも窺い知れた。盛んに「崇り」の言葉を口にして聞いたのを聞くと、どうやらこの『夢殿』を開けようとしているらしい。二百

数十年の時を経て陽の目を拝むというのも何とも楽しみであり、「それ頑張れ、やれ開けろ、負けるな」そう願ったことを想い出すと己が修業の足りなさを反省もし情けなくも思ったことを思い出す。

さぞかし錆びついていたであろう錠前を、ガチャリガチャリと解錠しようとする音が堂内に響く。扉もガタガタと震えていた。修行の僧と思われる「どうかお待ちください」という懇願空しく程なくすると錠が解かれ扉が開けられた。

寺の僧どもは崇りを畏れ誰一人として開扉の前にはいなかった。逆光でよく分からぬが三人の男が立っていることだけは観えた。

男達は開け放たれた扉口で靴を脱ぐと草履を取り出し履きはじめた。

「入ってくるのか……」そう考える間もなく三人の男は堂内に歩みを進めると行燈片手にうろつき始める。

なんと、一人は日ノ本の青年だったがあと二人は異国の者ではなかったか。肌色は白く、髪の毛は行燈の明かりを吸ったように金色の艶を放っており、暗がりには映える顔つきは、ぼんやりとした明かりが顔の影を作り出しているのだが、その鼻の影の大きさに驚いたものだった。

中には一人ぐらゐは居るものである。怖いもの見たさが勝った者が。

「諦信殿、諦信殿、どうか、それ以上は……」扉の外、若い修業の僧が声を潜めて押し留めている風ではあるが、その声は震え、今にも泣きだしそうな具合をみせていた。

【諦信とな、さてこの日ノ本の青年、坊主か出家の身か】

異人が何やら喋りはじめたのは良いがさっぱり要領を得ぬのも当たり前のこと。後を引き取るように青年が話し始めた。

「諦信先生は、崇りの心配はなく、雷も火も心配ないので堂内へお進みくださいと申しています」なんと諦信という法名を名乗っているのは異国の者ではないか。

この男が日本政府によってアメリカから招かれたアーネスト・フェノロサであり、この国の仏教と信仰、美術・芸術を守るため東奔西走していたことは後になって知ることとなった。

三井寺法明院は桜井敬徳和尚から諦信なる法名を授かり、改宗まで果たす熱量には後にお師様も厚く関心を寄せておられた。重ねては、狩野派の狩野永恵より狩野永探理信なる画号を持つことを許されたというからどれほど才長けた御仁であろうか。

三人の闖入者は仏殿の裏へと回り込むと身の丈七尺に届こうという長物包みを眺めはじめ何やらヒソヒソとやっていた。

「諦信殿、どうかお待ちください。どうかそれだけは、お留まりください」【ほう。ついに解かれるか。二百数十年の時を経て、お師様はその御姿をお見せになれるのか。一二二代管長・千早定朝の姿がみえぬということは了承済みか。ことは上からの流れなのだろう】

厳重に木綿布で包まれてはいたが、雨漏りが禍したものか所々腐っているではないか。お師様の足で

あられるのか鼠が齧ったような跡も見られる。【とは言ったもののこの木綿布、随分長持ちしたものである。二百数十年である】

鼠の齧った跡がその出入り口であり餌取り場となっていたものか、人の気配にあてられた大きな青大将がお師様の足元破れ目から顔を覗かせると、胴をくねらせながら暗闇に逃げ込んでいった。

いつの間に来たのか、数人の修業の僧たちが扉口から顔を覗かせ止めに入る言葉を口にした。他の者達はみなお堂の下から遠巻きに見守っている。

木綿布に男たちの手が掛かる。「止められぬ」と観念したのか、僧たちは一様に宝珠を手に合掌し観音経を唱え始めた。

一枚、また一枚と木綿布は外されてゆく。

僧たちは多様を見せた。泣く者もいた。空を見上げ、天変地変に怯える姿もあった。握りしめた拳を腿の前で組んでいたのは怒りなのか。仲間の僧侶の袖を掴む者もいた。

数人の坊主が伽藍向こうで剃髪頭を寄せ合って何やらヒソヒソとしておると眺め観れば、懐から金を取り出し、一人の坊主に渡している。どうやらあの坊主が勝ったのか。

二百数十年という年月はそれぞれの中、始末のつけようもなく多様を見せるに至ったのだろう。

立ち合い僧たちの読む経がひと際大きく堂内に響くと、お師様を包んでいた布ははらりと床に落ちた。三人の男たちは一様に固唾をのみ立ち尽くしたままではあったが、諦信と呼ばれた異人がその場に膝をつき手を合わせるや、他の二人もそれに倣い膝をつき手を合わせ一様に首を垂れた。三人ともが涙をみせ手を合わせていた。

救世観音菩薩立像が二百数十年の時を経、神々しい御姿を顕された瞬間だった。後に、この者たちの働きが奏功を見せお師様は修復されその後のこの夢殿にお歸りになられた。

諦信と呼ばれ、英名、アーネスト・フェノロサと呼ばれた男はその後も何度もこの地を訪れ、法隆寺に伝わる宝物美術品の保存によく務めた。大きな口を開けよく笑い、心優しくあるものの己が信念に忠実であり語るべき言葉を持った男と映った。

【そうか。あれから八十年以上の月日が流れているのか……同じく、画業に通じ仏の道とも通じているはずのこの不染鉄という男。さて、何がこの男の憂鬱を裏打ちしているのだろうか】

憂鬱を抱えし中老男は静かに歩いてくる。気付かぬうちに踵や爪先で雨水や玉石をいじめることがないように。雨水や玉石の身の置き所が変わらぬよう、傷つかぬよう。と、歩みを止めたと思いきや、膝を折りながら長靴に纏わり憑く枯葉を剥ぎ取り眺めはじめた。

男は傘の高さまで腕を挙げ伸ばすと枯葉を手放してみせた。濡れていたが故か。揚力を持たない枯葉は男の手を離れた途端に失速をみせ、鼠色した石たちの元へ返ってゆく。

枯葉を跨ぎ、傘のかかる範囲にしか足を運ばず、静かに歩いてくる。手を合わせるわけではなく。お勤めをするわけでもなく、何かを願うわけでもない。ただひたすらと傘を手にこちらを向きむこうに佇む。哭くわけではなく憤るわけでもなく、粗忽を見せるわけでもない。

気配がけぶること無き様子からは間も無くの雨上がりを予感させた。

「どうにも、寂し気よのお……」

「そうでございますなあ」

「ふん。しかし救いを求める風ではなし、利益(りやく)を求める風でもなし」

「では何故あって、このつめたい秋雨の墮ちる中通り来るのでしょうか」

「分らぬか。八十数年前のあの男も一緒じゃよ。心から愛するものの末期に触れた者は、どの道どちらかを抱えみせる。笑ってみせるか、泣いてみせるか。生きることとはその生き様をみせること。抱え持ったものに変わりはないのだよ」

「…… はっ」

「近づいて来ぬな……」

「…… はい。近づいて来ませぬ」

「どれ、あかりを灯してみよ」

「…… 如何でしょう」

「うむ…… 近づいて来ぬか」

「近づいて来ませぬ、いつもの様に」

「そのうち来ようか。未だ熟せず、慌てることも無い」

「…… 慌てることはありませんなあ……」

南の空の雲間、横一条の光明が射す。それはさながら雲を割る如きの異形を想わせた。

男は足元に目をやるや、足でそっと玉石を転がしながら弄はじめた。

コロン、コロン、カチン、転げた玉石はぶつかり合いながらあらゆる方向へと転げてゆく。何やら生きているようでもあり、人の一生を見せられているようでもあり…… と思えた。

傘を持つ手が足の動きに呼応をみせ、時折大きく右へ左へと揺れをみせる。踊っているようにもみえ踊らされているようにもみえる。

「あやしておるわ」

「あやしておる……でございますか。誰をでござ……」

「…… 寂しげよのお……」

「はい…… 寂しげにございますなあ……」

帰途につくのか。男は細く絞った秋雨のなか背中をみせた。南の空から射し込む光明が濡れた背中を照らし出す。温かく、柔らかであり、この世の患いの凡てを癒す功德を授けるように。

今日もまた、手を合わせるわけではなく。お勤めをするわけでもなく、何かを願うわけでもなく……

男は静かに夢殿を後にした。

二百数十年ぶりの御開廟から八十数年の時を跨ぎ、守った者は笑い顔を見せ、伝え残す夢殿を描いた者は泣き顔をみせる。人々の信仰のあり様はこの斑鳩の地に今も息づいている。数多の想いに支えられながら。

「道詮、晴れたようよのお……」

「はい。お師様。いい按配にございますなあ……」

了

韻文詩する「また会いましょう冬至に」

鉞を 凍てつくなかで 振り下ろし

せめて子らには お善哉をと

南京を 切り分けしつつ 蒸す支度

蒸籠せいろめぐりて 子の手をかりる

屋根氷 いつのまにまに 氷柱つららとし

背伸びせずとも 墮とす子の丈

了

短歌 韻文詩 母音律 あいうえお順

※付録 北海道でその昔よく食べられたカボチャに「まさかりかぼちゃ」と呼ばれる種類があった。今もあるかどうかは分らぬが、皮が固く厚ぼったく包丁では太刀打ちできぬことからその名がついた。身は甘くホックリしているのが特徴だ。子供の頃にコメの代用食としてよく食べさせられたものだ。

皆様も、冬至には親の想い出が被ることでしょう。

柚子をひとかけら浮かべると、サッパリと想い出せるかもしれませんね。

親というものは、なにはさておき子供なのだろう。

おふくろのことを想い出してみると、凡てが子供を中心に置いたものであったことがこの歳になりヒシヒシと感じられる。朝4時に起き、建設現場の飯炊きに赴き、9時に帰って来ては化粧品と保険の外交に出る。17時前に戻ると、18時にはスナックに出勤だ。

睡眠時間4時間以下。そんな暮らしが10年続いた。

尊敬と云う言葉が相応しいのか、他人事のように聞こえるのかはわからぬ。今の時代であるなら、そこまでせねばならぬ暮しぶりを強いた親に向けた言葉があるようだが、わたしには書けない。そして親には向けられない言葉だ。有り難いことだ。

何も考えず、子供の頃を思い出しながら仕上げた詩だが***。

仕上がってみると、凡ての詩に「子」が入っていたことに、書き手自ら驚く始末。

少しだけ、ほんの少しだけ、あなた^{あなただ}の気持ちに近寄れたのかもしれない。

また会いましょう冬至に

合掌。

夢殿『秋涙』令和六年版(第四・三形態)

花のいちはみじかくて
苦しきことのみ多かれど
風も吹くなり 雲も光るなり……

……帳尻っちゅうことなんですやろねえ。

夢 殿

秋 涙

令
和
六
年
版



飛
鳥
世
一
作

一枚だけでいいんだ。魂が震える画を持とう。

自分だけがわかる画を……。そこが始まりだ。

不染鉄 夢殿・コピー.jpg

その一 満と数えのいろは坂

奈良いうところは海がないところであ…。

高等小学校の二年生…、云うてもわからしまへんやろなあ。せやから歳(とし)のころなら十一、十二歳(さい)ぐらいのことでしたやろか。明治も二十年になった頃合い。お父ちゃんやお母ちゃんにはじめて海を見せてもらいましてんけどな。

お伊勢はんへと参ったときに鳥羽ちゅう宿場に留まりましてんけど、二階建ての宿屋はそれはもうお城か法隆寺さんのご本堂のように立派に見えたものでした。

お父(とう)ちゃんがなあ「お千代チョットこっちにおいで」ほう云うのでお父ちゃんの座ってはる窓辺にゆきますと、それはもう見事な桔梗色した海が一面に広がってましてなあ。

西に傾きかけたお陽さんを浴びはった海がキラキラ〜キラキラいうて光ってましてん。



南海の図 愛知県美術館収蔵(2) .png

子供ながらに毎日こんな海が見られる三重のお人たちを羨んだものでした。宿屋の軒先では、私よりも年下の子達ですやろなあ、竹で編んだ輪を棒を使って器用に回す輪回しをして遊んでほりましてんけどな、奈良ではこのころ既にブリキの輪がありましたん。せやから輪回しと云えばブリキの輪を回して遊んでいたもので、こんな些細なところでも、あぁ〜奈良に生まれて良かったと思ったのも、考えてみりゃおかしい話ですやろか。

鉄さんが描かかった画にも仰山(ぎょうさん)、海を描かかったものがありましてんけどな。わたしは鉄さんの海の画を鑑(み)るたびに鳥羽の桔梗色した海やお父ちゃんやお母ちゃんを思い出したものでした。そやったわあ、あぁお婆ちゃんに叱られるわあ。あのなお婆ちゃんがな、うちとこの柳行李の蓋にな、五合升摺り切り一杯のあずきはんを入れはるとこうして抱えはって中腰のまま横に傾けながら振ってみせましてんけどな、その音がまた鳥羽の海で聞いた波の音にそっくりでしてん。ザザザァーッ、ザザザァーッちゅうてなあ。お婆ちゃん、なーんも云わんとニコニコしながらわたしの顔だけを見て柳行李の蓋を揺らしましたなあ。わたしが昼寝におちるまで。お婆ちゃん疲れたんですやろなあ。お座りしたまま柳行李の蓋を抱えて眠るように逝ってはりました。

その鉄さんがこの昭和四十二年春、法隆寺の夢殿さんを描き上げたちゅうことで、法隆寺さんや鉄さんとの縁浅からぬお人達にむけてお披露目の展覧会が行われたのでした。

その画はね、法隆寺の夢殿さんと云われ親しまれてきた八角円堂を描(か)かかったものでした。三重県のお伊勢さんと並び称され、一生に一度ぐらいは参ってみたい日本仏教発祥の地である奈良県は飛鳥地方にご縁起をもつ法隆寺さん。その境内(けいだい)伽藍(がらん)の一つ、夢殿・八角円堂の建設発願者は聖徳太子さんです。

「お太子さま・お太子さん」と親しむのは、何もこの町に住む者に限ったことでは無いようで、毎年、一月の二十日を過ぎた頃でしたか、全国の太子堂を持つお寺さんでは聖徳太子さんをお祀りした太子講が催された様子なども新聞を介して伝わります。お太子さんの寺づくり由来されるのでしょうか。建築建設に携わる会社や職人さん、物作りを生業(なりわい)とする職人さんたちの間では、そろって無病息災、職場安全を祈願しお太子さんの遺構を称える勉強会も受けつがれていたよう。

人々が暮らす上での様々なまつり事を語るうえで、切っても切り離すことのできないお人であり場所であり…。画は、そんな聖地とも云えそうな法隆寺の夢殿さんを描いたものでした。

実はね、わたしこの画を知ってましてん。いえね、正しく申し上げるのなら描いたお人と描いてはった時期を知ってましてん。だってね描いてはるときに傍で見えていたのですから。

今、こうして目の前で出来上がったこの画を鑑(み)てますとね、それはそれは昨日のことのように鮮明に思い出されてくるほどで…。

めんどくさいことや都合の悪いことは忘れることが出来るようになってきましたんけどな。昨夜の夕餉(ゆうげ)の献立すら忘れていられるのに、この画のことは忘れないのが不思議。

【あぁ… もしも忘れてしまうたらだないしよ、寂しいなあ… 寂しいことを忘れてしまえりゃ僅かばかりの余白さんも、随分と生きやすいんやろうけど、中々そうは問屋も下ろしてくれまへん…】だって夢の中まで出てきはるぐらいです。これがほんまの夢殿なんですやろなあ…。

この画を描いてはるお人の姿かたち。下絵を描く鉛筆を走らせる指は、わたしとこの神棚さんに灯す蝋燭のようにほっそりと白んで見え、しなやかな指がときには神経質そうに、ときには考えることをやめはったように画紙のうえ繊細であり、大胆でありと運ばれました。あれが下塗りというものなんですやろか、水に薄っすらと色が着いた程度に暈(ぼ)かした絵の具を塗る様子を見ますと、とてもこんな美しい画になるとは想像も出来しまへんでした。

左手のね、人差し指と薬指に挟んだ煙草をたてはりながら、器用に親指や拳固を握った小指の付け根を使いあって下塗りの絵具を延ばしていかはる様子は、うちとこの曾孫のお絵描きと変り映えなく思えたものです。

不染(ふせん)鉄(てつ)作・夢殿 完成披露の展示会がこうして法隆寺さんの本堂で行われ、わたしは幸いにもその完成した画を鑑ることが出来ましてんけどなあ。冥途(めいど)の土産なんていう例えがありますやろ…。どうでっしやろうなあ。この歳まで逝(い)かせてもらえなかったのも、ご褒美だからこの画を鑑てからにしないさい。そう観音さんに云われているようにも思えたもの…。

お陰様で、もうなあんも思い残すことなくお迎えを待つことが出来るようになりましたん。



「お千代姉ちゃん、あんたやっぱり来てはったん？ 体の按配(あんばい)はもうええの？ 大事に

せにゃ、あかんよ、あら…今日は、松枝(まつえ)さんも一緒なん？ ほな安心やわ良かったねえ」

「はいな、ありがとねえ…お里ちゃんも元気そうやね。きょうは亜由美さんも一緒に。まだまだ寒いから、体を冷やさんといてねえ…。お腹のお子にさわったらあかんから」

隣の古道具屋(ふるどうぐや)の古女将(ふるおかみ)、お里も来ていたようです。高々二つほど若いかぞえで九十二才というだけでこの云いよう。大体あんた…「やっぱり」ってなんですかのん。誰殿彼殿(だれでん)だれでんか(だれでん)チョイと名の知れたお人と見ると全部自分のお友達にせにゃ気のすまん子(ご)してなあ。

まったくいつまで人のこと姉ちゃん呼ばわりしてはるねん。云うたところで目くそさんが鼻くそさんを笑うようなもの。他人様(よそさま)の心配はさておき、あんたとこの嫁や孫嫁の癩癩(かんしゃく)取りしてあげなはれや。お前さんが未だに商売にも口を出すものだから、嫁も付き添いの孫嫁も癩癩(かんしゃく)溜まっていると思痴(おぼ)をこぼしているのも評判やないの…。

そんなことを考えていますとね、まるで見透かしたようにお里のところの孫嫁は始末が悪そうに会釈だけを見せました。うちの松枝がお里の孫嫁と言葉を交わしはじめた頃合い「ほれ、行くよ」と催促するとスタスタと一人で歩いてゆきます。

ほんまになあ、子供のころからのことやから今さら驚くことでもないねんけどな、このお里の足腰の丈夫さと口の達者さには舌を巻いたものでした。道具屋は、目が利いては商売にならぬの例えがありませんけどなあ、ほんまに上手を云うたもの。

そうそう、むかーしこんな話がありましたんけどな…。

【うちのお店に古着を持ち込んだご近所はんがいはってね、これでなんとか五十銭貸してくれと云わはります。その様子は当時十一、十二歳の私でも分かるほど、何かいつもより居丈高(いたけだか)に映りますしてん。

あのな、質草(しちぐさ)もって質屋に行くときちゅうのはな、大かたのお客はんは少しこう：肩をすぼめて暖簾(のれん)をくぐるのが当たり前の風景でしたから、子供ながらにこの人は何をこんなに威張っているのだらうと思ったもの。

店番の母はそんなには貸せない。これぐらいで持ってお行きなさい：そういうのですが頑として引き下がりません。母は何かの事情や理由があるのだと思わはったのでしよう、なんでそんなに自信があるのか、どう見てもそこらの呉服屋さんの店先もの。そう詰めたのですが、するとそのお客はんが云わはりましたん。

「ちやうがなあ。向こう町の古道具屋の前を通りかかったらな、あっこのおちびちゃんお里いうたかいな、ほれが店先に出とってな、偉いなあお手伝いかい云うたら、おっちゃん：この服を買って損はないで云いよる。わしが、なんでや？ そんなアホなことあるかいな云うたらな、あのチンマイ躰(からだ)でチョットこつち来いと手招きしよる。ほしたらわしの耳元にお参りするように両手を重ねてコチョコチョ云いはじめたやないかい。

あんな：なんでかいうたらな、買ってまたそれを売ったらええねん。お千代姉ちゃんのとこやったら、キッチリ値打ち通りにみてくれはるやんか。おっちゃんは買って損するどころか儲けがでるちゅう仕組みやねん。そう云いよる。これまたハシコイ子やないのよお…。あの年で男衆の急所の掴み方すら心得てけつかる。未恐ろしいガキやでほんま。せやから買った値段以上で預かってもらわにや、わしゃ損するがな。こんなん持って帰ったところで一人もんのわしにどうせちゅう話しやねん」

なんと売り付けたのはお里だったようです。お客はんはお里のその口上の余りの巧みさと、人たらしの術中にはまってしまったんですやろなあ。

この時、確かお里は満で九つか十ぐら이었다ははずです。わたしはお里の逞(たくま)しさに驚き、なんという利発な子だろうと思っただのもあたり前、未恐ろしくさえ思っただものでした。ただ母は違つたようです。この話を聞くや否や、持って帰るかお店の言い値で置いてゆくか、さあ、どっちになさいます：と畳みかけたのでした。

お客はんはその剣幕に驚きはったんですやろなあ、渋々母の言い値で預けてお帰りになりはりました。右手でこう暖簾をパシッと叩(はた)き、肩をすぼめ、右よし、左よしと出ていかはった姿は来た時とは対照的に映りましたん。

母は預かった質草を前にすると大切そうにブラシを当て綺麗に折りたたみ、虫よけのショウノウを挟むと飴色に艶をみせる大きな柳行李(やなぎこくり)に仕舞いながらこういうのでした。

「この箱はね、預かりものやけど… 多分引き取りには来ない人たちのものだからね、将来、お千代にあげるからね…」と。その行李の横腹には、十二月十二日火の用心と墨で書かれた短冊がポロポロになりながら張り付いてましてん…。

お母(かあ)はん、あんなあ…、あのおっちゃんがお里ちゃんから買(こ)うたと分かったとき、お母はん怒りはったやろ。なんで怒ったん？ わたしがそう云いますと母は…

「お千代な覚えておくんやで、お商売でもそうやし友達関係や人間関係、この世の関わりの凡てはな、善敗己に由るいいましてな自分で自分の人生の責任を取らないとあきまへん。他人様を巻き込んで責任を擦り付けるようなことをしてはあかんのや。ほしたらな、お客はんとの間で何か行き違いがあつて喧嘩になつても当人同士で解決できますやろう？ でもな、他人様を巻き込むと問題はどんどん複雑に大きゅうなつてゆく。因果応報やねえ。あのお客はんはきつとお里ちゃんここに文句を云いに行かはるやろなあ…、話がちゃうやないかい云うて…。それとな何度も口を酸っぱくして云うてるけどな、うちとこのお商売は口の固さが何よりも大切なんや。お千代は毎日ご飯を食べはりますなあ。ええか、ご飯の半分は口の固さのお陰やと思うとくんやで。質屋の暖簾をくぐるお客はなんてな、好きでくぐるお人はいてしまへん。みんな大なり小なりの事情を抱えてくぐりはるねん。前にも教えましたやろ。道端でお客はんに会つても、うちらから挨拶はしたらアカンて。お千代はなんでか覚えてはる？ そや、うちとこのお商売はな、顔サシ、まんのや。せやからお客はん迷惑かからんようにわざと知らん振りせにゃあならんねん。お里ちゃんはんはな、確かにはしこい子なんやろなあ。でもなお利口さんかどうかは分からんなあ」そう云いながら笑つて見せたものでした】

何ですやろなあ。そんなことを想うと知らぬうちに懐かしくて頬と口元が緩みますねなあ。それにしても…お里の内緒話は昔から手をこうして合わせはつてからお参りするように耳元に近づけ、キュツとこう菱餅さんのようにするのが癖でしたなあ。

せやけど…わたしに内緒話をしたことは、あんた…一度も無かつたわなあ。

「お義母(かあ)さん、しんどいことあらしまへんか。少し座つて休みはつたらどうですか？」次男の嫁の松枝がわたしの手を取りながら声かけてくれます。

「うん。大丈夫よ。もう少しだけお前の体を掴(つか)ませたつてな…、もうちょっと鑑(かん)でいたいから…」
「はいはい、じゃあこの腰のベルトの処を掴んで下さいな…」コートの裾をまくり上げると松枝は、むき出しになったベルトにわたしの手を掴んで導くのでした。

わたしと歩く松枝は踵(かかと)の高い靴を履く処を見たことはありません。いつも、踏ん張りの利きそうなペタンコの靴ばかり。そして立つときはお相撲さんのように股を開いて踏ん張るのです。その

姿は、新婚旅行で行った高知桂浜の土佐犬(とさいぬ)さんの土俵入りのようでしたから、掴まらしてもろてるわたしは、随分可笑しいやら申し訳ないやらの思いで眺めるのが常でした。

「松枝はん、あんた幾つになりはったん？」

「何ですの急に」松枝はそういうと口に手を当てながらワツハハと大笑い。

人目も憚らずという言葉がありますやろ。わたしは松枝のチョイと後ろから手綱(たづな・ベルト)を掴んでいましたから、傍(はた)から見ればそれはさぞかし面妖な光景でしたやろうなあ。わたし達の横を通り過ぎていかはる招待客の皆はんが、その光景を眺めニコニコしながら頭を下げていかはります。

わたしは松枝の手綱を握ったままそれをグイグイと左右に振り、声を潜めて「チョット、松枝はん、笑い声が大きんとちゃうの、もう少し声を落とさなはれ。みんな見ていかはるから」

通り過ぎてゆくお人の殆どが顔馴染みいいますかお知り合いな方たちばかり。中には心やすくお声を掛けていかはるお人もいました。会場のあちらこちらでお辞儀が大流行りです。

画を愛でる会ですから言うまでもなくみんなお喋りは小声です。

そこに土佐犬さんよろしく踏ん張りをきかせた松枝。後ろから手綱を引き締めた強力(ごうりき)のわたし。手綱(たづな)を横に振る姿はまるで犬を落ち着かせるための仕草にも見えたかもしれまへん。

「お義母(かあ)さん… あんまり横に振るとお腹の皮が擦れて痛いですよん」というと口を尖らせ斜めうしろのわたしを見ました。すると、また嘖き出して笑いはじめたのです。余程、わたしの顔が恥ずかしそうにしていたのですやろなあ「はいはい、ごめんごめん」というと、松枝は正面に向き直り「ちよつと前に六十三になりました… あつ、満でね、満で」というのでした。「ほな、数えていうたら…」わたしはそこまでいうと、松枝は「はいはい、六十五です」と先にまわっていいのです。

「お義母さんのその癖は治りしまへんなあ…」松枝は優しそうな笑顔を見せると振り返りながらそういうのでした。

「せやなあ… 以前なら自分の歳いうときは満でしかいわんかったけど、人の歳聞いたあととは必ず満か数えか確認するものなあ…」

「そうそう… でもね、その気持ち、わたしも分かるようになってきましたわ」

「そうですね… そうなってきましたねんて… わたし、観音さんにも歳聞くと思うわ…」

「お義母さんのことやから、きつと、数えて教えてやって云いはるんでしようなあ…」

松枝はそういうと首をすくめてみせるのでした。

「ところでお義母さん。お義母さんは幾つになりましたん？」

「松枝はん、あんたまたわたしのポケ具合を確認してまんのかいな。わたしに歳訊くちゅうのはな観音さんに歳訊くことと一緒にやて教えましたやろ。人に云うたら値打ちがのうなりますねん」

「安心やわあ…」「何が安心やの……」

「だつてなあ、お義母さんちゃんと毎度同じ返事をしてくれますやろ。わたしにとってはこれほど安心なことがありますかいな。お義母はんはまだまだ元気や。ここ、しっかり掴まっといってくださいねえ」そう云うと、湯タンポはんみたいに温かな手をわたしの手に重ねてくるのでした。

次男の雄介は四十八歳の年(とし)に労咳(ろうがい)を患い早逝。二十歳の長男を頭(かしら)に十七歳の次男、十五歳の長女と残したままに鬼籍に記されましてん。親より先に逝くとはなんと親不孝：それも思ったものです。せやけど一番しんどい思いをしたのは嫁の松枝ですやろなあ。

子供三人を抱えて松枝も悩んだ時期もあったようで、しばらくは夜になると一人泣きしていたのでしょ、朝には泣き腫らした目を伏せながら、子供たちの準備をする姿が見られたものでした。突然残されまるで放り出されたように、何から何まで自分でやらなければならなくなりました。家業の質屋は早逝した雄介が継いでくれましたから、松枝は嫁に嫁いできていたものの雄介が他界したあとは心細かったですやろう。しばらくはかける言葉にも苦慮したものの。

それでも孫三人も、今ではみんな立派な釜戸持(かまどもち)。その中の長女が家に残り、入り婿を取ってくれたのでした。

そんなわたしもなあ、早くに戦争で良人(おっと)を盗られてましたから松枝の寂しい気持ちや大変さは痛いほどわかったものでした。

あんなあ：誰が云うたか知りまへんけどな、ももひぎ三年しり八年云うてねえ、女子(おなご)ちゅうもんはな、後家はんになってからも腿や膝に旦那の温もりを思い出しながら泣く日々は三年にもおよぶそうでしたな、尻にあっては忘れるまでには八年もの時間が必要やちゅうんねんから、そりゃ松枝も寂しかったですやろうなあ。さっさと十八年も経ってくれたらこっちのもんなんやろけど。割れ鍋にも綴じ蓋いうて、どんな鍋にもそれなりの蓋はあった方がいろいろ都合も宜しいんやろうけど。自分たちの家の中で男はんに先立たれ、残された者を見るちゅうのんは不憫でかないしまへん。

それにしても昔の人はえらい粋なことを云うたものでしたなあ。でもな、ももひぎ三年しり八年てな、きつと考えはったんは男はんなんやろねエ。これまた女子(おなご)の業ちゅうもんをキッチリ知ってはいたら、こんな三年だ八年だなんて云えますかいな。ねえ……観音はん、堪忍したってやあ。

その二 錫(すず)メッキのブリキ缶

この画を眺めているとねえ、描いてはった情景までも思い浮かべることが出来ますねん。

それは去年の秋のこと…昭和四十一年の九月も半ばを過ぎた頃…。

毎年のことやけどなあ、斑鳩の地を濡らす秋の長雨は夢殿さんを朧(おぼろ)の中に包み込みますねん。伽藍周辺さえもけぶるようにうつります。

境内に敷き詰められた玉石は水にふやかした黒豆さんの様子を見せながら、伽藍の一部になったようにピクリともしまへん。涅槃色(くりいろ)云うんですやろか。

中秋の柔らかな陽ざしさえあれば、白地に薄く藍を溶かし込んだ石の姿は訪れる参詣者の足元に心地よい旋律を奏で響かせるに一役買ったことでしたやろう。

さながら天と地が繋がった合図を想わせるようで、雨をおとすお空も同じ色を見せています。それは

黒豆さんをふやかした後の水で塗りつぶしたようですね。

太く、切れ目なく墮ちる雨垂れは、吉野の平宗（ひらむね）さんの葛（くず）きりをお空から突き出したようにみえ、それは救世観音菩薩の功德の顕しのようにも思へ、数多（あまた）悪い事（わずらいごと）からの救済を試みる蜘蛛の糸にも見えるようで、時には下から上へ降っているようでもあり、昇ってゆくようでもありと映ったものでした。

まるで足元から踏み板を外されたようで心細く頼りなくも感じられましたん。

「お千代。さて、この先どうする。進んでみるもよし、退いてみるもよし」と突きつけられてもいるようで、些（ち）かハッとさせられたものでした。

【ああ… 何でしょう、思い出したら平宗さんの葛きりが食べたくなってきましたよ。こんな歳になっても食べたいは衰え知らぬものなんですよるか。ああ… 今夜の夕餉は平宗さんの柿の葉寿司にしましょうか。松枝と帰りに買ってゆきましようか…】

わたしが法隆寺さんにお参りに来るようになってから幾度の秋を迎え送ったことですよ。秋雨に眺め入ると現（うつ）と夢を行き来するようで些（いささ）か心もとないねんなあ。

地面から浮かび上がった雨水が境内に敷かれた玉石の隙間を埋めています。雨は間断なく木立や伽藍、地を打つものの、境内を取り巻く仏性が幸いしているのでしょう静寂に馴染みをみせてはります。

今また一人の老男がいつもの様に長靴を履き、纏わり（まとわり）憑（つく）く雨水すら慈しむように足を小さく出しながら伽藍むこうへやってきました。

この御仁、名を不染鉄というそうで、どうやら画描（えかき）を生業（なりわい）とするのか、足しげく通い来ては法隆寺さんや夢殿さんの画を描いてはったようです。境内で顔を合わせるようになってから既に四十年も経ちましたか。毎日毎日、雨の日も風の日も片道一里半（6キロ）の道のりを歩いて通（かよ）ってはったようです。

鉄さんは足元に目をやるや、足でそっと玉石を転がしながら弄（もてあそび）はじめました。

コロン、コロン、カチン、転げた玉石はぶつかり合いながら明後日（あさって）の方角に転げてゆきます。

何やら生きているようでもあり、あらぬ方向へと転げる様子は人の一生を見せられているようにも思えたものでした。

雨の中、傘を持つ手が足の動きに呼応をみせ、時折大きく右へ左へと揺れをみせはります。踊っているようにも見え、踊らされているようにも見えましてん。その姿が寂しそうでなあ。きつと鉄さんは秋が好きなんやろうなあ。人目を気にせず存分に泣けるから秋の雨模様が好きなんやろなあ…。そう思ったものでした。

でもなあ、不思議なお人でなあ、境内を歩くときは傘のかかる範囲にしか足を運ばず、静かに歩きはるんやけどな、手を合わせるわけでもなく。お勤めをするでもない、ましてや何かを願うわけでもなく。ただひたすらと傘を手に地面に目を落とし、むこうに佇みはってねえ、哭くでもなけりや憤るわけでもなく、粗忽を見せるわけでもない。それが按配寂しそうで寂しそうでなあ…。

中にはな、博打にでも行くんですやろなあ、何人かで連れ立って来ては賽銭箱に乱暴に賽銭を放らはって柏手を打つ埒(らち)なき男衆も見ることが出来ましたからなあ…。

しばらく見かけぬなと思へば、長野に行っていたと善行寺土産を私とこのお店まで届けてくれる心優しきお人でした…。わたしが数年前に大病を患ってからというものの、顔を合わせるたびにわたしを気遣い声をかけてくれるのですが、どうにもわたしよりも鉄さんの方が儂(はかな)げな按配を感じさせたものでした。

聞く処によると、東京小石川(現在の文京区)にある浄土宗の寺、光円寺の住職の倅ということではあったものの、そのくせ背筋のシャンとしたところは覗えず、とても仏の道と近いとは思えまへんでしたなあ。

ところが人は見てくれではわからないもの。話は聞いてみなければわからぬもの。なんでも昭和のはじめ頃には僧侶になるための検定試験である律師なる試験も修めていると聞かされたのには随分驚かさされたものでした。

第二次大戦後の混乱期には女学校の校長も務めていたようで、とき折地元の女学生数名を従えてお参りする姿を見受けたものの、境内でわたしを見つけた途端、その気配引率からは甚だ遠く俯き加減に歩く様子からは引率されている気恥ずかしさが滲んで見えたものでした。

「よう降りますなあ…」

「はい。本当に…」

どうということもない当たり前の挨拶が毎度のこと交わされます。

鉄さんは風呂敷包を開くと道具箱を取り出し、雨のかららないところにイーゼルを立てます。そこに古新聞で何重にも挟み込んだ画紙を置くくと画を描き始めました。

粗末な空き缶を降りしきる雨の下に何個か並べますと、立ちどころに仏性がかき消され缶を打ち付ける雨音が広がります。缶の大きさがそれぞれ違うせいなんですやろなあ。凡ての缶から流れる音が違いましてな。それはまるで声明(しょうみょう)のように境内に響いたものでした。

【あ…、かき消されたと思った仏さんの声は姿を変えはただけなんやろか。缶を打つ雨音さえ愛おしく思えるのは、観音さんの成せる御業(みわざ)なんですやろなあ…】

目を閉じてその音を聞いてますとな、水琴窟(みづきん)うのがありますやろ。井戸のような蹲踞(つくばい)の小さな隙間に耳を寄せますと、一滴、一滴おちる水滴が仏さんの内緒話を聞いている様に心落ち着く音が優しく響きます。お里の内緒話もお人によっては水琴窟(みづきん)みたいなもんかもしれまへんなあ…。

カン、キン、コン、カチャ、ヒチャ…缶の中に水がほどほど溜まりだすと音が止みはじめます。

雨のわからない庇(ひさし)の張り出した下、鉄さんは夢殿を描いてはりました。

「いやあ…これはやはり描きにくいなあ… カンバスが湿気を吸って鉛筆が走らない」

誰に云うとは無く鉄さんが肩を落として呟(つぶや)きます。

「下色だけ入れておくとするか…」

雨を受けていた空き缶を軒下に運び込むと、三十分も経っていないのに一番小さな缶には水が溢れんば

かりに溜まってはりました。

「随分溜まりはったね… お水…」

「そうですね。チョット薄めすぎですが、まあ、下塗りなのでやれるでしょう」
鉄さんがはにかんだ笑顔を見せ答えます。

「あら、鉄さん、絵の具は入れしまへんの？」鉄さんは四つの缶にそれぞれ絵筆を放り込むと、グルグル水をかき混ぜてはったのです。

「荷物になるし雨が降っていますからね、絵の具チューブをダメにしては大変なので、予め缶の中に絵の具を塗りつけて乾かしておいたんですよ」

水がたまった四つの缶は、一つの缶を除いてどれも同じように黒豆さんをふやかした水のように薄黒く見えているのです。

「歳のせいやろか、目も弱わなってどれも同じ色に見えるんやけど、鉄さんに違いはわかりはるの？」
鉄さんはニコリとすると、缶の側面を指さし「ほら、お千代さん、ここ見えますか？」と云いました。

杖を頼りにチョイと前屈みになり眺め観ますと、缶の側面は「赤」「黒」「青」「白」と、釘か何かの鋭利なもので彫られているのが判りました。

銀色の缶の肌が少し錆びつき、所々茶色くザラついて見えてましな。そこに傷つけられたところだけがピカピカと金彩を放って観えました。

「鉄さん… ごめんなさいね、うるさくて。白っぽいお水は缶の横腹に白って彫ってはりますけど、これも下塗りに使いはるの？」

「使いますよ…今日は雨が強いですから画紙が湿気を吸っているので判り難いですが… 半乾きの処にポツポツと白を置くと滲(にじ)みや暈(ぼか)しが花火のように広がるんです」

鉄さんは嫌な顔を一つも見せず、この歳よりの質問に機嫌よく答えてくれるのです。

「なんだか綺麗ですねえ… 缶の彫ったところだけがピカピカ光ってはりますねえ…」

「今では珍しくなりましたからね、錫(すず)メッキのブリキの缶は…」

「錫メッキのブリキ缶ですか… そんなものがあるの…」

そこまで云ってわたしは思い出しましたよ…わたしは錫メッキを知っていたのです…。



わたしが十三、四のころでしたか、その日の店番は祖母のウネがしてましてな。

「お千代、茶の間の戸棚の上から二番目の引き出しを開けておくれ…そうそう、そこを開けるとね鉄なんがあるだろ？」

祖母の云う通りに戸棚を開けると、そこには裁縫道具の針や糸、そして鋏やら箆手などが几帳面に整然となおされていました。

「そこに針が引っ付いた、まあいい平べったい石みたいなものがあるかい？」

「うん。ある…」

「その針箱に針を外して入れたらそのまあるいのをこっちに持って来ておくれ」

そこには確かに針が引っ付いたまま散らばることのない、まあい平べったい石のような物がありました。針を外しお店の祖母のもとへ持ってゆくと、西洋風の立派な身なりをし口ひげをたくわえたおじさんが立ってはりました。

「はい、ありがとうございます。」

わたしは何が始まるのかと好奇心が抑えられず、店の番頭席を離れることが出来ずに祖母の手元を正座をしながら凝視するのでした。

ふと目をお客さんのひざ元の上がり框(あがりかまち)に移すと、そこには綺麗に銀色に輝く「茶道具一式」が整然と並べられていました。

【綺麗： おてんとうさまの光を受けてピカピカ光ってはるわあ】

とも箱もあり、筆字で箱書きが書いてあるところを見たわたしは、なにか途轍もないお宝が持ち込まれたと思っただけです。

祖母は平べったいまあるい石の玉を自分の前に置くと、急須を手に取りそのまあい石のようなもの上にかざしました。

「カチン！」

するとどうでしょう。その平べったい石の玉は急須に飛びつくように張り付いたのです。

「あちゃああ… あかんかあ…」

「あきまへんかあ…」

声を発したのは祖母とおじさんが同時でした。

わたしはその光景を見ていて何のことか皆目でした。なにがどうなっているのか、なにがあかんのかが気になって仕方ありませんでした…。せやけどね、そのお客さんの落胆の様子を見ると、その場で祖母に聞くことが躊躇(ためら)われたのです。

「お千代、これを元あった場所に戻しておいてちょうだい」

その言い方からは、戻したらお店には戻ってくるなという調子が感じられました。

程なくすると、お店から呼ぶ声が聞こえてきました。

「お千代、さっきの石の玉を持っておいで…」

「はあ」わたしはこの瞬間が大好きでしてな、祖母や母はことある毎に新しい知恵を授けてくれました。

「お千代、これはな、磁石云うてな、鉄ととても仲がええねん」

そういうと、先ほどのお客さんが置いていかはった急須に近づけると、それは祖母の指先から飛び出すように急須に張り付いたのでした。

「お婆ちゃん、うちもやってみたい…」

「よしよし、ほなな、こうして下に置いて…こうして急須を近づけてみなはれ」

祖母は質草に傷がつくことを懸念したのでしよう。急須の底をかざすことしか許してはくれませんでした。

「…せやけどな、この磁石っちゅうもんはな、値打ちの高いもんとの相性は良くないねん。せやから金や銀との相性は今一つちゅうこっちゃん…。ほれ、そこからその簪(かんざし)を持って来てごらん、幾つか並んでる箱がありますやろ…そうそう、それをここへ…」

箱を祖母の前に届けると、祖母はその磁石というものを簪の上にかざしはじめました。

「これは銀やな… これは鉄、これはええもんやねえ…金細工や…」

そう云いながら磁石をかざして真贋の見立てを教えてくださいました。

「さっきのお客さんのこれはなんやの？ 磁石が引っ付いたちゅうことは鉄なんやろう？ なんて

こんなにかピカピカ光って綺麗なん？」

「錫(すず)メッキいうてな、鉄の上から錫でメッキをかけてはるねん…せやから、磁石が吸いついてしもうたんやな…」

祖母はそういうと簪の並んでいる箱から金細工の施された簪を取ると、わたしの潰し島田に足りない結髪(ゆいがみ)に刺しながら「お千代な覚えておきなはれや。人の相性云うもんはな、得てして磁石みたいなもんと思いうて惹きつけられるもんを有難く思いがちやけどな、そうやないで…結局は目を養わなあかん。澄んだ目をもちなはれや…。お千代が金や銀のように値打ちの高い人間になれば、磁石は寄っていきへんから安心やけどな…」そう言いながら優しく笑うのでした。

あの簪が祖母の形見となるまでに、それほど時間はかかりませんでしたなあ。

あら…鉄さん…そういうたらあんたも鉄やないの、ほな、わたしが磁石かい？ あんたが引き寄せるんだか、わたしが引き寄せられるんだか… どちらにしても引っ付きたがるんやろうなあ…あんたもわたしも大事な人を早くに見送ってるから…なんや他人ごとちゃうねんやろなあ…きつと…。

その三 鉄さんの憂鬱

「お義母さん、大丈夫ですか？ しんどいんじゃないですか？ 無理しんど休んでくださいねえ」嫁の松

枝がよう面倒みてくれはりましてえ、わたしもこうして鉄さんの描いた画を眺めることができまして。それはもう本当に有難いことですわ。

「松枝はん、ゴメンねえ… いつもこうして擱まらしてもろて。あんた大丈夫か？ 重たいことあらしまへんか？」

「何いうてますのん。手綱引いてもろてるだけですよんか。なんもしんどいことありません。あつ、お義母さん、いい席が空きましたで… あそこに座って眺めさせてもらいましょ」

不思議なものです。こういう時は足がこう…シャシャシャいうて動きますねん。丁度画の正面。少し距離はありましたけど、座って鑑ることが出来るベンチシートが空きました。

「あゝ これはいい按配だねえ。これで少しは落ち着いて鑑られそうやねえ」素晴らしいながら松枝を眺め観ると、わたしが擱まっていた腰回りのゴタゴタを直してはりました。

鉄さんの描かかった夢殿さんは、秋の長雨の中に佇む夢殿さんを描かかったものなんやけどね、太い雨が幾筋も幾筋も画面いっぱい垂れ落ちてましてなあ… それが按配寂しそうに見えるのです。ただね、扉障子にほんの少しだけ中からの明かりが挿してましてな、その明かりがそりや可愛らしゅうて、

可愛らしゅうて…。

「ああ…あの明かりは鉄さんの魂なんやろなあ…早くに奥さんなくしてはって、寂しい気持ちを顕した鉄さんの魂なんやろなあ」そう思えたものでした。

夢殿さんの南の空には雲を割るように横一条の光明が射してましてな、それがまた打ち立ての真綿のように柔らかでやさしい光でした。

「松枝はん…いい画やねえ〜私この画を鑑ているとなんか泣けてきますわ。ねえ？」

「お義母さんは鉄さん鼻肩やからねえ〜わたしなんかこの画を観てると葛きり思い出しましてん(笑)はあ…なんや葛きり食べとくなつてきますわ」

わたしは吃驚しましたよ。この子に読まれたんちゃうやろか思うて。

「松枝はん…あんたなあ…似てきはったねえ〜」

「誰にですのん？」

「わたしにやないの、わたしもなさっき平宗さんの葛きり思い出しましてん…」

「お義母さん…ほな、帰りに食べて帰りましょ。晩ごはんに柿の葉寿司をこうて帰りましょ…」

長いこと一つ屋根の下、苦楽を共にして来たお蔭でしょうか、観音さんの粋なお計らいでしょうか。考えることは寸分違わずを思わせます。

「そうそう…たしか家に鉄さんの画が一枚だけありましたなあ…富士山を描かあった立派な画。お義母さんあの画はどこに直しましたん？」もう二十年以上前に鉄さんからわたしが買った画のことを松枝は思い出したようです。

「あいな、うちの柳行李わかるか？そうそう…あの柳行李や。なに云ってますのん、捨てますかいな。お婆ちゃんに崇(たた)られるわ。部屋の押し入れにちゃんとはいつているから…あんたあ、ちゃんと引き継いだってなああの行李」

「はいはい」ほういうと松枝は私の隣に座りながら足を優しくさすってくれています。

人の手ってな…、なんでこうして温かくて柔らかいんですやろ…。

わたしは孫やらひ孫やらそしてこの松枝やら…、たくさんの温かくて柔らかい手に囲まれて過ごさせてますけどな、鉄さんを想うとねえ〜自分の手しかあらしまへんやろ…なんぼお坊様の修業したゆうても、そりゃあここまで寂しかったですやろなあ……。

山海図絵 伊豆の追憶 公財 木下美術館収蔵 p n g



「ごめん下さいい… ごめん下さいい」

「はい… おや、鉄さん。どないしはりましたのこんな寒い日に」

今から二十年以上前… 昭和二十年の師走も半ば。鉄さんがうちの店を訪ねて来ましてん。最初に対応に出たのは早くに逝去した次男の嫁の松枝でした。

「やあ、松枝さん。ご無沙汰してます。面目ない。じつは年末を迎えるに窮してしまい、ついでに画を一枚かたに預かってもらえぬものかと…」

「わかりました。ほな、お義母さん呼びますからチョットだけまっけてくださいねえ」

松枝が奥のわたしの部屋に来るや早口で仔細を告げるのを聞くと、わたしは「ありがとう」と一言発しお店まで転げるように出てゆきました。シャシャシャシャ… いうてなあ。

「鉄さん、寒いところわざわざ来てくれて有り難う。なんか松枝の話しでは画を一枚預かって欲しいとか…」取り次いだ松枝は店に顔を出しません。このあたりは本当によくできた嫁でした。

「お千代さん、申し訳ない。恥を忍んでなのですが、この年の瀬、なんとも窮してしまい、無理を承知でお訪ねしました」

さぞや居心地が悪かったのでしょう。鉄さんは正月用に番頭席に飾ったご生花の藜蘆(おもと)に鈴なる実のように顔を赤く染めながらそういうのでした。

「鉄さん… わたしとこのお商売は値打ちがはっきりしているものにはしかお貸しすることは出来ませんね。せやから美術品や工芸品という文化的価値を評価する物差しは恥ずかしながら持ってませんねん。まずそこを許したってくださいねえ」

「そうですかあ…」鉄さんは肩を落としてはりました。

「でもね鉄さん…、もしも鉄さんが良ければわたしがその画を買わせてもらいましょ」

「ええっ！ 買ってくれるのですか、わたしの画を」

「お友達の画を一枚買うぐらいがなんですの… チョット遅いぐらいですわ。はい、ほななんぼで買わせてもらええのんやろね」

鉄さんはモジモジしてました。言いにくそうにモジモジと下を向いて。意を決したように一層赤く染めたお顔をあげると…

「では、お千代さんの好意に甘えて八百円で…、いや七百円で…」

「珍しいお人やなあ(笑)」

「はあ…」

「うちとこ来るお人は皆だんだんに高向(たこう)なっていかがはるのに… 鉄さんは安うなっていかがはる… そんなお人聞いたことありまへんわ(笑) わかりました。ほな、これで買わせてもらいましょ」

わたしが番頭席の上に用意したお金は「千五百円」でした。これでも高いか安いかわかりません。ただ七百元、八百円はギリギリですやろ。年の瀬を迎えるに窮しての七百元…、ほな新年を迎えるには足らしまへんなあ。わたしはそう云いながら鉄さんの手に千五百円を握らせました。

「お千代さん…、あなた画をまだ鑑てないではないですか。鑑てからにしては如何ですか」

「鉄さんがお客はんなら勿論みさせてもらいます。せやけど鉄さんはお友達です。わたしはお友達の画を買わしてもらただけ。その風呂敷に包まれた画はあとでゆっくりみさしてもらいます…、松枝はーん、はいな悪いけどね、あったかーいお茶を一杯いれてここまで持って来てくれるか。ほして、この包みを仏間へ持って置いておいてな…」



「あんなあお千代。よく覚えておくんやで。お商売先からものを買うときはな、絶対に値切ったらあかん。びた一文たりとも値切ったらあかん」祖母のうねの教えでしてん。

「でも… みんな闇市で買い物するときに、まけてくれまれてくれっていいはるよね」

「そや。でもな、うちこのお商売はな逆なんや。もつとくれ、もつと貸してくれ云われるやろ？」

「うん… 皆言うなあ」

「仏さんが教えてくれる世界にはな、餓鬼道ちゅう世界があつてな、この世界はとにかくもつと、もつと…、もつと、もつとというて欲しがる世界でな、もつとまける、もつと高く…、それはそれは欲のキリのない世界なんや」

「お婆ちゃん…、うちもなあお母はんの時々言うてるわあ…、もつとお飴さん頂戴て…」

「ほうか…、ほしたらなあお千代、お母はんにお飴さんもろたらな、今度はもつと頂戴て云わんときや。ほしてなお爺ちゃんのところへ行つてな、お飴さん頂戴て云うてみ。きつとお爺ちゃんもくれるから。ほしたらお千代、倍に増えるやろ。お飴さん。ほしたら誰からも小言いわれんですみますやろ」

「ほな、お婆ちゃんにお飴さん頂戴云うたら、うち…、大儲けやね(笑)」

「あかん…、この手はお婆ちゃんには通用しまへん(笑)…」

「ええか、闇市で買うものいうたらな、大概値段ははつきりしてるもんが多い。高かろうが安かろうが高々知れたものや。要はお商売先の儲けちゅうこつちやな。だから値切ったらあかんのや。わたしらが値切らずに買い物したらな、お商売先がうちの質屋に来た時に、もつとくれ、もつと出してくれ… 云えんくなるやろ。人様の声いうもんは千里を走るいうてな、ほれがお商売の評判ちゅうもんになるねん。せやからな、まけてくれとは言うべからずが鉄則なんや」

事実、祖母が買い物先でまけてくれという言葉を使ったところは見たことがありませんでしたなあ。逆にうちこのお店にきはったお客はんは、みな、祖母の顔を見るとあきらめたように自分で金額をいうこともなく、祖母が提示したお金をもって帰りはりました。

昭和二一年正月の松もまだとれぬ頃… 鉄さんからの年賀状が届きましたなあ。

ハガキの裏には朗々とした感謝の言葉と共に縁起物の画が微に入り細にわたって描き込まれてました。

「お義母さん、大切に… 画と一緒に直しておきましょうか。将来、もつと値打ちが出るかもしれまへんから(笑)」松枝が楽しそうに言葉にしました。その年から年に二度、鉄さんからのハガキが届くようになりました。わたしが鉄さんの画の秘密に気が付いたのはこのハガキの画を観るようになってからでしたなあ…。

その四 鉄さんの秘密

昭和三六年の夏の日でした。この歳の夏はそりゃあ暑い日が続きましてなあ。夏入り前の梅雨が空梅雨でしたから奈良県全域に渇水警報いうもんがでましてな、取水制限いうですやろか、お天道様の高い時間帯になると水道が止まってしまっって、そりゃあ往生したものでした。

そんな七月の三十日も間近のころだったと思います。松枝が嬉しそうに声を弾ませてわたしの部屋までハガキを届けてくれました。

「お義母さん、鉄さんから暑中見舞いが届きましたよ。また可愛らしい小さな家がたくさん描かれた絵ハガキ。こんな小さな家をようもこんなにたくさん描けましたなあ、鉄さん」

「ほうかあ、どれ、松枝はん、ちよっとその虫眼鏡取ってくれるか。はい、ありがとうございます。どれどれ……、松枝はん……、あんた、これ家か？ わたしには黒ゴマさん潰したようにしか見えしまへんわ。ようまあこんな小さい家をたくさん描きはったなあ」

「でも、やっぱりあれですねえ、本職の画家さんだけあって上手ですねえ」

「ほうかあ？ ほういうもんかいねえ」

この頃のわたしは目がよく見えなくなっていたこともあり、チョットボケも入ってきていたんでしょなあ、松枝の云うことも分かったような分からぬような、おかしいな按配になってきてましてなあ。

「松枝はん……、悪いけど押し入れから柳行李をだしてくれるか」

「はいはい、行李の中の絵ハガキが入ったお煎餅の箱ですやろ？」

「そうそう、はいありがとうございます」わたしはそう云うと箱を開けて中に直しておいたハガキを出して手に取りました。

手にした虫眼鏡で一枚一枚の絵ハガキを眺めはじめたものでした。するとそばで見ていた松枝が云うのです。

「お義母さん、鉄さんの画って風景とか景色が多いなあ……、まあ、季節の挨拶やから当たり前かもしれへんけど」と。

わたしは云われて改めてまじまじとその絵ハガキを見ました。

わたしはその鉄さんから送られて来た二十枚ほどの絵ハガキを手にしながら泣いてしまっていたのです。

「お義母はん、どうしはったんですか、具合でも悪いんちゃいますの？ あきまへん、チョット横んなりはった方がええんちゃいます？」松枝は一生懸命に気にかけてくれましたな、一生懸命にわたしの背中をさすってくれてましてんけどなあ……。

「松枝はん……、鉄さんなあ……、寂しいねん。あの人な寂しいんよ……」私はハガキを手にしたままオイオイと泣いてしまっていたのです。

驚いたのは松枝だったでしょう。何も言わずに私の背中をポンポンと優しくはたき、さすってくれていました。

鉄さんからのハガキに描かれた画のすべてにわたしは秘密を見つけたのです。

そりゃあねえ、普通にご挨拶を交わすだけのご縁のお人でしたらそこまでは感じなかったかもしれないなあ。

せやけどね、鉄さんとは仏さんや観音様が取り持ってくれたご縁。わたしがもう少しシヤンとしてたら店を松枝に任せたまま鉄さんの面倒を見に転がり込んでたかもしれないなあ……。



むかあしむかーしなあ、私が尋常小学校から高等小学校に上がった年でしたから、そう一年生でしたやろか、せやから十歳の時でしたわ……。

「ぐーにーはん、ぐーにーはん、お千代のあだ名はぐーにーはん」

ある日を境に、突然降って湧いたようにわたしにあだ名が付けられました。最初はわたしにも何のことかわかりしまへんでした。それが毎日毎日、来る日も来る日も云われるようになりましてなあ。

ある日、学校から帰り祖母のウネに「おかアはんは？」と尋ねると買物行ってるいはりましてなあ、なんか急に寂しいなって祖母の膝に突っ伏して泣いたんですわ。驚いた祖母は「どしたん？ 学校でなんかあったか？」そう優しく聞いてくれました。

わたしは泣きながら祖母に聞いたものです。

「おばあちゃん……、あんな、学校でなあ、みんながぐーにーはん、ぐーにーはん云うねん。ぐーにーはんって、なんやろか？ ……」ほうしますとな、祖母が大きな声で笑い出しましてん。わたしはなんやビツクリしてしまいましたなあ。

なんや面白い漫談か何かのことかもしれへん思うたぐらいました。ほうすると祖母は急に真面目な顔になると……。

「いいかお千代、今から云うことよう聞くんやで。これからはお千代が大きゅうなつてくわな、すると、いろんな知恵がついてくる。ほしてな、周りの人間達からかけられる言葉はもっと厳しゅうなる。言葉が無ければもっと厳しい、そりゃあ恐ろしい態度を取られることもある。ええか、負けたらあかん。せやけどな、おばあちゃんという負けたらあかんちゅうのは、喧嘩をせっちゅうこっちゃんないで。大人の言葉にな、臍を噛むいうてな、どうにもならない悔しさを顕した言葉があるんや」

「ほぞ？ ほぞってなんやの？」わたしがそう聞きますとなあ、祖母はわたしのお腹のおへそをチョンチョンとつくつくと「ここやがな、お臍さんや」というのでした。

「お千代、おまえさんは自分で自分のお臍を噛むことが出来ますかな。……そうや、できしまへんやろ。噛めない臍を噛みたくなるほどの悔しい気持ち。それを大人たちは臍を噛む云うてますのんや。でもなお千代。噛むのは臍やないで。唇や。それもなあんだの心の唇や。うちこのお商売はなあ、お金を借りてくれるお人がお客はんや。ええこと教えてやるか、お千代がなあ、大きゅうなった時にな、必ず、必ず見たことあるお人が、ほれ、あの暖簾をかき分けて入ってくる。必ずや」祖母はそこまですを云うと首だけをしゃくり上げるようにお店の暖簾を見たのでした。

「おばあちゃん、それはうちの知っている人ちゅうこと？」

「そうや。同級生かもしれへん。年下のほれ…、なんちゅうたかいねえ…、せやせやお里ちゃんかい。かもしれへん。どこの誰がいつお客はんになるかもしれへんのや。お千代…、人間の勝負処云うのはな突然来る。その時のために今は心の唇をグツと噛み締めて色んな知恵を溜めなはれや」そう云うて笑うのでした。

「わかった。わかったけどわからんのがな、ぐーにーはんってのはなんやの？」

「ああ、それは質屋のこっちゃん。むかーしな、質屋云うもんは博打場のすぐそばにあってな、博打で負けて借金こさえた人や、もうひと勝負したろおもた人たちが、身ぐるみ預けていったところやったんやな。博打場ではな、五という数字をグ云うてな、ほして二は、にのままや。ほしてな、奇数を半、偶数を丁いうて二つのサイコロや花札でな、出た数字の丁半を決めるいう博打があった。五と二を足すと七やろ、質屋の七に通じますやろ。ほして七は半の目になる。せやからグーニーハンなんやな…。昔はな、チョイとイカレタ博打うちは、質屋をグ二屋いうて呼んでましたからな。にしてもこれまた、こまっしょくくれたガキやな」祖母はそういうと声をたてて笑うのでした。

次の日、わたしが学校へ行くといつもの子達が徒党を組んで「ぐーにーはん」とわたしのあだ名を呼ぶのでした。

そこへなあ、いつもは教室でもひとりでおる男の子が現れるやいなや、三人の男の子たちを一瞬でけり倒してしまつたのです。

わたしはその光景にあっけにとられ何も言うことが出来ずただ眺めることしかできしまへんでした。その日の午後の休み時間のことでしたか、わたしが教室に戻ってみると男の子二人が言い合いをしてましてん。言い合いしてる一人は、わたしを助けてくれた男の子でした。もう一人方は町の相談役をしている家の小倅でした。

「偉そうなことぬかすんやったらな、家の家賃払ってからにしてもらおうか」

「お前になんの関係がある！ 親のこっちゃんないかい。わしに関係あるかい！」そう言い合っていたのでした。どうやらわたしを助けてくれた男の子の家は窮していたようであり、教室の中でも何となくそんな話が出ていましたが、その話を聞きつけた小倅が朝の仕返しとばかりにみんなの前で窮状を暴露してしまつたんですなあ。

そうなのです。朝蹴り飛ばされた中にはその小倅も入ってましてん。

それからその男の子は教室で一人であることが多かつたようで、気になり時折みると、いつも教室の窓のそとに広がる空を眺めてはってねえ…。雨の日も晴れの日もでしたなあ。

あれから二十年が過ぎたころですやろか。暖簾を…、そう、こう肩をすばませ首を前に突き出してぐるお客はんがいらっしやいましたなあ。

時計をひとつポンと番頭席にぞんざいに放らはると「二千円貸してくれ」云いはります。品物をみさしてもらいましたな「七百円」しか貸せませんいうと、大きな舌打ちをするとそれでいいわはりましたん。

「ほな、何か名前の分かるもん出してください」わたしが云うて出さはった身分証をみて驚きました。町の顔役・相談役の小倅でしてんなあ。

向こうは知ってか知らずか、わたしの顔など一切みいしまへんでした。

お金を渡すと肩で暖簾を切るように、颯爽とお店を出ていかほりました。

【おばあちゃん、あんたは偉いお人やったなあ……、来ましたで、来りましたがなあ】
わたしは一人そう笑ったものです。

わたしは鉄さんを見ていると一人でいたあの男の子のことを時折思い出したものでした。どうしてはるやら…、良い一生を送ったであろうことを観音さんに祈るのでした。



鉄さんから送られ来る絵手紙の秘密、それはどのハガキにも一人の人間も描かれていなかったことだったのです。

人が住んでいる集落や、田畑が描かれたもの、そして山間の小径、冬の雪道…。どの画にも人が一人も描かれていなかったのです。寂しいんやろうなあ。苦しいんやろうなあ。なんて寂しさを抱えたお人なんやろう。わたしはそう泣いたものでした。

その後、鉄さんの画集が発売になると聞き、わたしはその画集を買わしてもらいましてんけどな、そりゃあもう、小さな字で説明が埋め尽くされていきましたから松枝に読んでももらいました。すると…「立派な画や大作を描こうとは思わない。寂しいんだから寂しい画を描きたい」と鉄さんの言葉が載っていたのです。

「お義母さん、鉄さん寂しかったんですなあ」松枝がそう言葉にしました。

「寂しかったんとちゃうねん、あの人は今でもずっと寂しいままやねん」そういうとわたしはまた声をあげてオイオイ泣いたものでした。

その五 ことわり

なんですやろなあ、なんかかねえ色んな声が聞こえてきますねん……。とおくのほうなんですやろなあ。これまたおかしいな按配になってきましたなあ、たしか画を鑑ていたはずなんやけどなあ。ベンチに座らしてもろうて。

いろんな声が「お千代はん、お千代さん、お千代ちゃん」いうて呼んではることはわかりますねんけどお顔がみえへんよって。

なんやの、お里の声もしてるやないの……。フツツ、お里ちゃんあんたのことは声を聞いただけで分かるわ。お嫁さんたちには優しくしてやりや、せやないとあんた、閻魔さんにいじめられるで。

「お義母さん、お義母はん……。しっかりしてください、お義母はん……」松枝でっしやろうなあ、わたしのスポンのベルトを緩めようとしてもしてるんやろうけど、不器用なこでしてなあ。なんやベルトが取れしまへんのかいな……。松枝はん、あんまりほうして振ると、お腹の皮が擦れて痛いですやろ……。あちゃあああ あかんかあ……。痛ないわあ。

ん？　　なんて、松枝はん、なんていいはったん？　　鉄さん？

こりゃあかん、あきまへん。おきにゃあ……、松枝はん、あんたうちのズボンどうしてくれはりましてん、チャンとズボンはかせてますやろなあ。

「お千代さん……、わたしですよ、鉄です。画、観てくれましたか？　いい画でしたか。扉口の明かりはね千代さん。あれはあなたに貰った明かりなんですよ」

微かに見えていたはずの鉄さんのお顔が次第に暗がり、に墮ちてゆくと周りの声も聞こえんようになりましてん。

ほうしましたらな、目の前がばあぁと明るくなったとおもたら……、その光の中に観音さんがおわしてなあ、こういいよる。

「お千代、進むとき来たり」と。

「お迎えでしたんかあ……、

あゝそうそうゝ

風も吹くなり

雲も光るなり

生きている幸福は

波間の鷗の如く縹渺と漂ひ

生きている幸福は

あなたも知っている

私もよく知っている

花のいのちはみじかくて

苦しきことのみ多かれど

風も吹くなり　雲も光るなり。

ねえ観音さん、この詩はなあ奈良を愛し時おり遊びに来てはった女流作家の先生が詠んだ詩なんやけどね……、お里ちゃんのところには奈良に来るたびにフラフラと出入りしてはったらしいねんけど。なんや古道具屋が好きやちゅうて。そん度にお里が「友達が来た」いうて自慢してはってな。

禍福は糾える縄の如し。帳尻ちゅうことですなんやろねえ。

ところで観音様、訊き難いやけどねゝあんさん幾つにならはったんかえ、えっ？　満か数えかて……そな細かいこと気にしますかいな、あの世の理(ことわり)で」

了

夢殿「秋涙」令和六年版脱稿　令和六年二月九日　二万一七〇〇字

令和六年二月十五日 \rensuji {07} : \rensuji {30} 推敲済み

小説 夢殿 「秋涙」 付録作品 『なごり藤』

小説夢殿・秋涙・付録作品

なごり藤



茉莉花の

にほいにいたり

藤の花

なごりつきえぬ

似たものどうし

里

なごり藤 表紙・jpg

令和六年六月十四日

著 飛鳥世一

『なごり藤』

昭和六年六月三日。水曜日。

今日はな友引でしてん。朝からお母ちゃんが五月蠅うてな。次から次に用事を云いつけはるねん。躰はひとつやちゅうねん。どの道嫁の文子に手伝わせるちゅうたかて、とどのつまりの悪者はうちになるやろし。どうせ悪者になるぐらいやったらええねん。塩梅の良(い)いところで文子にまかせて遊びに行ったらうなりますやんか。今日はどこ行ったりまひよ…

「文子はん…文子(ふみこ)はん、あのなあ、大女将がな店横の倉庫ありまっしやろ、ほの中を片付けて欲しい云わはってますねん。あんた悪いけどチョット手伝ってくれるか。二人でやれば早いですがやろ。…あたり前やがな、あんた一人にやらせますかいな。おや、あんたなんやのその蛸谷(こめかみ)…どうしはったん？夕べか？ほんなどころにお灸すえたって、あんた、火傷でもしはったらどうしますねんな。紅(あこ)うなってますがな。頭痛(あたまいた)いてか、ほりゃあ気の毒なこっちゃ。片付けおわたらなゆっくり寝てなはれ。大女将にはうちから云うとくし。ほなチャツチャやまひよか」

…思うてたんやけど、文子がなんや頭が痛い云いはってなあ、なんぼうちかて…、いやいや、ほないなことできますかいなくそうおもってな一緒にやりましたがなあ片付け。まあ、要領の悪い子でしてなあ柳行李を持たせれば腐った行李の底は抜ける、鍬を片付けさせれば吾(わが)の足に落とす。鼠が走り回れば腰抜かす。嫁に来てから何年たってはりますねん。

「おかあはん、古道具屋で何するところですか？…ほな質屋さんみたいなもんやろね」文子が嫁に来るちゅうて決まったときに最初に聞かれたことがこれでした。云うてええことと悪いことちゅうのがわかりしまへんねんなあ。グニ屋と比べよるちゅんは何事かちゅうて怒りましたがな。こんときな、うちもう一つ癩に障ったことがありますな、質屋をさん付けにしてからに古道具屋にはさん付けせえへんかったんですわ。うちな息子に云いましてん。「ええか、古かろうが新しかろうが道具は道具や。文子はんにはちゃんと教えなはれ。うちとこのお商売を云うときは道具屋さん、道具屋はんちゅうて云うように」てな。

なんやこの日記も小言と愚痴ばかりになってきましたがあ。

今日は片付けが終わってからなお千代姉ちゃんところ行きましてな、一緒に春日神社はんに詣でましてんけどな終わりがけの藤花がそれはそれは美(うつく)しゅうに咲いてましてなあ…

「……ん？歩くのはやいて？お千代姉ちゃんが遅いだけやんか？大体お姉ちゃんは昔からなんでも遅うてな、早いのは男はんに手エだすことだけでしたやないの(笑)あのチンマイころからやから、うちは敵(かな)わんわあおもて、いつもお姉ちゃんが飽きはるの待ってましたがな。……お千代姉ちゃんは二言目にはうちの内緒話のこと云いますねんあゝほおかあ……お姉ちゃんに内緒話したことありまへんでしたかあゝまたあ、そんなイケず云いはってからに」

■
むかし話をしもってな歩く道ちゅうのも良いもんでしてなあゝ道端で首を垂れる菜花が初夏の風にそよぎますねん。

水無月に

ともにあるきて

祈るみち

無病息災 夏越しの祓

歩きはるのが遅いお人と歩く道もかけがえのない道に思えてきます。

…… あんなあゝいつもの見慣れた景色が違って見えますねん……

■ 「ほうやで……何を云うてますねん。春日神社はんの式年遷宮のときの正遷宮の大祭は去年の十一月十日でしたやないの。一緒に行ったやないのお姉ちゃんど。……そうすねんて、あんどきなお姉ちゃんお神輿担いではった男はんのお尻ばかりみてはって(笑)なんて云うたか覚えてはります？ 知らん？都合が悪うなればポケたふりしますねんからかなわんわあ。あんなよう聞いてなはれや。みんないいお尻してはるなあゝももひぎ三年しり八年ゝ云いはったんよ。忘れますかいな……えっ？うちがかえ？そんなこと云いますかいな……なんやのそれ……お千代姉ちゃんあんたもしっかり覚えてはるやないの……云うてるまに着きましたなあ。あゝええ藤花さんやねえゝ あそこに座って休ままひよ。お抹茶さん頼んできますわ」

■ 春日神社境内の藤棚はんはなごりをみせてましてなあ。盛りはおわりちゅうことでしたんやろなあ。う

ちらもポチポチ盛りは終わりなんかもしれまへんけどな、名残(なごり)には名残の楽しみ方であり美しさちゅうもんがありましてな

茉莉花(まつりか)の

にほいににたり

藤の花

なごりつきえぬ 似たものどうし

ほうやったわゝ 文子の頭痛(あたまいた)は治ったんやろか。

了

令和六年六月十四日 脱稿

エッセー 不染鉄「夢殿」とわたし

不染鉄「夢殿」とわたし

痺れた。他に、我が魂の揺れを的確に表現するに足る言葉を紡ぎあげることが出来まい。そう感じられるほどの作品だった。

二千十九年の十一月。

わたしが初めて不染鉄という画家の存在を知ったタイミングであり、わたしが小説というものを真剣に書いてみようと考えたタイミングでもある。事実、この日から数日後に「夢殿・第一形態」を書き上げている。初稿は原稿用紙五枚に足りない程度のもだった。

今回、この『夢殿』作品集には第一形態を綴じることを見送った。分かりやすい話し、綴じるに値せずとの判断が働いたということである。ただ、2019年のブログでも書いていることだが、色々な書き方が出来るようにこの夢殿を今後も書いてみたいという思いは綴っている。

その後、延べ三本ほどの夢殿を書くに至っている。

さて、では思い出と共にチョット振り返ってみよう。

■「夢殿第二形態」は第一形態の完成度を少しだけ向上させ、使用する言葉の質感を上積みさせることが出来たと感じている。

とある小説の勉強講座で、読んだ若者からの感想で言葉の使い方がハードボイルドっぽく感じると云われたことはある意味その後の気付きとして我が脳裏に刻まれており、感謝しなければならないと感じている。有り難うございます。

また、他方の講座の先生から頂戴したお褒めの言葉は未だに書くことに対するモチベーションとして強くわたしを支えてくれている。

■「夢殿第三形態・泣くひと笑うひと」は、その背景に歴史時代小説の理論を軽く滲ませ、ジャパニーズファンタジーの雰囲気仕上げた一作であり、この辺からなんとなくではあるものの、わたしの抱く方向性へと近づくことが出来始めたようにも思えた。

チョット失礼な物言いになることをご寛容願いたい。M先生の講座の講評では「おっさん、読めんのかい」と感じたことは否めない。これはわたしの作品に限らず、他の生徒さんたちの作品に対する講評姿勢についても云えたことなので、なんだか丁寧さが感じられない講評となったことは覚えている。

光○社のシ○ートショ○の宝○に応募したのだが、アチラの会社さんのズルっこいやり口には最後の最後まで閉口させられた。最後の嘸ませ犬、なんだよあれ。

これとあれと比べさしちや気の毒でしょう。どっちが気の毒かは書かないけどさ。大分無理云ったんじゃないの？

あれで嫌いになっちゃった。あの会社。

■「夢殿第四形態・秋涙」は本来原稿用紙百四十枚を目標として書き上げた作品だったが、わたしの今の能力において百四十枚という原稿枚数は荷が勝ち過ぎていたようである。

小説としては無駄にダラダラとし、塵埃に塗れ壊れたものを修正するだけの能力は無かったことから、大幅に原稿を落とし五十枚程度のものへとまとめ完成をみた。結果としての出来は良いものとなったと感じており、ある程度の年齢層には読んでいただける物とするには出来たと考えている。

またもやM先生のお話しになるが事前に送られてくる講評原稿に「しかし、関心するやら呆れるやら……云々」の言葉を用い講評して頂けたのだが、わたしはこの言葉を許せなかったのである。

事前の前振りがあった。第一回目のことである。

『小説書きは嘘書きが云々』わたしはこの一回目の言葉に違和感を強く持った。これが無ければ「呆れ

る」に対して食って掛かることは無かっただろうし、最大級の誉め言葉として受け入れる余白は残しておいたのだが、金とって教えるのであれば、呆れないものを書けるように指導したまえという頑なさが表に出てしまった。

懐かしい思い出である。その節は、失礼いたしました。

本稿は、何故わたしがここまで「夢殿」という画に執着をみせ、何がここまで何本も「夢殿」を書かせるに駆り立てたであろうかという一端にフォーカスして書き進めてみようと考えている。

一つの分かりやすい例として挙げるのであれば、フィンセント・ファン・ゴッホの「ひまわり」であり、モネの「睡蓮」を思い出して頂ければ良いのかもしれない。同じテーマ、同じモチーフの作品を彼らは描き続けていた。例えば日本画家であれば伊東深水の美人画なども同じ系統の作品を描き続けていたことは知られたところであろう。

わたしの美に対する考え方の一つを紹介させて頂くことをご寛容頂くのなら、美しい絵画には時間が閉じ込められている〜というものがある。例えば遠近法だが、これは最も簡便に時間の過去現在未来を顕した姿であり、画家は遠近を使って時間の移ろいであり、モチーフの発信する時間を表現しようとするのである。

そういう意味においては「遠近」は原始的時間の単位のひとつということが云えるのではないだろうか。

不染鉄の手による夢殿を眺め観ると、この画家の類稀な才能の片りんに触れることが出来る。遠近は、概ね奥行きで顕されるものであり、奥行きでの処理の仕方、空間処理の仕方に画家の腕の冴えを見出すことが出来るのだが、不染鉄の場合、奥行きだけではなく「高低」の支配能力に長けていることがわかる。夢殿という画。あの位置から、あの目線から見える夢殿が結ぶ像はあの画のようになることは無い。観得るはずのない画姿を「高低」を支配することによって観る者の足元をぐらつかせているのである。

どこか、この世のものならざる気配が感じられる理由だろう。

わたしがあの画をはじめて見たときに、「この画自体が信仰の対象となっても不思議ではない」と紹介しているが、不染鉄という画家、そういう画を描く画家である。

では、小説としてそういう世界観を踏襲することが出来たのかと問われたらばどうなのだろう。

そこは寧ろ読み手に判断を委ねるべきではないだろうか。

「何やら、足元がグラグラするな」と感じて頂ければ概ね上手く行ったのかもしれない。

どこまで行っても趣味嗜好の話である。
画家がタイトルはつけてもテーマを自ら語らないように、小説家も自らテーマを語る様ではいつまでたっても一人前にはなれない。

読み手の皆さんに感じたことをお話し頂けるようになってなんとか小説書きとして名乗れるようになるのではないだろうか。どの道、わたしの様な未熟者が云々できる話ではない。

今回、この作品集にはコメントが入れられるようにしておいた。

もしも良ければコメントを入れて頂くのも有難い。

作品に関してであれば、どの様なものでも有難い。よろしければ一筆入れてお帰り頂きたい。

また、気に入って頂けたら、ダウンロードして頂ければ飛び上がって喜ぶ。是非とも喜ばせて欲しい。

尚、今後「夢殿」関連作品を書いた際にはここに併せて綴じさせていただくこととする。

詩する 詩編 『道程』

詩編『道程』

背負子をしょって歩いてる

石がたくさんはいってた

躰傾け道を往く

俺は重いでしようと声かけた

男いふ

なあに、しよえる石を集めただけさ

躰が前えとのめってますよ

転ばないでと声かけた

男いふ

踏ん張るためにのめるさ

私は声かけ、それでは周りの景色も見えません

野ユリが道端こうべをきざみます

男いふ

なあに、拾った石が教えてくれる

山で拾った石は焼けたにほい

川で拾った石は水のにほい

草原の石は草露のにほい

男、やにわに立ち止り

後ろ振り向き汗拭う

ウチは訊ねる、何見ていると

後ろの景色と足跡さ

野ユリの橙あお空染めてた

山あり川あり草原あり

爪先だけが抉れた足跡あり

僕が探した自分の足跡

きつと並んでついでるはずさ



アグリ.jpg

背負子をしょって歩いてる
石がたくさんはいつた
躰傾け道を往く

俺は重いでしょうと声かけた

男いふ

なあに、しよえる石を集めただけさ

躰が前えとのめってますよ

転ばないでと声かけた

男いふ

踏ん張るためにのめるさ

私は声かけた、それでは周りの景色も見えません

野ユリが道端こうべをきざみます

男いふ

なあに、拾った石が教えてくれる

山で拾った石は焼けたにほい

川で拾った石は水のにほい

草原の石は草露のにほい

男、やにわに立ち止り

後ろ振り向き汗拭う

ウチは訊ねる、何見ていると

後ろの景色と足跡さ

野ユリの橙あお空染めてる

山あり川あり草原あり

爪先だけが抉れた足跡あり

僕が探した自分の足跡

きつと並んでついでるはずさ

世一

アンソロジー・星になりたくて月になりたくて

著 者 飛鳥世一(辻話人〔フル〕)

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
